



千年記



taichiumi

その腕輪に出会ったのは、まだ私が若いころだった。

当時、私はある港町で暮らしていた。古くから栄えていたその町は、様々な文化が混ざり合っ
ては花を咲かせて、そして消えていく場所であった。両親を忘れ、一般的な幸せを忘れ、ただ目
の前にある出来事に日々を費やししながら、押しつぶされて消えてしまわないようにと必死に生き
ていた。

そんなところに私は腕輪と出会ったのだ。そのときは、まさか私の人生をここまでこの腕輪に変
えられるとは夢にも思わなかった。私も所詮、歴史の波に消えて海に沈む一片の葉だと自身を思
っていたからだ。

腕輪のことを思い出すと、心と笑みがこぼれる。今はもう、あの繊細な彫刻も、深い輝きの紅
の石も見ることができないのは至極残念なことだ。しかし、今でも心に焼きついている。忘れよ
うもない。

なぜなら、私は、千年をその腕輪と駆け抜けたのだから。

お前も知りたいかい。ならばこのまま聞いていてくれ。こんな日は、どうもおしゃべりになっ
てしまうからいけない。私も歳をとったのだろうね。

さて、詳しくと言われても、どこから話したらいいものか。海賊ホーカンが好きなら、そこか
ら始めようか。新しいものの方が記憶も鮮明だから。……いや、やはり最初から順を追って話そ
うか。そのほうがわかりやすいだろう。

確かあれは、かのシェスカ大戦が終わって間もないころのことだった。世界最大の大陸であ
るシェスカで、大地を二分するような争いが数年間続いた。ああ、さすがに今でもきちんと話
が残っているのだな。なんだか安心するよ。

もちろん、当時は今の語り草など比ではないほどの大騒ぎだった。なにせあのシェスカが割れ
たんだ。我がアールヴ国は海を隔てた別大陸だったが、同盟などのしがらみで参戦することにな
ってしまったのだ。もはや、彼の大陸だけの問題ではなかった。世界中がその行く末を見守って
いた。

当時の私はアールヴ国第二首都であるエアトンにいた。エアトンは、遠くの水平線までよく見
渡せる美しい港町だったが、同時に軍事や商業の拠点でもあった。首都よりも巨大なこの都市は
、国のどこよりも過敏だった。シェスカ東軍が西へ勢力を伸ばしたら、我が大陸グランリーグに
もその脅威にさらされただろう。そうしたら、迎えうつ拠点となるのは、エアトンだったからな
。

勝利で幕を閉じたと知らされたときは、それこそ狂ったような大騒ぎだったよ。だが、それも
世間とは縁薄い我々の魔法工房にはほとんど影響を及ぼさなかった。少なくとも、私は全く気に

しなかった。

当時の私は、千年に一人の天才と名高かった稀代の魔法使い、カネル・ローハインに師事していた。ん、信じられないか？ まあ、別に信じなくてもいいさ。それなら、あとは私の作り話として聞いていてくれ。

工房にはもう長年いたことだし、いかげん独立しろだの何だのと言われてはいたが、私はしつこくそこに居残っていた。何歳になったらとか修業が終わったらとか、そんな規則は特になかったしな。そんなものだから、とうとう工房ではカネル師の次にあたる位に就いた。そう、古い呼び方で言うと「次室」だな。工房長……ああ、師は親方という呼び方を好まなくてね、その部屋の隣に部屋が与えられるから、昔はそう呼んだのさ。魔法の……特にカネル師の工房は、世間一般のそれに比べると多少異なるものだったのだが、師が工房と呼ぶのだから工房としておく。

私は、魔法が何よりも大切だった。唯一の拠り所と言ってもいい。人生のすべてを魔法に費やしたし、それ以外のものは何でも犠牲にした。幼いころからずっと、師の教えで学ぶことを私の人生とした。まあ、ある意味甘えと言っていいな。あの人の近くにいれば、何の心配もなかったのだから。とにかく、魔法こそが私の生きる意味だったのだ。

改めて言う必要はないが、カネル師は魔法の天才だった。もともと半分はただの人間でなく、ラーディアスの民という魔法に長けた種族の血が流れていた。そのせいか才能や名声に恵まれ、世界中の魔法使いの憧れの的になったわけだ。逸話も数多く残されており、どういう由来かはまたあとで話すかもしれないが、世界を救ったなどという話もある。

半分人間ではない師は、私にとって近いような遠いような存在であり、どうしようもなく引きつけられるものだった。幸い、可愛がってもらえたからな。私と他の弟子たちの仲はけして良好なものではなかったが、カネル師のそばにいられるのであればそれでいいと思っていた。

あの頃、カネル師の工房で私は二人の後輩の指導を任されていた。一人は、ライアという少女。元は旅芸人であったが旅団が解散となり、この工房を訪ねてきた。彼女は、それまで魔法とは縁のない生活を送っていた。ローハイン門下では入門に細かな条件があり、彼女はその対象からあまりに外れていた。あまりに無謀な物言いに工房全体が呆れかえり、騒ぎになった。結局、カネル師が彼女をいたく気に入ったらしく、他よりも厳しい修行を条件にライアは私の妹弟子になった。

あの子はすばらしく手先が器用で、見事な細工を作った。魔術具に関しては、他の弟子たちさえ感心したものだ。我々はあくまでも魔法の専門家であり、工芸の技術に関しては今一つ本職に及ばないからな。彼女は自分に経験がないことを一番よく理解しており、最も熱心に勉強していた。私は連日連夜、彼女の修行に付き合ったりしていたよ。順調に身についていったわけではないが、素人で入門したわりには成長は早かったと思う。

もう一人は、コリンという少年だ。代々政の中枢を担う大貴族の三男で、父親は大臣の位に就いていた。はっきりした性格で頑固、熱くなると少々手がつけられなくなるけれども、何でもそつなくこなす優秀な人材だった。育ちのよさを鼻にかけるようなことはせず、身近な人間を大切にする子だった。ときどき誰かとぶつかるし、ひねくれた態度をとることもあったが、内面はな

かなか繊細なところもあった。

こちらはライアとは対照的に、幼少時より魔法教育をしっかりと受けており、ライアと比べたら入門の経緯はまだ穏やかなものだった。たいていの目標を達成できる力も環境も彼には備わっていたし、苦労もなく修行を着実にこなしていった。ライアは手先が器用だったが、彼は仕事や生き方が器用だったというか、要領がよかった。

コリンとライアとほぼ同時期に工房に入ったこと、そして両方面倒を見るのが私だったこともあり、とても仲がよくて常にじゃれ合っていた。加えて、私を巻きこむのだから敵わないのだ。それはそれで、まるで家族みたいな気分だったので楽しかったがね。

しかし、私と腕輪との出会いは、私が最も幸福だったこの日々を奪ってしまうことになる。それ以降、私と腕輪は憎しみと哀れみ、ほんの少し共通する懐かしい記憶で結びつけられながら、千年の狂気に囚われ続けることになるのだった。

「ああ、あれが先発隊ですね。將軍たちは、早ければ今週には着くそうですよ」

四角く切り取られた窓を開け放ち、はるか遠くに引かれた水平線を見つめながら、コリンは明朗な声で言った。仕事が早い彼は、私の言いつけた課題を全て終わらせ、その五割増の量が与えられたライアが終わるのをのんびり待っていた。

彼らは、常に私の研究室に入り浸っていた。別に他に部屋はあったのだが、やれ何やかんやと理由をつけては、彼らは「次室」にাগりこみ、私物までも持ちこんでいた。彼ら専用の茶器まで持ちこんだときは、さすがに何か言った方がいいのかと思ったが、自分の主張を通せる期間はどうに過ぎてしまったので放っておいた。

ライアは魔法記号の教本――本といっても今のような立派なものではないが、それに葉を挟んで閉じると、猫のように大きく伸びをした。そして、自他共に認める相棒の肩ごしに青い海に眼をやって、ぼつりと呟いた。

「長かったわね」

いつも快活なその唇から洩れたのは、珍しく感情のない響きだった。彼女はエアトンに来る前、シェスカ大陸のあちこちを歩き回りながら芸を磨いていた。戦乱の最中、小競り合いにも何度か巻き込まれたそうだから、私たちのように他人事ではない。その時点でもう複雑な心境にあったのだろう。それでも、私の視線に応えるようにいつもの笑顔を作った。

「次はお祭りですね。もう半月切っているなんて早いわ。エアトンのお祭りは初めてだから、今から楽しみです」

「僕も。いつも土産話ばかりだったから、今度は僕が都の友人に自慢する番です」

エアトンは、首都のような堅苦しきのない陽気で、軍のお膝元とは思えないほど気楽な町だった。何かと騒ぐのが好きな連中ばかりだったよ。海の精霊の力が強くなると言われる五日間は、それこそ魔法にかけられたかのように騒ぐ。その雰囲気の人気なのか、祭りは他の町からも多くの人々が訪れる、国のなかでも指折りの盛大な行事だった。工房は町はずれの高い丘の上に立っているから静かなものだったが。

街が騒がしくなるこの祝日の前後は依頼をほとんど受けず、工房は唯一の長い休暇に入る。そのため、仕事が一区切りついたほとんどの弟子は帰郷する。それ以外の者も、余所に発注していた素材や加工の様子を見るため、しばらく他の工房に泊まりこんでいたりした。残っていたのは、ここ以外に住まいがない私とライア、父親がこちらにやってくるというコリンだけだった。毎年、この時期に工房に常駐しているのはカネル師と私の二人きりだったが、あの年はいつになく賑やかだった。

「ねえ、兄さん。当日はどこに行きましょうか？」

この「兄さん」というのは、この二人だけが呼ぶ私のあだ名だ。ライア曰く、芸人の世界では、実の兄だけでなく兄弟子もこう呼ぶのだとか。それをコリンが面白がって真似するようにな

って、二人のなかでのみ定着した。こんな呼び名、私は照れくさかったが、二人がかわいかったのでそう呼ばれることにしたのだ。

「町の子に聞いたんですけれど、真珠のケーキは朝一番で並ばないと売り切れてしまうらしいですよ」

「そうそう。僕は、港のカモメ亭で一級コースを食べたいな。あれを食べないと祭りは終わらないってくらい美味しいんですって」

普通の工房に休みなんてあってないようなものだから、初めてのまともな休日に二人は心を躍らせていた。もちろん、居残り組には煩雑な雑用が義務となっているのだが。祭りの計画を次々と口に出す彼らに私は頬を緩めつつ、苦い気持ちになった。

「俺は祭りに参加しない主義だ。二人で楽しんでおいで」

ライアもコリンもそろって不満の声をあげた。それはそれは、きれいな和音だった。そして、私の衣服を両側から引っ張った。

「行きましょうよー。兄さんも一緒じゃないと嫌です」

「僕らは初めてなんです。案内してくださいよー」

この二人は、育った環境も立場もまったく異なるというのに、とても息が合った。前世はきっと双子だったのだろうと思えるほどだ。そうやって、いつも二人で私に好き放題言うのだった。

「案内はできないよ。俺、一回も行ったことないから」

かわいい妹弟子と弟弟子は示し合わせたかのように、そっくりの驚愕の表情を返事代わりに寄こしてきた。今思えば、とても愉快的な光景だった。しばらく固まっていた彼らは、すぐに叫ぶような大声でまくし立てた。

「どういうことですか？ アールヴどころか大陸の三大祭りですよ？」

「そうらしいな」

「このエアトンに長らく住んでいながら、何てこと！ まったく、信じられない」

「信じなくてもいいが、真実だ」

「引きこもりはいいかげんやめましょうよー。そんなんだから色白なんですよー」

「はいはい、これは生まれつきだ」

「もったいない！ そんなの、パンを一口かじって捨てるのと一緒ですよ！」

「はいはい、もったないね」

「兄さん！」

最後の言葉が見事に重なったので、私は思わず吹き出してしまった。いきり立つ彼らの頭を撫でつつ、私は諭すように言った。

「俺はこれでいいんだ。気にしないで行ってくればいい」

ライアが私にしがみついた。この子は旅芸人での経験のせいか大変力が強かったので、ふりほどくのは大変な労力がある。大抵、それが面倒なので本人が離れるまで待つのがだった。

「兄弟子は、下の弟子の面倒をしっかりと見るものです」

まるで小動物のような目で見上げてきたが、感情に流されることなくその小さな額を叩いてやった。

「旅芸人の世界のルールは、俺には通用しないよ。言っておくが、そうするとお前らも後輩にちゃんとおごるんだぞ」

二人の手はすぐに離れた。軽くなった腕は涼しく、私は力なく窓辺を見やった。私からは遠い世界がそこにあった。もしも世界に魔法が存在しなかったら、私もあの中で笑っていただろうか。ありえない想像をし、我ながら自嘲した。

私から離れたものの、彼らは幼子のように頬を膨らませ、ぶつぶつと不満をもらしていた。私が適当にあしらっているなか、聞こえる笑い声が余分に一つ。戸を見やると、カネル師が気配もなく立っていた。この人はいつもこうで、心臓に悪かった。何百年も生きているにしてはかなり子供っぽい人だから、驚かせるのが好きだったのかもしれない。

「ずいぶん楽しそうだね、次室」

「先生。現れるときは、せめて煙でも伴って現れてください。びっくりするでしょう」

師は肩をすくめた。

「おや、私はずっとここにいたよ。君も鈍くなったね。後輩にからかわれたくらいで心を乱すなんて、まだまだ修行が足りない」

「師匠の指導が至らなかったんでしょ」

カネル師は一瞬止まり、笑いを押し殺しながら「降参」というように両手をあげた。

「すまない。確かに、その通りだ。でも何年もここに居座っておきながら、私にこれ以上何を教えると？」

その直前に修行が足りないと言ったのはどの口だ。そう指摘したかったものの、あとが怖いので私は黙っていた。そんな私の心を無視して、師は慌てて勉強に戻るふりをする新弟子たちに微笑みかけた。

「コリン、ライア。今日は温室に入った気配がないけれど」

二人は一斉に立ち上がり、苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべた。他人で遊んでばかりいるからだ、と私は呟いた。ほとんどは商人から仕入れるのだが、工房でもいくらかの薬草を育てていて、それを世話するのは下っ端の弟子の役目だった。無論、この場合はコリンとライアだ。

「すみません、今やります」

「兄さんも手伝わせますのですぐに終わらせます」

「駄目だ。決まりは決まり。ほら、行きなさい。雑に扱うとグレンに怒られるぞ」

私に悪態をつきながら、かわいかったはずの後輩たちは階下へ向かった。嵐がおさまったような静けさのなかに、私と師だけが残された。楽しそうな吐息まじりでカネル師は笑った。

「うまくやっているようで何よりだよ」

「困りますよ。俺だっていろいろ抱えている身です。あんなの二人も押し付けられちゃ、おちおち研究もできない」

カネル師はこちらの心を探るような目で見てきた。こういうとき、少し心臓が痛む気持ちになる。とくに理由はないのだがな。

「そうかい。君はとても楽しそうに見えるけどね。どうだ、頼られるのもいいものだろう」

「嫌味ですか」

やや口調を強めると、まさかとカネル師は穏やかに首を横に振った。長い髪は、絹の布を思い起こさせるように滑らかに軌跡を描いた。

「君があまりにも他人を遠ざけるからね。教えるのも学びの一環だ」

別に私が後輩の世話をするのはコリン・ライアが初めてではないが、たいした交流もないまま事務的な指導で終わってしまった。気がついたらそいつは一人前になり、故郷に工房を構えると独立してしまった。まあ、優秀だったのでどうにか生きてだろう。

私には独立しようとかいう目標も何もなかったのでただ居座っていた。古株になった結果が、次室というわけだ。そのころになると、私は外の間とはほとんど接触しなかったし、他の弟子とも仲良くなる気がなかった。心は孤独ではなかったが、客観的に見れば寂しい人生だったかもしれない。

「遠ざけるのはしかたのないことです。俺は、あの中に入っただけでいい人間なんですよ」

眼下に広がる町並みは、掌に収まりそうなのに遠いものだった。私との間に、地の底まで続く溝をつくり、その向こうで燦然と輝いている世界。私は、そこに加わる気持ちが持てなかった。こんな存在が入れば、たちまち傷がついて光を失う気がしたのだ。

人々が幸福に暮らす場所。そこに醜い感情が入るのは許されず、その調和に自分が入ることで、混沌を作り出すことへの恐れがあった。窓から見える、絵のように美しい風景。触れずにいればいつまでも綺麗だと思っていたのかもしれないな。棘のある薔薇のように。

「たとえそうでも私は悔しいよ。君が、この世界をまだまだ知らずに終わってしまうなんて、寂しいし悲しいんだ」

「先生が心を痛める必要はありません。俺ですらどうにもならないんですから」

首を傾げながらにこやかに告げると、師は苦笑しながら何か言いたそうに私を見つめた。この人はたいてい心に一物隠してあり、弟子にはめったに打ち明けない人だった。私も、自分のことをあえて理解してもらうつもりもなかった。お互い、腹の探り合いだった。

「昔の君は、今ほど外に恐れをなしていなかったはずだ。むしろ、世界に希望を夢見ていた」

胃のあたりが苦しくなった。思わず視線をそらしてしまう。私の声は震えていた。

「あのころの俺は無知で無自覚だったからですよ。だいたい、先生ほどの方が何故そう仰るんです。あなたなら、俺が外に出ることの意味がおわかりでしょうに」

「ああ、わかるとも」

はっきりした言葉だった。私がうつむいていた顔をあげると、すぐに目が合った。

「君が案じているようなことは何も起きないとね」

そうは言われても、どうしようもないことだったのだ。私と世界が真に幸せでありつづけるなら、外に出ないか死ぬしかない。そう思っていた。

「まるでこの部屋は結界だね」

ぽつりと呟いた師は、私の部屋を見渡した。何年もの工房生活でため込んだ魔法の書物や道具が所狭しと並んでいた。部屋は主の鏡だな。この部屋も、見渡してみるとなんとなくお前の人柄がわかるよ。少なくとも、当時の私の部屋は、私の人生そのものだった。今でも、あれは鮮明に

思い浮かぶ。私が一生の墓所として決めた場なのだから。幸か不幸か、それは叶わなかったわけだけれども。

「人間は人間である限り、運命があるものだ。空を飛べない定め、海の深くまで行けない定め、邪に抗えない定め。魔法はそれを打ち破る力なのに、どうして君はあえて繭に包まれる道を選ぶ」

「どうしてでしょうね」

私はわざと突き放したような言いかたをした。

「確かに、創造主が人間という存在を造ったとするなら、俺たちはその枠組みのなかでしか生きられない。魔法はそれに対抗する唯一の手段。魅力的だと思うのは事実ですよ。でもね、先生。俺は、人間のあるべき姿をもって生きるために魔法を学んでいるんです。その選択のひとつが、世界との交わりを断つことなんです」

カネル師の追憶するような瞳の動き。私の向こうに、あの人は何を見ていたのだろうか。いろいろあったものの、結局のところ師は誰よりもこの世界や自分の出会ったものを愛していただろうから、私がそれを拒むというのは寂しかったのだろう。それでも、私は拒絶せずにはいられなかった。

「傷つけ合うことがわかっておきながら、どうして触れることができません。今の俺は、他人と関わってはいけないんです。悲しみや苦しみを生むくらいなら、このままここで朽ちるべきなんだ」

「私は、それまでずっと君を見張っていればいいのかい」

鋭い言葉の発し方だった。カネル師は、普段は穏やかなお人柄だったが、時折こういうことを言う。言葉に魔力を少し乗せるだけで、たいていの人間は固まってしまう。私も、そうだった。さらに師は続けた。

「君は、私となら傷つけ合っても構わないと言うのかい」

喉がやけにひりついた。いつの間にか、背中や手が汗で濡れていた。私は、渾身の力で重圧を撥ね返す。

「構わないわけではありませんが、先生なら大丈夫ですから」

力が一気に抜けた感じがした。師は肩をすくめ、困ったように笑った。

「何だい、それは。まるで私が人外みたいじゃないか」

と言われても、ラーディラスに代表されるようなある種の少数民族は、一般の者よりも魔力に恵まれて不可思議な現象を引き起こす。ラーディラスは、他が束になってもかまわないほどの魔力で、ほとんどの不可能が可能になる。たとえば、その長命だな。これは一族全体にかけられた魔法のようなもので、一般人とは比べ物にならないほどの時の流れの違いがあった。一族全体で共有している魔法というのが、一般人との差だ。それを考えると、ラーディラスに限ったことではないが、彼らは人とは多少異なる存在と断言していいだろう。

「君がどう思おうと、私たちも人間だよ」

悲しそうにカネル師が掠れ声でつぶやくと、いたたまれない気分になった。しかし、何かこちらが言葉をかける前にあちらが口を開いた。

「まあ、信頼の証として受け取っておくよ。君も、ちょっとは変わったようだから」

と言いながら、ライアの勉強道具を長い指で叩いた。私は他の弟子たちと極力関わらないようにしており、後輩の指導もほとんど断っていたのに、いきなり強制的に二人の指導を押しつけられたのだ。適当にこなして、さっさと一人前になったら突き放せばよかったのだが、特にライアはどうも放っておけなかった。

慣れない魔法の勉強は、誰かの協力なしでは不可能だった。彼女が自立するには私が指導をしなければ仕方がない。やる気はあった彼女は、とにかく朝も夜も質問攻めだ。最初は最も短い言葉で済むように努めたが、それでは納得せずに延々と話しこむ。三日も四日も徹夜に付き合わされたときはさすがにきつかったが、何度もやっているうちに慣れた。

そうすると、もう一人のコリンに対しても無視するわけにはいかない。二人同時に面倒を見ているのに、彼だけ突き放せるほど私は器用ではなかったのだ。心に凝り固まった澱がありつつも、私は自分が想像していた以上に彼らと頻繁に接するようになってしまった。彼らは人好きな性格で、なぜかこんな私にも懐いた。そうこうしているうちに、私たちは三人一組で扱われる羽目になってしまった。

「こんなはずではなかったのですがね。先生、これを狙って俺にあの二人をつけたんですか？」

「どう推測しようが、君の勝手さ」

涼しげな笑顔で、そうやってはぐらかす。ふと、師の眼が猫のように細まった。

「君も、入った当初は相当なものだったよ？ 私の傍を離れなくて」

そこを突かれるのは、少し痛かった。

「……先輩たちをだいぶ敵に回しましたね。俺もあの子みたいなものでしたから」

「それを思うと、君も変わったね」

笑い合って、ふと感じた郷愁に似た思い。その瞬間、あの部屋は過去も未来も全てが満ちていたとさえ思えるような錯覚にとらわれたのだ。私は、不幸であり幸福であった。

「変わりませんよ。先生と二人でいると、いつだってあのころのままです」

ラーディアスの民というのは大変な長命で、人間の百倍は生きるといわれている。ラーディアスよりも記録に残す人間の方が早く死んでしまうので実際はわからない。

師は容姿も人間の目からするとほとんど変化なく、そのころはもう数百年は生きていたはずなのに、私よりもいくらか年下というような容姿だった。ラーディアス特有の銀髪と不思議な色の瞳がそう見せていたのかもしれない。なので、師と接すれば接するほど私は時を忘れやすくなっていた。

そう言ってみると師は微笑した。

「そうかい？ 君は随分大きくなった気がするけどね。私は、君がこんなに小さなころから知っているんだから」

師は、親指と人差し指をほとんどくっつけた状態で私に示した。大げさだが間違ってもいない。師は私のことなら何でも知っているのだ。

「いえ、変わりません。その証拠に」

私は窓に手をつけて、外の景色を眺めた。楽しそうな祭の準備の様子で溢れている。少し調律

のおかしい楽器の音が微かに聞こえてきた。

眩しい光に目が痛み、細めた。昼の太陽は世界を真っ白に塗りつぶす。まるで、世界が無であるかのように。そこに立っている私ですら幻であるかのように。いや、きっと私は亡霊と大差なかっただろう。小さな部屋に自ら囚われた愚かな亡霊。誰にも知られず気づかれず、ひっそりと朽ちていくような。

「これだけ先生から言われても、俺はまだ外の世界を恐れている。多分、これからも一生、俺は工房から出ることなく暮らすのでしょ

う」

「怖い、世界は」

淡々とした口調でカネル師は尋ねた。私は、煌く世界へ向かって宣言するように答えた。

「怖いですよ。本当は工房にいても怖い。正直に言うと、俺はもう、魔法と先生さえ存在すればいいんです」

カネル師は、銀髪からあの不思議な色の瞳をまっすぐにこちらへ向けてきた。私は、千年経った今でもあの瞳が大好きだ。

「そりゃあ、私よりも君の方が早く死ぬから好きなだけこの工房にはいられるけどね」

そう言いながらカネル師も並んで、二人で栽培小屋の更に向こう、町の様子を見る。窓を開けているので、丘を上ってくる楽団の演奏が聞こえた。少し聞き入っていると、ただ遠くを見ていた師が口を開いた。

「本音を言うとね、やはり私は君にもっと広い世界を見てほしいと思うよ。この町、この国だけが世界の全てと片づけられたくない。私だって、ここに腰を落ちつけたのはほんの数十年前のことだ」

その言葉を聞いて、私は苦笑いを浮かべた。

「規模が違います」

「君が生まれる少し前だよ。それまでは都にいて、その前は世界中を巡っていた。最初は私も故郷から出ずに一生を送ると思っていた。君と同じで外が怖くて、中に喜びが足りていたから。しかし、外に出てわかったことはたくさんある」

「それは？」

師は年に似合わず、外見に相応しく少年っぽい笑みを浮かべた。

「教えない。それを知るために外へ出るんだよ。世界が君を変え、君が世界を変えるんだ」

「世界を、ですか」

私は苦々しく笑った。

窓枠に収まった四角い景色。工房と丘と町と海。それが私にとっては世界の全てであり、私が受け入れる唯一のものだった。それは、ある種の永遠である。他は拒んだと言ってもいい。いや、世界が私を拒んだのだろうか。とにかく私は世界を恐れていた。常に、両手に余るだけしかない世界と、その向こうに限りなく広がる世界の両方を。

「今度二人でハロルドに会いに行かないか。彼も戦乱で大変だったろうから。すぐ近くだし、簡単に行けるよ」

「今さらどんな顔で会えて言うんですか」

私は皮肉っぽく続けた。心が痛むのを感じながらの発言は、自らの喉を搔っ切ってしまうようになる衝動を引き起こした。

「近くだというなら、お一人で行ってください。それに、世界を広げても俺は何も変わりませんよ。俺が世界を変えることが出来ないようにね」

「……自分はいらない存在だと思うかい」

師はいつだって痛いところを平気で突く。下手に付き合いが長い分、私の弱い部分もこの人は知っている。それも、長く生きた者に備わる能力だったのかな。

「思いますよ。俺は世間から見捨てられた子供ですから」

「少なくとも、私とハロルドは、君を見捨てはしない」

力強い調子でそう言ってくれたものの、私の心は解放されなかった。同時に、揺らぎもした。私は動揺を隠すために、わざと作り笑いをした。

「事実、俺が外に出ないことで何か影響でも？」

「そうだなあ。いつまでも次室が空かないことかな」

カネル師は私の部屋を見渡した。その部屋も私のものとなってから久しくなった。私の都合のいいように改装していたから、師には随分な変化に見えたかもしれない。ただし、カネル師の部屋との通用口はそのままにしてある。用があるときに開かないと怒るからな。

「いつまでもここにいたんじゃ、他の弟子の邪魔になるよ」

「では、この隅に自分の工房を作って暮らします」

カネル師はその日一番の溜め息をつきながら肩をすくめた。

「頑固だね、君は。……誰に似たんだか」

「師匠ですよ」

すかさず言ってやると、一瞬目を丸くした師は、優しく笑った。そして、栽培小屋から出てきたライアとコリンを見つめて手を振る。二人も大きく手を振り返し、道具を片づけに倉庫へと向かう。その背を見ながらカネル師は言った。

「私は、やはり君にいろんなことを知ってほしい。でも、君が出ない理由を知らぬわけではない」

「知らないふりはお得意ですか、先生は」

遠い町を見つめながら、師は悲しそうな眼をした。痛いところを突き合うのはお互いさまだ。そうでもしていないと、この人の相手はできない。

「君は、自分が生まれたこの世界を放棄して、平穏を手に入れた。ここにいれば永遠に崩れないだろう平和をね」

「俺の記憶も俺の存在も、この工房の中だけです。それ以外を知るのはあなただけであってほしい。世界が俺を知らなくても、ここの他に俺がいた記憶なんてなくても構わない」

私は師に依存し、師のそばにいてしか自分という存在を確かめることができなくなってしまったかもしれない。外に出ても出なくても、きっと自分という人間は存在しないのだから。外に出ないことと他人に知られないこと、どちらが先かは忘れてしまったが、悪循環であった。

「外は、君を傷つけるだけの場所なのだろうか」

師がふとそんなことを言った。否定することすらも私は怯えて、返答に困った。このころは、自分は傷つくことばかりに怯えていた。むしろ傷つける存在であったことに気づくのは、もっと後になってからであったが。

「世界に希望はありますか？」

コリンとライアが全ての作業を追い、何かを声を張り上げて言いながら戻ってくる。師匠は話をはぐらかして返答を見送った。てっきり、「あるよ」と即答するかと思ったのだが。

「他人が怖くて、触れ合うことに怯えていた君だけど、あの二人は？」

「……怖いと思わせるタマですか、あいつらが」

「そうだね」

コリンがライアに何か言ったらしく、ライアは彼の首に手をかけていた。まあ、よくあることだった。我々は思わず苦笑した。

「彼らは君にとってかけがえのないものとなるよ。大切に하십시오」

確かにそうかもしれない。その言葉を聞くと何故かほっとした。どうした、とカネル師が覗き込んできた。

「まだまだ学ぶべきことはたくさんあります。それが終わらない限りは、俺はここにしようと思います」

カネル師は両肩をすくめて、呆れた笑顔を浮かべた。

「私が教えられないことのほうを数えた方が早いかな」

ライアとコリンがこちらに向かってくる足音が聞こえる。騒々しいことこの上ないが、そのときは私たち以外誰もいなかったので咎めることもない。

「じゃあ、久しぶりに言い付けをしよう。外へ出なさい」

あまりこういう言い方は好きではないと付け加えながら、カネル師は言った。その横顔は、師のものとは思えない別人のような雰囲気漂わせていた。いつもどこか不思議な人ではあったが、長い付き合いの私も見たことのない様子だった。

「君が知らなくて、私がまだ教えていないこと。帰ってきたらわかるだろう」

「でも」

師は、私の肩に手を置き、まっすぐ視線を合わせてきた。

「どんな結果でもね、ないよりあるほうがいいんだよ。大切なのは、一歩踏み出すこと。たとえ君がどんな間違いをおかしても、私は君を拒まない」

開け放した窓から心地よい風が吹き込んできて、カネル師の髪を揺らした。水平線の向こうからやってくる船の影が徐々に濃くなるのを私たちは見つめていた。あの先には、戦を終えたばかりのシェスカがあった。

「まずはもっと広い風を浴びなさい。たまに換気しないと、君の人生腐ってしまうよ」

その言葉の前半に比べて、後半はやけに軽い調子だった。私は思わず苦笑した。

「とっくに腐ってますよ」

「いや、今が一番いい時期だ。果実だって、腐る直前が一番美味しいものじゃないの」

何を言っているんだ、この人は。呆れつつも何か言い返そうとしたとたん、突然大声がし、廊

下が一気に賑やかになった。師と目を見合わせていると扉が開き、二人が息を切らせて駆け込んできた。また何か口論があったようで、二人とも口を膨らませていた。思わず、カネル師と一緒に笑ってしまった。

「なんだい、二人とも」

揃って、コリンがライアがと言う。喧嘩するほど仲がいいとはこのころから使い古された言葉であるが、私はつつい微笑ましく彼らを見てしまう。それは、師も同じだっただろう。年々、この人は若者に甘くなっていて、弟子というよりも孫のような接し方だった。無論、年齢差で言えば孫でも済まないのだが。

「まあまあ。次室がね、祭りに連れていってくれるそうだから機嫌を直して」

二人揃って笑顔になるのがかわいかった。こんなに素直に感情を表に出す人間は、なかなかいない。だからこそ、私は怯えつつも、彼らという新しい存在を受け入れたのかもしれない。こんな私のことを一度も奇妙な目で見ることがないこの二人を。いや、最初は多少意思疎通が難しかったかもしれないが。

だらだらと考え事をしていると、期待に満ちた四つの眼が私に向けられた。ついでに、様子を窺うような金色の瞳も。多少、直前のやり取りで気が緩んだとはいえ、私にはためらいがあった。そのとき、確か十年以上もまともに工房の外に出ていなかったし、出入りの職人や商人以外の余所の人間との付き合いもなかった。壁で囲った小さな世界に満たされ、誰かと心を通わすのを避けていた。そんな人間が、今更何をすればいいのやら。

開けたままの窓から、突風が吹いた。自分用に広げていた冊子がぱらぱらとめくられる。温かくも冷たくもある風は、時に心地よさを、時に厳しさをこの部屋にもたらし、世界に苦しみがあるのなら、その分だけ幸福も存在するのだろうか。自分にも、それを分けてもらう権利はあるだろうか。

世界と傷つけ合うことが怖かった。自分は異物で、完全なる存在を歪にするだけの存在であると信じていた。私が表に出なければ、平和が保たれるのだと。

「たとえ君がどんな間違いをおかしても、私は君を拒まない」

カネル師はそう言った。信じてもいいのだろうか。師を見ると、何を考えているのかわからない笑顔だった。この後の全てをわかっているような表情。人間はな、帰る場所さえあればどんな遠くに行っても心強いものだ。見えない力で背中を押された気がして、私は思わず頷いてしまった。

「仕方ないな。ただし、おごりはほどほどに」

声が震えた。たったそれだけの言葉なのに、心臓と胃が痛くてたまらなかった。かわいい年少者たちは火がついたような喜びで、それには気づいていないようだったが。

「先生、先生もお祭り行きますよね？」

ライアの問いかけに、嬉しそうなカネル師は軽く手を振って否定した。

「いや、年寄りだからね。人ごみももうきつさ。外出せずにのんびり過ごすよ」

人には出ていけ出ていけと言うくせに。私は、自分の心を隠すように師をからかった。

「そうですね、腰にきたら大変ですものね」

カネル師は私の頭を少し本気で叩いた。いつも子どもぶって、身の回りの世話をやらせていたくせに。

「私はいいから、若者は楽しんでおいで」

その年寄りくさい台詞が全く容姿に似合わないのに、私たちは大いに笑った。それは、幸福だったあのころを締めくくるのにふさわしいものだった。

祭りから数えること……すまない、細かい数字は忘れた。おそらく、五日ほど前だったと思う。祭りには間に合わないかもしれないと思われていたシェスカへの遠征軍本隊は無事、群衆の大歓声に迎えられた。工房の丘は若干遠いのだが、街全体を見渡すにはなかなかいい場所だった。コリンとライアはいつもどおり、工房二階の街側にある私の部屋に居座って、景色を眺めていた。

道に人がごった返して、祭りのときのように人間の頭頂部が町の間隙という隙間に詰めこまれていた。ああ、私もあの中に入るのか。ただそれだけ、当たり前なことではあるのだが、私には人生の分岐点に立ったような心境であった。それでも、二人が機嫌よく課題を片づけるようになったのは喜ばしく、私に当日の計画を楽しそうに話してくれることは嬉しかったのだが。

「軍隊が海を渡るって変な感じね」

「君はシェスカの方が長いものな。シェスカには海を渡っての遠征はほとんどないけど、アールヴだと珍しくないよ」

「そりゃあ、造船も発達するわね」

我らがアールヴは、シェスカに隣接した弓型の大陸グランリージの端にあるが、他国との境目は険しい山で当時は足を踏み入れることもままならず、海経由で国外とやりとりをしていた。そのため港が発達し、交易も盛んに行っていた。軍隊についても、海での戦いの方が得意だったのではないだろうか。エアトンは条件のいい位置に築かれた、軍事と航海の要だった。

「コリンのお友達は？」

ライアは自前の遠眼鏡を使って、列を覗き込んでいた。道具に遠くのものを映す呪文が刻みこんであって、こういうものを正確に美しく彫るのがあいつの特技だったのだよ。魔法の文言や理論への理解は今一つだったが、細かい解説さえ与えられたら、どれもすばらしい仕上がりのだった。

「よくわからないけど、おそらく将軍のおそばにいるはずだよ。黒髪で少し小柄な感じの人、見えない？」

コリンも自分で作った遠眼鏡をしきりに覗き込む。彼らに課題を同時に与えていたので、そのようなお揃いの修業の成果はたくさんあった。そのほとんどが、なぜか彼らの寝室ではなく私の仕事部屋にあったのだが。

アールヴがシェスカに参戦したのは戦争後期であったが、ひとつ大きな戦いに臨み、不利だったところを形勢逆転させて勝利に貢献した。しかも、その立役者がまだ子どもとってよいくらい若い士官であり、コリンの友人だということから驚いた。おかげで、シェスカへ国威を示すことができた。世間は浮かれていたようだ。当時から既にシェスカが世界の中心であり、規模で言ったらさほど劣っていないものの、アールヴは田舎者扱いだからな。ずいぶん喜ばれただろう。

コリンは自分のことのように嬉しそうに、大通りの真ん中にひかれた軍隊の線を辿っていた。

「下に降りて見に行ったらどうだ。せっかくの晴れ姿だろう」

「いいですよ。見に行っても、おそらくあいつは気づかないでしょうから。それに、砦で式典があります。父も出席するのでそれに紛れて会おうと思っています」

ずいぶん軽い感じで言った。そういうところに、彼の育ちを感じた。

この数日後の式典では、今回功績を残した者に勲章が授与される。実を言えば、それは我が工房の作であった。カネル師の過去を考えると引き受けない方がよかった気もするが、少々事情が複雑なんぞな。勲章を作るとなると人手がかかるものだが、長期休暇に入る前にあらかじめ完成してしまっし、あとは責任者である私が納品日までに最後の確認をしてしまうだけだったのでいたしたことはなかった。

「みんなが作った勲章の晴れ姿、ちゃんと見届けてね」

「さすがに、部外者は式典には参加できないよ。まあ、屋外の広場でやるそうだから、もしかしたら高いところから覗けるかもしれないな。ライア、君のを貸してくれよ。僕のじゃいまいち細かいところの焦点が合わないんだ」

窓際で騒いでいた二人だったが、ふと動きが止まった。どうした、と尋ねながら私もそばに立つと、工房に至る丘の道を馬車が上ってくるのが見えた。当時でも特に位の高い人間が乗るようなものの出現に、私とライアは顔を見合わせた。

「軍の方が取りにいらっしゃるのは、今日でしたか？」

「いや、聞いていた日にちはまだ先で」

工房にやってくるのは、仕入れを任せている商人や、下職を頼んでいる別の工房の人間ばかりであった。無論、彼らの中にも富裕な人間はいたが、それでもこれほどの乗り物を所有するような人間はいなかった。となると、残る可能性は依頼主なのだが、その時期にやってくる依頼主という思いつくのは、件の軍の者だ。勲章はいつでも渡せるような状態にしてあったが、渡すのはまだ先と油断していた私は少し焦った。

「父です」

呆けたように呟くコリンに我々は目を丸くした。しかし、誰よりも一番驚いていたのは彼だった。車は工房の入口のところに停まると、一人の男性を降ろした。簡素な装いだったが立派な風貌で、窓から呆然と見ている我々に一礼をした。ライアは私とコリンを交互に見つめ、階下へ走った。それにコリンが続き、我に返った私がおのんびりと追った。

一階の応接間に通して、ライアはお出しする飲み物を注ぎに行った。残された私とコリンは、コリンの父レイフォード氏と向かい合って座った。さすが王の懐刀として名高い人物だけあって、堂々とした佇まい。私はただ気おくれした。こういうときは他の弟子に対応を頼むのだが、あいにくいなかった。まさかコリンとライアに任せるわけにもいかないのだから、私が工房の代表として依頼されていた品を渡した。

「すみませんね、急にお訪ねして」

突然の来訪そのものよりも、コリンの父が来ることの方が予想もしなかった事態だ。確か、帰還した軍隊の式典に出席するためにやってきたと言うが、大臣ほどの人物がこのような小間使いをするためにわざわざ動くわけがない。けれども、それは口に出せなかった。

レイフォード氏は、私が箱から出して見せた品をしげしげと眺めて確認すると、頷いた。

「はい、確かに。素晴らしい出来ですな。工房の慣習を曲げてお願いしたというのに、これほどまで仕上げていただき、感謝いたします」

宮廷では、王家の次に権力のある人物であった。まるでミラルカの家と……ああ、これについては別の機会に話そう。とにかく、身分が高い者にしてはありえないほど丁寧な礼を言われて、私は拍子抜けしてしまった。というよりも返事に困った。

「お気遣い頂く必要のないことです。師の気まぐれで設けられた休みですし、毎年、人は残っておりますので」

声が震えた。外の人間とは決まった話題以外の会話は、碌にしていなかったのだ。さすがに私の挙動を奇妙に思ったのか、大臣はしげしげと私の顔を見つめて、何か考えているようだった。コリンの父親なのだからもっと気楽にできればよかったのだが、コリン自身が、いつも父のことを話しているときと明らかに異なる様子で黙りこくっているのだから、どうしようもなかった。

「失礼いたします。どうぞ」

ライアはにこやかに一番上等な器を運んできた。中に入っているのは、シェスカの小国で生産しているという茶だ。これはコリンのお気に入り、港の人間に頼んで仕入れてもらったものだった。

「ありがとう。こんなお嬢さんもローハイン師の弟子とは、驚きましたな」

ライアは驚いたような顔をしつつも、控え目に笑った。女性の魔法使いは珍しくないが、カネル師の工房にはあまりいなかった。工房が始まって以来、ライアで三人目か四人目だったはずで、当時、女の弟子は彼女だけだった。とはいっても何の作為もなく偶然だ。まあ、女性の魔法使いで有名なのはやはり、いつの時代もシェスカだがな。

大臣は箱の中に勲章を収めて蓋を閉め、間をおいてもう一度開けてずいぶんと念入りに隅々まで確認した。そして、穏やかな様子で言った。

「ただでさえ細かい注文をつけているなか厚かましいのですが、これにもういくらか注文させていただいてもよろしいでしょうか」

我々弟子三人は、一斉に小さな声をもらした。

「いえ、先ほど申し上げた通り、出来は素晴らしいです。あまりに出来がよいので、もう少し欲を出してみたくなったのです。お時間はありますか？」

私は戸惑いながらも頷いた。名高いカネル師の工房だろうと、職人とさほど変わらない立場の魔法使いは、依頼人の希望に沿うことが求められる。しかし、品を見たときの様子からこのような要望が出てくるのが考えられず、不可思議に思えた。私もまだ若かったからな、多少うぬぼれもあったかもしれない。

「この勲章に護符の効果を加えることができますか」

思わず首をひねってしまった。軍人が戦に臨む際、護符を持ち歩くこともあった。しかし、最初から護符を兼ねている勲章など聞いたことがなかった。

「これを陛下から賜った者は誇りをもって身に着け、次の戦場に赴きます。シェスカは鎮まりましたが、まだ世界は不安定です。できれば、彼らにより厚き加護を」

そうして、強い者は生き延びるといふわけか。勲章というものは誉の証であり、存在そのものに意味がある。それらは国から依頼を受けて魔法工房で作るものの、護りの魔法はほとんどなく、どちらかという到着けた人物の意識を高めるものだ。しかし、それだけで戦に勝てるものなら苦労しない。

そもそも古い時代のアールヴなどの国で、軍人に与えられる勲章は、その者自身の強さを意味した。守護魔法をかけるとは、次は生きて帰れないことへの不安があるということだった。それは、死を覚悟して戦地へ向かう者としてあってはならないことだった。しかし、生きのびる可能性があるに越したことはない。強き者にさえ永遠の勝利は確約されない。彼の言葉に、時代の移り変わりを感じたよ。

私は、納期を式典の直前まで延ばしていただけるならと返事をし、大臣はそれを承諾した。細工はライアがいるし、特に不自由はなかった。具体的な指示をもらい、数日でどう作業を行うか頭の中で工程を組み立てていると、レイフォード氏が口を開いた。

「ときに、師は今日いらっしゃるのでしょうか」

返答に困った。師はなかなか捕まりにくい人間で、気がつくとき姿が見えず、気がついたら傍にいたような人なのだ。他の弟子たちもいればまだましなのだが、私以外の誰もいないようなこんな時期は、行方がわからないということもたびたびあった。

どこにいたのか聞けば、いつも「ラーディアスの民のおつとめ」と言っただけでぐらかされた。ラーディアスは不思議な民族で、数も少ないものだから詳細は不明だが、戒律と呼べるものがあることだった。私にもあまり語られたことはなかったので実態はわからないが、当時の私はカネル師がふらつく言い訳だと疑っていた。

「申し訳ございません。師は……放浪癖がありまして」

苦し紛れにそう言ったのだが、その場の全員が沈黙した。いい言葉が思いつかなかったのだよ。しかし、レイフォード氏は何がおかしかったのか、けらけらと笑ったので救われたが。

「ああ、そうですか。それなら、安心いたしました。お元気なようで」

カネル師が宮廷にいたのは、そのときから数十年前のことで、当時の王と対立があったからと言われている。あまり師は直接語らなかったが、アールヴ王家の政策に賛同できず、数百年仕えた城を後にしたらしい。彼とはぎりぎり都で面識があったのかもしれない。昔を懐かしむような様子だった。

「父さん。昔から、先生はあんな感じだったのですか？」

「あんなと言われても、現在の師を知らないからわからないよ。そうだな、私がお会いした印象だと少し厳しい方だとお見受けしたが」

コリンは目を丸くした。

「信じられませんが。私たち弟子には大らかで、好きにやっていいといつも仰るのに」

片づけを終えたライアが末席に座り、私に意見を求めるような目の動きをした。

「年齢を重ねたせいか、最近は丸くなったかと思えます」

コリンとライアもきょとんとしながらも笑った。

「兄さんには厳しかった？」

「いや、お……私が弟子入りした時点では既に、厳しさはありませんでした」

本当は、穏やかになりましたと言いたかったものの、そう言うには師の若々しい振る舞いが邪魔をした。けれども、私にとっては優しく導いてくれる師であり、親のように慕うべき存在でもあったのは事実だ。なかなか二面性がある人だったと思う。

大臣とはその後もしばらく話をしていた。時が経つにつれ、コリンもいつもの彼に戻ったし、比較的心穏やかに会話することができた。言葉を交わしながら感じたのは、レイフォード氏の人柄のよさである。個人的には政は情を優先するべきでないと思うのだが、それを考えても彼は心根まで立派な人で、アールヴは恵まれているとそのときは思った。コリンを甘やかすすぎず、かといって突き放したりもせず、適度に彼へ工房生活について尋ねていた。

魔法の工房に入るのは魔法を教養として学べる上流階級が多いとはいえ、コリンの家ほどの貴族になると職業に魔法使いを選ぶのは稀だった。魔法工房が珍しかったらしく、いろいろコリンに質問していたのだが、時々予想以上に鋭い問いもあり、私がしばしば回答を助けることもあった。

結局、他の弟子がおらず邪魔になることもないので、工房全体を案内することになった。温室や各作業部屋、書庫や倉庫を回ったかな。大臣はカネル師が見当たらないことを心配していたが、そもそも我々弟子も師の寝室の在り処も把握していないことに大変驚いていた。宿舎には弟子たちの私室があったが、カネル師のはなかった。時折、工房長室で寝ていたような気はした。

そして、元の部屋に戻ってしばらく世間話に相槌を打っていると、足音が聞こえた。ああ珍しい、と思った。あの人は本当に幽霊みたいで、普段はあんな音は立てなかったんだ。神経はこのうえなく大雑把なのだがね。

乱暴に扉を開けたカネル師はまず私を見て、大臣に視線を移した。室内に、電流のような空気の震えが起きた。それは、師の持つ魔力が影響しているのだ。先生が怒ることはめったにないため、ライアやコリンは戸惑っていたが、私も冷や汗をかくような心境だった。

「ご無沙汰しております、ローハイン師」

まず行動したのはレイフォード氏で、最敬礼をとった。たとえ都を離れても、大臣よりもカネル師の方が位は高いのだ。アールヴ王家に仕えていた年数は相当なものだったから。

「ああ、久しぶり。どうして君がここに？」

「息子の様子を見に参ったのでございます。非常にお世話になっておりますから」

「とんでもない。君はいい息子さんをもったね。こちらこそ、とても助かっている」

カネル師は極めて静かな口調だった。カネル師が宮廷を去った理由の仔細は、公にされていない。当事者である師と王、そしてその周囲の限られた人間しか知らないことなのだ。その事情に知らなければ、何ともない会話だろう。しかし、言葉の奥底に、どこか緊張感のある響きがあった。

「で、息子の様子を見にくるだけで君がくるとは考えづらいのだが」

と言いながら、師は私を横目を見た。反射的に私は答えた。

「はい、それに加えて、ご依頼いただいた勲章についていくらかの変更を」

ほんの少しだけ首を傾げた師が「何故」とつぶやく前に、レイフォード氏が口を開いた。

「帰還した者たちの話を聞きますと、ただの飾りはもう、今の時代に必要ないものであると思うのです。せめて、我が国の宝となる人々だけでも命を守れたら」

どこの国の軍も本音は、軍人の装備に魔法の細工をほどこして戦いを有利に導きたいのだ。より強力な武器、より強固な防具を作るのに、魔法の存在は避けて通れない。ただ、残念ながら何千何万の人間に行き渡るほど量産するのは、難しかったんだ。数万の武具ひとつひとつに細工をし、力を宿らせることを考えると、どんな工房の人間でも気が狂っただろうな。すると、結局優先されるのは、要人ばかりだ。

カネル師はそもそも、戦争に魔法が介入することをあまり好まなかった。自然の摂理に反する行為の魔法が、人間の本能的な営みである戦いに飼い馴らされるようなことに抵抗があったのだろう。それでも、やむを得ないこともある。少し間を置いて師は頷いた。

「納品が当日になる可能性もありますが、ご了承いただけました」

「わかった。コリン、ライア、あとでいいから準備をしておいてほしい」

はい、と二人は一斉に返事をした。こういうときでも呼吸が乱れないことに、ひそかに感心した。

「品は、出来次第お持ちいただけるでしょうか。できればその場で確認したいので、次室殿において願いたいのですが」

カネル師の心が、止まったかのように思えた。レイフォード氏はあえて、師にとは言わなかった。工房に残っている弟子はコリンとライアと私だけで、あとの二人はまだ大きな仕事の対応ができないとなると、私が出ていくのが筋だ。しかし、カネル師は難しい顔をして、大臣と向き合っていた。カネル師は、私が外界に出ることはともかく、宮廷の人間と接することを良しとしなかった。コリンが弟子入りを志願してきたときも、少し迷っていたようだった。結果的に、カネル師は彼のこともかわいがっていたが。

私は私で、その前に交わした師との会話を回想した。外に出ることを拒んだ私と、その背を押そうとする師。もしもこれが別の場所ならば、カネル師は喜んで私を送り出したらだろう。しかし、行く先がまさに王家の管轄内だ。カネル・ローハインの工房にとってアールヴ王とは、やはり特別な意味を持つのだよ。

え？ なぜと言われても、師がアールヴ内に工房を構えた理由など詳しく聞いていないな。カネル師は一度アールヴを出たが、何らかの目的があって帰って来たとしかわからない。だが、何となく推測できるような気もするんだ。まあ、待て。これから話すから。

とにかく、その場をどう収めるべきか。カネル師を行かせるわけにもいかないが、ライアを遣ってもどうしようもない。コリンなら多少の道理が通る可能性もあったが、それを大臣が言外に拒否していた。私が行くのか？ よりによって、あの中に？ 胸が圧迫されるように痛み、鼓動の速度があがるのがわかった。頭の奥を握りつぶされるような苦しみ。誰かが耳元でささやいているような。ああ、このまま押しつぶされてしまいたい。

「先生？ 兄さん？」

ライアとコリンは、我々を交互に見た。私はまだ残る不快感を出さないように、心配そうな二人に「何でもない」と答えた。そして、カネル師を一瞥してから、本当に弱々しい声で口を開

いた。

「失礼いたしました。仰せの通り、私が参上いたします。閣下を直接お訪ねすればよろしいのでしょうか」

カネル師が何かを言いかけたが、私が目を制したので止まった。空気が少しだけ和らぎ、他の弟子二人は少し安堵したようだった。レイフォード氏は目を細めた。

「はい、お名前を言っていただけたらそのまま私に取り次ぐようにしておきます。以前の係の者に預ける必要はありません」

「かしこまりました。それでは、少々お時間をいただきますが、ご容赦ください」

心の遠くで笑い声が聞こえた。それは、私が自分を嘲笑しているかのようなものだった。

大臣が帰り、コリンとライアが細々とした準備をするために退室すると、私とカネル師の二人だけになった。カネル師は、感情を抑えた口調で訊いてきた。

「行くのかい」

「他に誰が出るというのですか。俺が妥当なところでしょう。先方が何を考えているのかはわかりませんが、おそらくこちらが思っているほどのことではないでしょう」

カネル師の、いつかのやり取りとは打って変わった様子に、少し申し訳なさをおぼえた。まあ、どうしようもないことだが。

「けれども」

「外へ出ろって言ったのは、先生ではありませんか。いつかはぶち当たる問題が二つ重なったのは、むしろ幸運だったのかもしれないよ」

「避けることもできたはずのことだ」

椅子に深く座り、師は天を仰ぎながら細く息を吐いた。

「正直、君と城を関わらせたくなかった。生きている限りね」

「城ではなく、あそこは砦ですよ」

「そういう揚げ足はとるんじゃないよ。かわいくないね」

「師匠に似てしまったので」

私が投げやりに笑うと、カネル師も口を歪めるように微笑した。

「コリンを入れた時点で、予測しておくべきだったんです。まあ、弟子の遅い成長を喜んでくださいよ。何事もなく終わらせますから」

そうやって師の肩を叩いてみせたが、自分でも手が震えているのがよくわかった。私は、恐怖していた。私の生まれつきの欠陥が、私を外の世界から遠ざけた。この生まれを喜ぶべきだったのか憎んだほうがよかったのか、今でも判別には困っている。ただ、やはり欠陥と呼ぶしかないのだよ。私の体を満たす脆弱な精神が、私を蝕むのだった。

ああ、こういう風に話すと大層な出来事に聞こえるかもしれないが、お前が思っている通り、傍からはまったく大したことないことだ。すまない、自分のことを話すのは案外難しいな。そうだ、ただ外に出て仕事をするというだけのことだったんだ。

「まあ、仕方ない。コリンも当日は向こうへ行くのだろう？ せいぜい、彼に保護者役をやってもらうんだね」

その言葉に、私は苦笑するしかなかった。カネル師は年寄りくさい掛け声とともに立ち上がり、ライアたちの様子を見に行き部屋を去った。卓上にはまだ箱に入れられたままの勲章があった。開けてみると、窓からの陽光に金が鈍く光った。ライアだけでなく外部の職人の手も大分かかった代物だったから、この完璧な仕上がりに手を入れるのは少し惜しい気がしたが、私も諦めて部屋を出た。

追加の注文がきた勲章だが、まあ、最初にできた勲章を下手にいじったら台無しになるので、手を入れるのは最低限にし、新しく作ったものにそれらを取りつけるような形になった。設計は私が行ったが、守護の文様を適度な大きさに収めるのは難しかった。効果も一定の水準を保ち、それでいて胸を飾る勲章としての役割を損なわない。理想は、言ってしまうのなら簡単だが、実現するのは難しいのだよ。どこを簡略化し、どこを緻密にするのか、その判断が重要なのだ。形にすることができたのは、カネル師の存在があったからだ。

私が自分の部屋で唸っていると必ず、師はどこからともなく現れるのだ。

「今度はどこで詰まっているんだい」

「小ささか緻密さのどちらを犠牲にすべきか、というところで」

この日程で動いてくれる者は外にいないので、ライアに細工を任せることは確定していたが、複雑な設計は彼女に負担がかかるのは明白だった。勲章が小さかったら文様は細かくなりすぎるし、細工のしやすさを考えると今度は大きくなりすぎる。幾重にも線が重なった図を見せると、師は苦笑した。

「君は凝り性というか過剰というか。それが君の性質だから仕方ないけれど」

耳が痛い言葉を吐きながら、師はそのままペンをとり、私の描いた完成図に次々と書き込んでいった。

「本格的な護符が欲しいなら、別途で注文させてしまえばいいよ。あくまでも本来の用途を忘れないで」

私がこだわっていた高い性能を大分省いた図案が、単純な丸や四角、言葉で記されていった。肝心な部分は自分でやれということだ。自分はいくまでも、完成のきっかけを投じるだけ。それが、師の方針だった。他の弟子たちにはもう少し優しくなった気もするが。

「あの男も、どうしてこんな妙なことを言い出すのかね。思いつきで無謀を言うほど愚かではないと見込んでいたんだが。ああ、こんなことコリンには言えないね」

呆れたような溜息とともに、最後の一語を書き終えると、カネル師は無邪気に笑って私を見た。まるで、冒険の企みを考えている子どものような笑顔だった。あれを見ると、背を押されるわけではないが、自分も楽しくてたまらない気分になった。

師の図案は詳細こそ省かれていたが、一人で完成させるところまでもっていくには十分すぎるほどだったしな。私はライアや本職の彫金師ほど細工が得意ではなく、ただ机に向かってどのように魔法を構成していくかということが好きだった。書物と睨みあいながら、私は無我夢中でペンを紙に走らせた。

かなり急いで作ったものの、時間の余裕がなかったため、やはり当日に納めることになってしまった。その分、一番の傑作になったと思うよ。三つの石を中心に展開される幾何学模様が、今でも目に浮かぶ。守護魔法の中でも少し特殊なもので、一般的には檻の象徴である蔓を元に、古代の王墓に用いられた神殿文字の文言をあしらって、さらに……ああ、すまない。お前にとってはつまらない話か。

あの日、私は、数年ぶりに外の空気を全身にあびた。風は街へと吹いており、私たちを急かすように前へ前へと進んでいった。遮るものが何もない景色は遠くまで続いており、遙か西の山並みも、シェスカ大陸やコスモス諸島まで続く海もよく見えた。ああ、世界は美しいのだ……改めてそう実感した。

ふと、自分の頬の緊張が少し緩むのを感じ、どこかやりきれない気持ちになった。カネル師には強がってしまったが、私はやはり恐ろしかったのだ。自分が一歩進むごとに、この繊細な風景がどんどん壊れていく気がした。ぴりぴりと痛む肌に、空気は容赦なく風をあてる。幸福であるはずなのに、私はやはり満たされないような思いだった。

とても雄大な景色の存在が、容赦なく私に押し寄せてくるような思いだった。私は眼前の世界に見とれながらも、まだ遠い場所のような、まるで劇場の客席から舞台を観ているような錯覚にとらわれた。工房にいるときも時たま、このような気がしたのだが、そのときは尚更、私がちゃんと現実を生きているのかただの夢を生きているのか判別がつかない状態だった。それまでずっと、窓の向こうは別世界だったのだから、自分に実感が伴わなかったのかもしれないな。

「兄さん、早くー」

「置いていきますよー」

二人の呼び声に反応し、ぼんやりとし始めた意識が現実に戻された。

コリンと、カネル師に途中までの同行を命じられたライアは、二人で追いかけてこをしながら丘を下っていった。真似をするように私は一步一步、嚴重に封をした荷を手を持ちながら踏み出した。懐かしさにも似た思いがめぐり、朝の匂いの充満した大気が私の胸に侵入した。まだかすかに色が残った空が、天から何か が降臨する兆しを思わせる美しさだったのを覚えている。平原から海、山の稜線の間を埋めるように広がり、上等な絹の質感に似ていた。

それらを素直に受け入れることができなかつたあのころは、それらはまだ異質なものであり、心から楽しむ余裕がない者には強すぎるものだった。もしもカネル師の言葉や大臣の申し出がないまま放り出されたら、きっと私は気が狂っていただろう。

「お祭りの準備も楽しそうね」

「人口密度が高いね。到着する外の人たちの数は、今日か明日が最高らしいよ」

丘を下ると、港沿いの道にいきつく。街道側とはまた違い、こちらはこちらで品をやり取りする商人や船乗りたちで賑わっていた。町を貫く道々の端では、気の早い連中が屋台の準備を始めていたよ。布製の日よけは、工房の窓からではただの色の塊でしかなかった。近くで見てようやく、あのまだら模様が何だったのかを理解できた。

ただ下りてきただけなのに、私はまったく別の町に飛び込んでしまったかのような錯覚に陥った。波の音、海の匂い、鳥たちの羽ばたき、人の気配。それらが私を包んでいた空虚になだれ

こんで、奇妙な感覚を寄越してきたのだ。

「工房も何か出さないのかしら。絶対楽しいのに」

「何をするっていうんだよ」

「安い魔法具を売ったり、ちょっとした見世物をしたり！」

「おいおい、そんなことしていたら、工房に休みなんてなくなってしまうよ。だいたい、君が大変なだけじゃないか」

これから軍の中枢に行くというのに、二人はのんきなものだった。私は、そんな彼らが好きだった。確証があるわけでもなかったが、この子たちなら一緒にいてもいいのだと思ったのだ。そして、それ以前に私が拒んだ人々にも同じようにできたら、と自分の人生を感傷的に顧みた。私の生など後悔の連続だよ……千年経った今でもな。

エアトンの町を挟んで反対側に、アールヴ軍の本拠地となる砦があった。地理上、エアトンは首都より外敵にさらされる危険性が高く、有事の際もここが要となった。まあ、当時のアールヴは比較的平和な方に含まれるのだが。

エアトンで最も大きな建築物である砦は、工房の次室からまっすぐ見ることができた。あの灰色の石でできた建物がまるで陰鬱な棺のようで、自分が墓所として選んだ工房とひそかに比較したものだ。

堅牢な風情は、当時からさらに百年近く前に造られたものだ。もしかしたら、師が建築に携わっていたかもしれない。まだ雑用やお付き役として次室に出入りしていたころから、私はこの建物が苦手だね。威圧感や脅迫めいた雰囲気があった。ああ、胸騒ぎといったほうが正しいだろうか。私は予知や遠視の類はあまり得意ではなかったが、あれだけは例外だった。

そうそう、カネル師もあまりそういった魔法はやらなかったな。できないのかあえて使わないのかは知らないが、少なくとも好んで使うことはしなかった。もしも未来視が師の趣味だったならば、私たちの未来も大分変わったろうよ。

戦もそうなのだが、カネル師の中では魔法が使われるべき状況や目的が厳格に定められているようで、やらないものは頑としてやらなかった。傍から見れば、「空を飛ぶ魔法はよくて、未来を変える魔法はなぜ駄目なのか」と思うかもしれないが、何に反するかということが重要なんだと思う。私は師に比較的近しかった人間だとうぬぼれているが、未だにあの人の考え全てを理解することはできないんだ。

すまない、これは関係あるような、ないような。なるべく魔法のことは話さないほうがいいだろうか。どうも、あのころのことと魔法が重なると、どうも話の筋がずれていくな。蛇足的な話にずれこんだら、遠慮なく言ってくれ。なるべく気をつける。

あの日はまず、砦の中に入ることで苦労した。コリンの父は、名前さえ言ったら入れるようにしておくとは言ったが、戦後間もない砦の式典の日だったから仕方のないことだ。私とライアは魔法使いの印しか持っていないため、コリンの身分証明から始まった。彼の父との間に何人もの人を挟み、ようやく入る許可が下されたときには、日がすっかり高くなっていた。

門が開くと、荘厳な建物がより一層威圧的に感じられた。何となく、私は入りたくないと思ってしまった。この時点で、私の未来は決まっていたのかもしれない。拒むことのできなかった、

嬉しくも悲しくもある未来が。門番立ち会いのもと中に入り、すぐに扉は閉められた。それは重々しい音に思えた。そして、内部に詰まっている空気は、私の足を引っ張って邪魔をするような違和感に満ちていた。

引き渡しの場所を案内され、そこで我々はレイフォード氏と再会した。先の言葉通り、大臣が直々に品の確認をした。箱が開いた瞬間はさすがに緊張したものの、彼はこちらを向いて微笑み、私は安堵した。背中には変な汗をかいていた。

「無理な注文を聞いていただきまして、誠にありがとうございました。これほどの傑作は、そうそう生まれませんことでしょう。与えられた者にとって、最高の誉れとなります」

その言葉を聞いて、部屋の隅でおとなしくしていたライアとコリンもほっとした様子だったのが、背中ごしに伝わった。納めた品はすぐに別室へ運ばれ、いつかのように私たち四人がいるだけの状態となった。

「実を言うと、依頼した日の夜、勲章と護符を兼ねるのは厳しいのではないかという意見をもらいましてね。わがままが過ぎたのではないかと思いましたが、杞憂に終わってよかったです。これも、制作指揮は次室殿が？」

「指揮といってもあまりたいしたことはしておりませんが、おおよその設計は私が。ただ、ローハイン師も目を通してくださいましたし、細工はそこにいるライアが引き受けました」

レイフォード氏はライアを見た。コリンと何か小声でしゃべっていた彼女は、私たちの視線が自分に向いていることを知ると戸惑い、わけもわからない様子で頭を下げた。すばらしいと改めて大臣に褒められると、ライアは顔を真っ赤にした。

「私はただ、手先を使うことに他の方々よりも慣れているだけです。知識など実力は、息子さんの足元にも及びません」

「いえいえ、これほどの腕前なら十分な才能です。将来が楽しみです。きっとあなたはよい工房士になるでしょう」

ライアは一瞬停止し、すぐに笑顔を作りなおした。

「そこまで仰っていただけるなんて光栄です。ご評価に添えるよう、精進していかなくてはなりませんね」

コリンは、そんなライアを複雑そうに見ていた。私も彼らには何も言わず、ただ曖昧にその場をやり過ごすことしかできなかった。

式典に出席するという大臣も出ていくと、コリンとライアは窓辺に並んで外を見ていた。敷地内には、すり鉢状になった舞台があり、正装をした軍人たちが集まっていた。コリン曰く、ここにいるのは軍の中でも位が高い者だということだったが、その数に圧倒された。ライアが呟いた、「国のために戦う人ってこんなにいるのね」という言葉が印象的だった。

「あ、レナードだ」

結局自分の遠眼鏡を使うことになったコリンが、友人を見つけた。屈強な男たちのなかで噂どりの小柄な体格がひときわ目を引き、彼のいる場所だけ少しへこんでしまっているようだった。しかし、彼こそが、後の世に数々の戦での伝説を作り出す武人、レナード＝バグウェルだったのだ。

「昔から仲良かったの？」

「うん。一つ年上で、教師が何人かかぶっていたんだ。よく一緒に勉強したよ。本当に、剣は何度やっても簡単にいなされて、悔しかったな。今思えば敵うはずなかったんだけど、昔はレナードに追いつけ追い越せて感じで、ずっとくっついてた。まさか、ここまで出世するとは思わなかったけれどね」

その声色に何の嫉妬はなく、ただ純粹にコリンは友人の晴れ舞台を無邪気に喜んでた。その様子がほほえましく、そんな風に祝福できる友人が存在するコリンが羨ましかった。

私は遠眼鏡を持っていなかったので見えなかったが、ライアとコリンは勲章の授与を見て嬉しそうにしていた。ライアはあまりこういうところが好きではないので、ついてきてもらって悪い気がしたが、その様子を見てほっとした。私にも遠眼鏡を勧めてきたが、さほど興味はなかったのので断った。王のそばでレナード少年が誇らしそうに立っていたことだけは、なんとなく肉眼で確認できた。

歌声が聞こえてきた。アールヴ国民なら誰もが歌える、王と国を讃える歌だ。軍人たちが歌っていたのだろうが、コリンとライアも真似をして口ずさんだ。

「兄さんも、そんなところにはないで。ほら、一緒に」

コリンがこちらを向いた。私は口を開いて声を出そうとした。しかし、できなかった。耳なりと激しい頭痛がし、寒気が全身を襲った。深い黒の闇が、私の心に食らいつくような、そんな感覚だった。その瞬間、視界は光で眩んだようになり、全身の力が抜けた。どこかで、ざわめきが聞こえた。

気がつくのと、天井があった。

「お目覚めですか？」

「兄さん？」

見知らぬ男性とライアが並んでいた。わけもわからない顔をしていると、別の男性がさらにやってきた。

「いかがでした？」

「おそらく、お疲れだったのだろう。ご滞在を続けられるか都にお戻りいただくか、上で意見が分かれています。そちらもお目覚めですか」

訳のわからない会話の直後に話を振られても、うまく受け答えることができない。目の前の出来事は正常なのに、自分の頭が対応できなかったのだ。自分はベッドに横になっていたことをようやく理解した段階だった。

「兄さんも急に倒れるから、びっくりしちゃいました」

ライアが、ほっと息を吐いた。

「ああ、そうだったのか。心配かけてすまない」

動こうとすると、頭が猛烈に痛んだ。思わず触ると、額に治療用の布が留められていた。倒れた時に切ったらしい。出血もすぐに止められたので、取りたいときに取りやすいと言われた。彼らは医療士でそこが医務室だと、ようやくそのころになって理解できた。

いくらか問診をし、さほど問題はないということで、医務室を追い出された。扉を開けるとまだ日が照っていて、さほど時間がたっていないようだった。

「すまないな、心配をかけた」

さっそく当て布を取りながら謝ると、ライアは少し重い口調だった。

「兄さん、まだ休んでいたほうがいいんじゃないですか？ 顔色、悪いですよ」

「生まれつきだよ」

私なりの冗談だったものの、ライアはいつものようにおかしそうに笑ってはくれなかった。

「大事にいたらなくてよかった」

ライアは私の顔をじっと見た。正確には、私の傷を。

「私がすぐに治してあげられたらよかったけれど、悔しいわ。私、まだ何もできないもの」

ライアは俯いて下唇を噛んだ。私は大臣との会話を思い出し、尋ねても困らせるだけだと思いつつも、尋ねずにはいられなかった。

「やはりお前は、医療士になるのか」

一口で魔法使いといっても、何種類かに分けることができる。まず、我々のような工房に属するような魔法使い、工房士だな。前にも説明したとおり、魔法を使う職人だと思ってくれ。少しばかり魔法の才に恵まれ、研究と技術の提供に明け暮れる。

正確に言うと、工房の魔法使いと相反する立場ではないのだが、特殊能力をもつ魔法使いの希法士というのがいる。定義は難しいのだが、カネル師はこれに当てはまった。炎や水を自由に動かしたり、人を操ったりする魔法使いというのは、昔話のなかにはゴロゴロいるが、実際には数が少ない。工房の人間は常々、人間の限界とのせめぎ合いに悩まされているが、彼らは最初からそんな苦悩とは関係なく、凡人が届きたくても届かない世界の中に最初から存在しているようなものだ。工房に所属している場合もあるが、工房士とは普通とはまったく別の魔法を使って生きている。国によっては重宝されたり迫害されたりするな。

それと、医療に特化した医療士がいる。条件を満たした魔法使いが専門の教育機関で学んで、ようやく資格が与えられる。これは世界共通のもので、厳格に定められたものだった。魔力を持たない医者は病や傷を患者の治癒能力に頼って時間をかけて治すのに対し、医療士は外傷を瞬時に治すことが主な特徴だ。本当に限られた者しかないので、ある意味魔法使いの上流階層に位置する。これも特殊といえば特殊なのだが、生まれつきの希法士でなくても、努力次第でなることは可能である。

ライアは医療士を目指していた。そのためには基礎からの鍛錬が求められる。経験のないライアがいきなり我がローハイ工房の門を叩いたのは、一刻も早く高い技術を身につけたいからであった。それは無謀とか傲慢とか思われて拒否されても仕方のないことだったが、彼女は頑として意志を曲げなかった。

正直言うと、私は工房に残ってほしかった。これは、自分勝手な理由であり、本人には押しつけるべきではなかった。それでも、あの器用さは何よりもすばらしい才能であり、工房士として大成するのはまちがいないことだった。治療魔法を身につけたいなら、私やカネル師が多少教えられとも告げたが、彼女の心は変わらなかった。資格がないと職業として認めてもらえないし、自分は苦しむ人を自らの手で助けたいのだと言った。医療魔法を定められてない場所で学ぶことも公には認められていなかったのも、もぐりみたいなことはライアの性分には合わなかっただろう。

案の定、私の言葉を聞いたライアは困った顔をした。そして、私と目を合わせずに口を開いた。

「私はとても、自分の境遇を考えると言葉にできないくらい恵まれていると思います。気にかけてくれる人たちの期待に応えたい。でも……」

「すまない、馬鹿な質問をした。聞かなかったことにしてくれ。ところで、コリンは？」

少し表情を和らげ、ライアは答えた。

「お父様と一緒に、向こうの建物にいきました。ちょっと、いろいろあって」

それきり、しばらく黙りこんで、ライアは続けた。

「こういうところについてわかったんですけど、コリンって本当は全然違う世界の人なんですね。なんか、いつもコリンはああだからつい忘れてしまうけれど。偉い人たちに囲まれても平然としているのを見ると、まったくの別人みたい」

その瞬間、ライアが一瞬震えたように感じた。けれども、彼女は何事もなかったように笑った。

「ごめんなさい、今言ったことは忘れてください。これでさっきのとおあいこにしましょう」

そして、最初に通された部屋に戻ると、すでにコリンもレイフォード氏も戻ってきていた。他にも初対面の人物が二人いて、一人はコリンの長兄だった。もう一人は、誰と尋ねることもなくレナードだとすぐわかった。彼は、近くで見てもとても戦場帰りとは思えない風貌だったが、目の力が強い人物だった。

「兄さん、大丈夫でしたか？ すみません、そちらに行けなくて」

まずコリンが立ち上がり、小走りで近寄って来た。私はとりあえず微笑んだ。

「すまない。ただの貧血らしい。今日は気温が高いから、一気にきたみたいだ」

それを聞いたコリンは胸を撫で下ろした。そして、私をレナードに紹介した。

「コリンから手紙でよく聞いています」

レナードは澆刺とした様子でそう言った。今思えば、彼が私のどんなことを書いているのか、もっと聞けばよかったかもしれない。

夜はまたあちこちに引っ張りだこだというレナードを囲んで、酒を片手に束の間の談話が行われた。ライアは、町に用事があるとかで先に出て行った。実のところ、そのとき耳鳴りや頭痛が時折強くなったりもしたので私も帰りたかったが、大臣に引き止められてそのまま居残ってしまった。何となく帰っては悪いと思ってしまったのだ。ライアとコリンは心配してくれたが、とっさに大丈夫だと言ってしまったため後に退けなくなったのもあった。私が愚かなのは、このとき始まったことではないが。

「今度の戦はまちがいなく、後の世にも名を残すだろうね。アールヴが戦勝国側に回れたのは実に幸運だ」

「しかし、閣下。我々は戦争末期に少しだけ戦に加わっただけです。厳密に言うと、戦勝国とは言えないでしょう」

大臣相手に、レナードは物おじもせず食らいついた。それは、昔からの馴染みがなせる技なのか、彼個人の性格なのかはわからなかったが、見ている私の方が焦ってしまった。

「レナード、金ぴかを胸につけているくせに、ダリエの戦いをもう忘れたのかい？ お前の存在が、その証明じゃないか」

将来の中枢役人候補であるコリンの兄が、諭すように言った。

「確かにそれも大きいけど、そういうことではない」

さりげなく、大臣閣下はご自分の長男の言葉を否定した。

「形はどうであれ、戦勝国側についたということが重要なのだ。これから先も、アールヴは交易でも政治でもシェスカ大陸を避けることはできない。貸しが一つでもあると、今後がやりやすくなる」

レイフォード氏は、グラスに注がれたまま残っていた葡萄酒のほとんどを、一口で飲みほした。私は、会話にどう入っていいのかわからず、時たま酒を口に運ぶ以外は何もできなかった。そもそも、どうして自分がここにいるのかも忘れかけていた。

「貸しだなんて。僕にとっては借りです。向こうに行って心底思いました。アールヴは、世界にとってはまだ田舎なんだって」

「おい、レナード」

鍛えた体でよく通る声を発する幼馴染に、コリンは酒で紅潮した顔を一気に青くさせた。

「他人に聞かれたらどうする？ ただでさえお前には敵が多いのに」

「本心を隠しても仕方ないだろう。それに、最初から全部口に出しておいたほうが、相手も僕がどんな人間か疑う手間も省けるし」

それはそうだけど、とコリンは口ごもった。笑う状況ではなかったので堪えたが、私はひそかにおかしかった。コリンも裏表があまりない人間だと思っていたが、レナードの極端すぎる性格には到底敵わなかった。ああ、コリンはこんな人物と友人なのか、と思わず納得してしまった。

「アールヴは軽んじられているか」

息を吐くように呟くレイフォード氏に、一同の視線が集中した。レナードは、はっきりと頷いた。

「すべてのシェスカ人がそうではありませんが、向こうの軍人には多少その意識はありました。彼らにとっては、たとえ何百年という歴史があろうと我々は田舎者なのです。何はともあれ、広い世界を知ることができたのは、今回の最高の収穫でした」

「まさか、同盟相手の兵を殴ったりなんか」

コリンの問いにレナードは苦笑し、首で否定した。

「上官にたっぷり釘を刺されたからね。それに、僕が配置された先は、恵まれていた。エクシアのシュリック公の軍に加わったんだ！ 評判通りの素晴らしい將軍だったよ。あの方がいなかったから、西軍の勝利は危うかっただろうね……」

レナードは興奮した口調ではあったが、言い進めるにつれて勢いが緩まった。そして、持っていた杯の氷が溶けるのをじっと見つめた。私たちが想像できないほどの修羅場を回想していたのかもしれない。戦には、その肉体に恐怖を刻み込んだ者しか理解できない領域がある。

彼は、自分でも意外なほど物思いにふけていたのかもしれない。はっと顔を上げると、笑顔を作った。こういうところは、ライアに似ていた。レナードとライアはあまり会話をしているところを見なかったが、案外、コリン以上に気の合う間柄になったかもしれない。いや、やはり双方にとってコリンの存在は欠かせないかな。

「あと、マティアスのフランツ王太子殿下。マティアスは魔法が有名だけれど、あの人もシュリック公に劣らない。僕と年は変わらないけれど、西の若き獅子と呼ばれていて、圧倒的な強さでした」

レナードは少し口調を強めた。

「大將が優れていない軍ほど悲惨なものはありません。有能な者にもっと位を与えるか、貴族たちが常に民よりも優れていないといけません」

「ふむ、心得ておこう」

軍の大將といえば王であり、そのすぐ下にいるのは貴族というのが当時の主流だった。時代によって多少変動はあるが、こうした体制は心あるものにとって実に歯がゆいものだった。

「あの、マティアス王家はやはり、魔法使いの中でも特別な位置づけにあるのでしょうか？ コ

リンから聞いていた魔法使いとは随分違うようでしたが」

そこでまさか私に振られるとは思わなかった。思わず、酒を少しこぼしそうになってしまった。レナードの弁によると、フランツは馬上で剣を奮いながら、光を自由自在に操って敵を確実に仕留めていたという。この証言からフランツがどの系統の魔法使いであることが予想できるか、数通りの説をコリンとともに挙げた。その場にいた面々は、教養として魔法を学んではいたが、深い知識は教えられなかったらしく、私たちの言葉に感心していた。貴族には学ぶべきことがたくさんあるにしても、都の魔法使いの怠慢だな。

「無論、マティアスも工房に所属する魔法使いが大半で、産業が活発になるように政府から支援されています。それだけでなく、希法士の保護にも熱心です。初代マティアス王も元は希法士ですから、その子孫であるフランツ殿下もそれを受け継いでいるのでは？」

魔法を学びたかったらマティアスに渡る人間も多い。王家から離れたカネル師も、一時期はマティアスに身を置いていた。数年経ったらエアトンへ移ってしまったが。

私の言葉に、コリンがさらに続けた。

「あの国は、魔法が何よりも基準になるところなんですよ。まず、代々、マティアス王は国内の魔法事業を全て取り仕切る立場にあります。魔法の才に恵まれなかった王太子が廃位になったり、王の子女の中で魔法力が高い順に王位継承権が与えられたりもしました」

彼の父兄は感心したような素振りだったが、レナードは露骨に顔をしかめた。理解できない世界だ、と呟いたのがかすかに聞こえた。

そこから話題はシェスカ大陸の諸国に広がり、その場唯一の私の出番は静かに終わった。地理や国際情勢のことになると、彼らのほうがずっと詳しいからな。ふとコリンを見ると、安堵したように笑ったので、私も微笑み返した。正直言うと、これ以上激しくなったらすぐに動かなくなってしまうのではないかと思うほど心臓が早鐘を打っていたのだが。

やがてレナードは付き人らしき人間に呼ばれ、退席した。そのとき、ようやく私も工房へ帰る口実ができた。

「すみません、父が無理に引き止めて」

「いや、こちらこそ考えももたず残ってしまってすまなかった。心配かけてしまった」

コリンと小声で話をしていると、レイフォード氏は腰を上げた。

「次室殿、下までお見送りさせていただきます」

「いいえ、とんでもございません」

突然の申し出に私は固辞したが、結局押し切られてしまった。コリンもついてこようとしたが、父親の言いつけでその場にと留まった。家族で何やら積もる話でもあったのだろう。

「式典の途中で倒れられたそうですが」

「はい、お騒がせしました。勲章授与のところまでは上から拝見していたのですが」

大臣と二人、並んで長い廊下を歩いた。正確には、私の方が一歩ほど後ろだったが。

「都から連れてきた魔法使いも、あの勲章には驚いていましたよ。私はあまり存じ上げないのですが、なかなか変わった意匠なのだから。ご自分の創作ですか？」

「先達より受け継いだ守護魔法研究の知識が七割、ローハイン師の助言が三割というところだし

ようか。私一人ではなかなか」

「いやいや、ご謙遜を」

軽く笑い合いながら階段を下り、入口までさらに歩いた。軍の要塞だけに、あそこは入り組んだ造りをしていて、案内がなければ迷いそうだった。

ちょうど通路が変わるところで、私はまた眩暈に襲われた。ここで倒れてはいけない、そう思ってこらえようとしたものの、曲がったところで片膝をついてしまった。一瞬遅れて、レイフォード氏の足音が止まった。

「いかがなさいましたか？」

背中に、冷氣のようなものを感じた。振り向くと、奥までまっすぐ続く廊下があるだけだった。それなのに、私には闇がぽっかりと口を開けているように思えて仕方がなかったのである。

「次室殿？」

はっとして、レイフォード氏を見上げる。少し淡白な視線があった。昼間のときのように、また視界がちらちらと揺れた。頭の中に雑音が広がり、その向こうで誰かが何か話しているのにまったく聞き取れないような不快感に襲われた。もう一度大臣に呼びかけられ、私は無礼を詫びながら何とか起き上がった。

「酒には弱くないのですが、少しまだ昼間の体調を引きずっているようですね。ですが、ご心配には及びません」

「そうですか」

そうやって優しく微笑む大臣だったが、言いようのない悪寒に抱きしめられる。なんとなく、この人を信用してはいけない気がした。コリンの父親なのだし、人柄も文句をつけられるような人ではなかった。それなのにそう感じてしまった自分に嫌悪感があった。私は再び歩き出しながら、後方を指して尋ねた。

「あの奥は何かあるのですか？」

本当に何気ない、無意識のうちに出た問いだった。それなのに彼ははっとした表情で私と奥を一度ずつ見つめた。

「ここの者も滅多に使わないような場所しかありません。……何か？」

「いいえ。こんな広い建物に入ったのは生まれて初めてですから、いろいろな場所が気になってしまって。田舎者で恐縮です」

彼は少しだけ笑った。そして、入口までたどり着くと、こちらが慌てるほどまた丁寧に頭を下げてくれた。私も何度も招待の礼を言い、早足で砦を後にした。

外に出ると夜の帳がすっかり下りていて、町は意外なほど静かだった。ただ、通りかかる家の中から時折会話が聞こえてきて、祭りの準備をしていることが窺えた。後でわかったのだが、祭りの準備は昼では屋外、夜では屋内で行うのが慣習だった。思いのほか静寂だった空間で深呼吸すると、清浄な空気が肺を満たしてくれた。

ライアと医務室をあとにしたときはまだ日も高かったのに、と考えながら、私は工房の丘を目指した。波の音がなぜか優しく聞こえ、思わず涙が出た。

砦を出て一人になった途端、私を取り巻いていた耳鳴りや頭痛、囁き声などが消えてしまった

のだ。ただ存在するのは、無そのものだった。心地よい、安らぎのような静寂に包まれると、私を押しえつけていた空気は姿を消し、やわらかなぬくもりに満たされるかのような思いだった。

一瞬振り向いたが、灯が盛大について燦々とした砦の雰囲気気圧され、すぐに私は背を向けた。後ろから得体の知れない不気味な何かが私に抱きつき囁くような気がしたが、振り払うように去った。

夜もだんだんと深まり、人通りのない街は心が落ち着いた。光が降り注ぐ昼は眩しくて、私の心を焦がしてばかりだった。それに比べて、夜は、全てをひきつけるような強烈さはなくとも穏やかな安らぎがあった。色に染まりきった夜の風景はいつも私の目に優しく入り込み、染み渡った。その瞬間、慰められる気分になったのだ。闇に包まれて隠された夜こそが、私の世界だった。特に、その日のように体全体が外に浸かったときは、それがよくわかった。私は、昼のような空間に、限りなく不向きな存在であったのだ。

ふと、胸が熱く締めつけられる気がした。普通の人間のように生きられないことが無念なのか、そんな状況を嬉しく思うのかは自分でもよくわからなかった。その日、私は一人の人間として外界で他者と触れ合った。確かに、それは私にとって幸運だったのは、当時の愚鈍な私でも自覚した。しかし、きっと自分はこのまま人に知られることなく、永遠にエアトンの片隅でひっそりと朽ちていくべきなのではないかという思いは、相変わらず私の心に根をはっていた。

砦を出たときの解放感が、私の正直な気持ちだったのだろう。歩きながら考え、そう結論付けるとなぜだかひどく悲しい気分になったのである。いつしか、私は街中を進んでいるという感覚がなくなり、目の前の光景をまるでどこか別の場所から遠視しているような気分になった。ふわふわと漂うように景色が動いていく。ああ、このままどこか遠くへ行って消えてしまったら何も考えずにすむのに。自嘲しながら、工房の丘まで上っていった。

意外なことに、私の部屋に明かりがついていた。逆光になった人影の端が銀色に光り、ああカネル師だと思ったとたん、ほっとした。そして同時に、ようやく私の日常に戻ってきた実感がわいてきた。のろのろと工房の二階へあがって扉を開けると、遠くを見るような表情の師が窓辺に立っていたのだった。

「おかえり」

首をかしげて笑う師に、私は頭を下げた。そして、そのまま倒れてしまった。師は一瞬息を飲んだ後、腕を軽くふるって、そばの長椅子へ私を手で触れることなく運んだ。希法士としての師の魔法に触れるのは久しぶりだった。ああ、そうだ。念じて物を動かすのは希法のひとつだよ。ついでに師は、机に置いてあった布に触れてすぐに私の額に寄越した。直前に乾いていたはずのそれは濡れていた。師ならたやすくできる魔法だった。難しいんだよ、一般の魔法使いがそういうことをするのは。

「無事戻ってきて何より、と思ったのだが」

「ご心配おかけしました。でも、用事は果たせましたよ」

「本当に？」

間髪入れずに、師は尋ねてきた。私は、その日にあった出来事を正直に話した。師は、複雑な心情を隠した様子でそれを聞いていた。

「不甲斐ないばかりです」

「あの砦の中にしばらくいらただけでも立派だよ。この工房とは良くも悪くも真逆だからね。君はレイフォードをどう思う？」

普段私が座っている席に、師は腰を下ろした。おそらく、師がその椅子に座ったのは初めてのことだろう。

「俺は政治のことなんか全然詳しくないから、大臣としてどうかは判りませんが、丁寧で良い人だと思いましたよ。さすがはコリンの父親ですね」

窓の向こうには、ぼんやりと灯りに包まれた砦があった。見慣れたものであったはずなのに、まるでもっと遠くにあるような、不思議な感じだった。そのときは、戦後で平常時ではないからだと思った。

「コリンはよくできた息子だと思うよ」

「俺もそう思います。ただ、大臣閣下とは気が合わないかもしれませんね、やはり」

カネル師は金色の瞳をこちらに向けた。確か、あの人は夜の方が目がよかった覚えがある。

「優しい方ですが、同じ立場であってもコリンほど親しくはできないでしょう。こう言うのも大変申し訳ないのですが、相性が悪いのかもしれませんが」

「砦に何かあったのではないかい？」

言われてみると、砦を取り巻くような不快感が、風に乗ってこちらまで届いてくるような気がした。私は肯定も否定もできず、あいまいにごまかした。

「あそこは、俺の行く場所ではなかったんです。ちょっと居ただけで倒れてしまうのですから」

「すまなかったね、押しつけて」

カネル師は珍しく謝罪した。冗談まじりの謝りなら数え切れないほど耳にしたが、師が真面目にそういった態度をとるのはめったにない。というのも、謝るまでの状況自体を師が作る事がなかったからなのだが。

「先生が行くよりもずっといいでしょう？ 陛下もいらしていたんですから」

特に意識したわけではないのだが、つい陛下という単語に力が入ってしまった。気まずかったが、カネル師はそれには触れないでくれた。

「まあね」

「.....今でも、王宮に戻るつもりはないんですか？」

カネル師は、眉を下げるようにしながら笑った。

「ついてきてくれるかい？」

無理です、と私は首を横に振った。すると師は、自分も無理みたいだと言って、肩をすくめた。私は、カネル師の口から無理という言葉が出たことも意外だった。いや、ラーディラスとはいえ師も人間なのだから、そうなのかもしれないのだが。

「向こうが私を必要としていない。それなら、私から近づいても仕方ないんだよ」

このとき、私はまだ師の言葉をきちんと理解することができなかった。ああ、お前はカネル師

に疑問があるようだが、それはこれからきちんと話すから少し待っていてくれ。最初は細かく話すつもりなんかなかったから、この間は誤解を招くような言い方になってしまってすまない。ちゃんと話すから。

「先生、もし俺がいないときにあの人が申し出ていたら、断りましたか？」

「いや、もしも君がいなかったら、彼は来ていない。来ても意味がないからね」

師は、どこからか酒瓶を取り出し、杯に注いだ。そして、もう一つの杯にも同量を注ぐと、私に差し出した。

「禁酒はどうしたんですか。それに、俺はもう飲んでできました」

「いいじゃないか。あっちとこっちでは質が違う」

そのやけに自信のある様子に、目眩がありながらも私はしぶしぶ酒を受け取った。それというのもやはり、カネル師の言葉にはそうさせられる力があるからだった。

「言うておくけど、これ、あとで片づけてくださいね。コリンとライアがここで酒飲むことを覚えてほしくありませんから」

「君の部屋なんだから、君が片づけない限りは置かれ続けるよ」

そう言って、意地悪くライアとコリンの私物をつつく師に、私は何も言えなかった。少しむくれて杯をあおると、不思議な味が体全体に広がった。喉は熱く、皮膚は冷たかった。私が思わず口を押さえると、師は楽しそうに笑った。

「面白い味だろ？ これは薬として昔に飲まれていた。目眩によく効くんだ」

「目は冴えました……」

カネル師は窓を開けた。夜の匂いを孕んだ風が一気に部屋に入ってきて、私を覚醒させていった。その清涼な空気を吸いこむたびに、生命力をもらっているような気分になった。砦の気配はなかった。町は静かで、祭りの準備をしていると思われる室内の灯りがちらちらと揺れていた。エアトンほどの都市になると、町は地上の星空のようだった。

「先生、味音痴になりましたね」

「いや。昔は、大人になればこれは美味しく感じると思っていたんだ。やっぱり、私の味覚は間違ってたよ。ああ、この不味さが懐かしい」

カネル師は、味を慈しむように目を閉じた。何を想っているのか、私には見当がつかなかった。大人になるといっても、この人の場合は数百年単位のことだったからな。

「懐かしいものを見つけたから、ついね。こっちは普通の酒だよ」

別の瓶がどこからか出現した。実を言うと、師が酒を飲む姿などそのときまでまともに見たことはなかった。先ほども言ったように、カネル師は私よりも少しばかり若い容姿だったから、飲まなくても不思議な気はしなかった。自分が子どものころからずっとそばにいたが、大人ぶりたときも行動には移さないで、いつも言葉だけで年寄りぶっていた。

「先生と酒を飲むってなんか変な感じですね」

「昔のことを考えると、ふと飲みたくなるんだよ。過去を語る相手は……もうどこにもいないから、いつも一人だ。だから、君が飲める年になったのは感慨深いね」

その言葉を隅から隅まで噛みしめると、先に飲んだ酒の味が口の中に広がったような気がした

。

「まるで親のようですね」

私が苦笑すると、カネル師も私の真似をしたような表情を浮かべた。

「親だよ。ずっと面倒をみているからね。君はもちろん、弟子たちはみんな私の子だ。君ほど難儀な人間はなかなかいなかったけれど」

胸が痛かったが、どこか笑えた。それほどの時間がこの工房で流れたということなのかと、いささか感傷的になった。カネル師がそんな話題を出せるのも、長い時とその間のやりとりがあったからだと考えると、やはり私は工房での生活が愛おしくて仕方なかったのだ。

「なんとなく最近は何の夢をよく見るのさ。もしかしたら、良いことか悪いことの前兆かもね」

カネル師は多くの魔法を自由に使いこなせる能力があったが、未来予知などは使うことができなかった。それが師の素質なのかラーディアスの性質なのか、今考えると判断が難しいな。なんとなく師の性質のような気がしてきた。ラーディアスの血は半分だからな。他のラーディアスも、一つか二つの能力に特化している者が多かったからな。それを考えると、師は広い分野での...ん？ ああ、他のラーディアスか。何人か会っているんだ。いや、二人だけではない。

このとき、もしも私に未来を知る力があれば、カネル師に何らかの進言をしたらどうだろう。しかし、何も知らなかった私は、また年寄りぶりたいが故の発言だとしか思っていなかった。本当に、私は馬鹿ものだな。しかし、たとえ知っていても、自分に何ができたのかもよくわからないんだがな。

そうして、私はゆっくりと破滅への道を転がっていくのだった。

「酒もね、ただの懐古の延長。仲間は大酒飲みばかりだったけど、見かけが子どものせいで、誰も飲ませてくれなかった。あの中では二番目に年上だったのに。で、ようやく見かけも大丈夫になったころには、誰もいないときだ」

そう言って自嘲するように笑うから、私はどう言葉をかけようか悩んだ。それに気づいた師は、少なくとも私の目からは全然そう見えない調子で謝った。

「すまない、君の立場じゃ何も言えないね。気にしないで、ただの独り言だよ。もう一杯どうだい？」

返事を待たずに酒を注いできた。仕方ないので、そのまま口をつけた。ここなら、寝こんでしまってもどうにかなると思ったから。

皆で飲むよりかはずっと心地よい気分で、私はエアトンの夜を眺めた。次室は町側なので、海は少ししか見えなかったが、その分美しく整えられた町や街道が伸びる平原、神聖なる山々まで見渡せた。私は昔から、そのような景色を見るのは好きだった。だから、ここにいるのもなかなか好きなんだ。少々狭いけれどな。

「皆以外は どうだった？ 少しは歩いたんだろう？」

「さすがにうろちょろはできませんでしたよ。時間があまりなかったものですから。でも.....」

たった少し近づいただけの景色。ただ壁がなくなっただけの世界は、思いのほか心地よかった。それは、しがらみがなかったからで、もしも人や物に縛られたらきっと不快になるだろう。しかし、単純に向き合うだけなら、私はこのうえなく幸せになれるにちがいない。

こちらの出方を窺う師に私は笑いかけ、出てよかったと思いたい、と答えた。

「先生は、故郷から外を出るとき、どうでしたか？」

ラーディアスはずいぶん数が少なく、現在は世界各地に散っている。しかし、もとは一つの島で暮らしていた。師も、世界を旅する前はそこでずっと生活していたのだった。

「そうだな、あんまり感慨はなかったよ。何せ、外は碌でもない場所だと思っていたから」

杯を片手にそう言うものだから、私は思わず吹き出してしまった。そんな私を見てカネル師も笑い、しばらく意味もなく二人で笑い合った。

「だから、島から出るのが面倒くさくてね。すごく嫌がったものさ。案外、出てみたら面白かったけれど。迎えにきた人間がよかったからね」

「怖くありませんでしたか？」

「いや、怖くはなかった」

くいと酒をまた一口飲んでいて師だが、急にまじめな調子になったので、私は少しだけ戸惑いを覚えた。それはすぐに消えたのだけれども。

「一人ではなかったから」

私はそれを、迎えにきたという仲間だと解釈した。

「仲間がいると心強いものでしょうか」

ふと、その日のことを思い出した。外に出ても思いのほか何もなかったのは、ライアやコリンがいてくれたおかげかもしれない、と。自分一人ではどこにいても居心地が悪く、精神はもっと激しく乱れ、どうすることもできなかったと思う。

「ああ、だから、君も彼らを大事にきなさい」

いつの間にやら説教されている気分になり、私は思わず苦笑した。そのときには、額に当てた布の水気はだいぶ蒸発していた。

「今夜はずいぶんおしゃべりですね、先生」

開け放した窓から、急に少し強い風が吹いた。師の銀髪があおられ、水面に浮かぶ月のように揺れ動いた。

「年をとったってことさ」

師は、瓶の中に最後まで残っていた酒を、無理やり自分の杯に注いだ。

「自分はああはなるまいと決めていたんだが、やっぱり時が経つとその分話したくてたまらなくなるらしい。君もすぐにわかるさ」

このときはまだ、そんなのどれくらい先なのか見当もつかなかった。若かったんだな、やはり。今は師の気持ちがよくわかるよ。

ふと、鼻歌が聞こえた。懐かしい、師の歌だった。私が弟子入りしたころはよく歌っていた。師の母親か誰かから教わったのだと、そのときに聞いた覚えがある。

「久しぶりですね、先生が歌うのは」

「そうかい？ じゃあ、きっと今日はそういう気分なんだね」

カネル師はあまり歌が上手ではなかったが、幼かった私にとっては子守唄のようなものだった。その前の師の言葉通り、工房に入ってから、カネル師と…… もう一人、兄弟子が親代わりみ

たいなものだったからな。なんとなく安心するような気分になったのだが、自分が子どもに戻ったみたいで少し恥ずかしい気もした。

開け放した窓から、また風が吹いた。すると、今度は寒気がして、そんな季節ではないのに私は思わず歯を鳴らした。脳の重力で全身がつぶされそうな気分だった。

「どうした？」

「酔ったみたいです」

自己認識がどうも薄い私がそう告げると、師は、それはすまないと返してきた。いつものように全然すまなそうに見えない態度で言うのだから、苦しかったものの、少しほっとしてしまった。カネル師は私の方に歩いてくると、布に手を当てた。その瞬間、カネル師の魔力の気配を感じ、すぐに布はまた湿った。

師は優しく笑っていて、それに安心する自分が情けなくなった。どうしてもっと普通に生きられないのだろう、どうして誰かに世話を焼いてもらって、頼らないと何もできないのかと自己嫌悪に浸ったが、どうしようもないことだった。幼い自分の性質を恨み、他の手段をとらないことを軽蔑した。

せめて、誰かの役に立ってから死にたい。その考えが浮かんだ瞬間、泣きそうになったが、師が話しかけてくるのでこらえて、何もなかったように相槌を打った。

師は、残り少ない酒をちびちびと飲みながら他愛もない話を続けたが、いきなりぽつりと呟いた。

「レイフォードのことだけれど」

それがいつもよりもずっと低い声だったので、私は動揺して酒を少し床にこぼした。

「今後は関わらないほうがいい。憎むほど悪いやつではないけれど、信用しないで。彼は、国と王のためなら何でもやる人間だ。私だろうがコリンだろうが、君ですら利用するだろう。コリン伝てに干渉されても、できればはぐらかしてくれ」

信用しないほうがいいというのは自分も思った。そう言ってもよかったのだが、あえて言わないでおいた。

「忠告ですか？」

「命令はしたくない。あえて言えば、頼みだね」

「了解いたしました」

カネル師は苦々しい顔つきで星を睨んだ。

「コリンにはこの話に触れないでおいてくれ。彼に申し訳ないから。それと、私に会いたいと言っても、どうにか言い訳を考えて断わってくれないか。強力な魔法使いよりも、ああいった魔法とは無縁の人間のほうが付き合いづらい」

カネル師と大臣の間に何があったのか、私はついに詳細を知ることができなかった。しかし、師がここまで言うからにはよほどの事情があり、私は師のために自分ができることをしたかった。まさか、それがこんな結果になるなんて思いもよらなかった。

私は、結果を読み間違えたのだよ。もしもあのとき……いや、過去に「もしも」は不要だな。私の人生、後悔ばかりだとは言ったよな。本当に、もしもを言いたくなる状況には何度も出会っ

たが、すべて仕方のないことだった。まあ、あの事件のおかげで、お前や他の者たちと出会えたのだから、こうなるべくしてこうなったとしか言いようがないな。

その晩は、結局その話で終わった。ライアは町の友人の家から夜遅くに帰り、コリンはこの翌朝に戻ってきた。一緒に行こうと約束した祭りまで、あと少しだった。

「もう、先生ったら。兄さんにお酒なんて飲ませて」

ライアの呆れた声が部屋に響いたのは、祭りの前日のことだった。私は、砦を訪ねた日から抱えていた頭痛がひどくなり、体調が思わしくなかった。おそらく酒を久しぶりにしこたま飲んだからだろうと、そのときは結論づけた。

いつものようにライアはコリンの三割増しの課題に取り組んでおり、コリンは颯爽と終わらせてしまっていて、私の蔵書を読んでいた。私は重い体を預けるように、椅子に座らせてもらっていた。

「すまない、俺が不甲斐ないんだ。存分に怒ってくれ、俺が許す」

「コリンが三日酔いなんてしたら叩きつぶしますけれど、兄さんに怒れるはずないじゃないですか」

「おい、ライア。君は僕を何だと思っているんだ」

コリンがパタンと本を閉じた。聞いていないような素振りでも聞いていたようだった。

「お祭りは？」

「最悪、行けないかもしれない」

「えー！」

直情的すぎるほどの感情表現をしてくれた。

「お前らだけで行ってくれ」

騒いでいた彼らはそこで静かに顔を見合わせ、首を傾げながら笑い、別の方向に目をやった。それは全て、寸分狂うことなく同時に行われた。

その後はしばし沈黙が流れたが、やがてコリンが机を指先で叩いた。

「ライア、終わった？」

「ごめん、まだ」

机にかじりついたまま視線を上げずにライアは言い、コリンは口をへの字に曲げた。

「じゃあ、僕は先に温室行ってるから」

「待って、すぐに終わるから！」

そこでようやくライアは顔を上げたが、コリンは扉に手を掛けた。

「君は課題やってなよ。僕一人でやった方が早く終わる。分担だよ」

それは、彼なりの優しさだった。ライアは一瞬とぼけた表情をした後、少し考えて頷き、また机にかじりついた。コリンはにっこりと笑うと、部屋を出ていった。私はどうしようか迷ったが、コリンを追いかけることにした。

「待て、コリン。俺も手伝うから。さすがにお前一人では少々きついだろう」

「今は重労働してはいけませんよ。体力ないくせに」

少し弾んだ調子の声は、まさしく工房にいるときのコリンだった。無論、砦でも快活ではあったが、レナードと比較しなくても若干おとなしかった。あちらが「貴族としてのコリン」だったのである。どちらが本当のコリンかという、なんとなく貴族側のような気がしたが、私は工房のコリンの方が好きだった。

「体力ないとか言うな」

「それだけの力があつたら、お祭り一緒に行けますよね」

そう言われると、言葉に詰まった。しばらく私の顔をじっと見つめていたコリンは、大げさに溜め息をついた。

「お祭りのためにおとなしく寝ていてください。大丈夫、さぼったりしませんから」

実を言うと、後輩の指導をするに寝ていてはいけないということで、若干の無理をしていた。こんな風になったのは酒のせいではなく、外の世界に変わったせいだと私は思っていた。本当にしょうもない体質の自分を笑ったが、周囲の者にはこのおかしさは伝わらなかったらしい。口だといろいろ言っていたが、コリンもライアも本当は心配してくれたのだよ。

「でも、困ったなあ。下手するとライアと二人きりか」

「なんだ、また喧嘩でもしたのか。いつだって二人なのに」

直前まであんなに仲が良かったのにそれはありえないとは思いつつも、私は尋ねた。案の定コリンは首の動きだけで否定し、私を力のない目で見てきた。

「複雑な事情があるんですよ、こっちは」

「ああ、そうかい。コリンは工房に来ると生意気になるな。家族とかの前の方が、お前はまともだ」

私は何気ない口調でからかったつもりでいたのだが、ふざけて笑っていたコリンが急に真面目な顔になった。ふと、あの晩のカネル師を思い出した。

「兄さん、あの日は父が引き止めて本当にすみませんでした」

そう謝られるのは、当日と翌日を合わせて三回目だった。私は何度も、自分の体調管理がなっていないからであり、大臣のせいではないと言っていたのだが。

「いえ、父が悪いんです。父が兄さんを引っ張り出すから……」

そこまで言っておきながら、語尾を濁した。コリンは時々、こんな表情を見せた。家と工房に挟まれて苦勞していたのだろうが、そこに私が入るのは、客観的に考えると奇妙な話であった。

「何か、見送られたときに変わったことはありませんでしたか？」

「コリン？」

コリンは少し俯いた。その雰囲気は、間違いなく砦の中にいたときとそっくりだった。

「……あまり、父を信用しないでください。息子でも、ときどき何を考えているのかわからないときがあるので」

私もそう言ったのでこう言うのもなんだが、ここまで信用するなといわれる大臣が少し哀れになってきた。本当に、その時まで彼が工房に何か問題を起こしたことはなかったのだ。強いて言うなら、勲章の再発注くらいだろうか。

「でも、コリン」

「僕、行きますね。兄さんは休んでいてください」

コリンが指を私の鼻先に当てるようにすると、廊下の向こうからカネル師が音もなくやってきた。カネル師は不思議そうに私たちを見たが、コリンに向かって微笑みかけた。

「コリンだけかい。悪いけれど、ライアと一緒に、町のウェイトンのところまで行ってきてくれないか」

「はい、わかりました」

コリンは師に丁寧に礼をし、ライアのいる次室まで戻っていった。その擦れ違いさまに彼は、「先生には今の話はしないでください」と早口で静かに言い残した。今思うと、師も含めた私の周りは秘密が多い人間ばかりだったな。しかも、師第三人揃ってここまで言動が一致するとは。もしかしたら、彼がライアもいつか次室となって師の補佐に当たるのではないかという予感が、私によぎった。

「どうした？」

「寝ていると言われました。今日は甘えてそうさせてもらうつもりです。明日のためにもね」

「それがいい。ゆっくり休んでいなさい。すまないが、私も少し出かける」

どこへ、とは聞かないのが我々の暗黙の了解だった。まあ、師で言うところの「おつとめ」だな。ラーディアスの師がへたに外へ出かけると一般人が騒いで大変なことになるから、この工房内のどこかに引きこもる場所か秘密の出口を持っているという噂が弟子たちの間で流れていた。

「行ってらっしゃいませ。では、俺は表に鍵をかけてきます。コリンとライアなら、いつも裏口から出入りしているでしょうから」

カネル師は無理するなと言ったが、私は大丈夫だと振り払った。別に大した距離ではないし、まさか師に鍵かけなんて基本的な雑用をさせるわけにもいかなかった。多少身体が重かったのだが、私はそのまま表口へ向かった。

玄関の扉には外側から見れば真っ黒な板が嵌め込まれていたが、それは内側から見るとただの色なし硝子に変化するのだ。門の向こうでちらちらと風に揺れる草花もはっきりと見えた。それがいつもの風景だった。しかし、そこにまた黒い影があった。怪訝に思う必要はなかった。あのときの、レイフォード氏の馬車だったから。

私は、思わず扉を開けてしまった。向こうから見れば、扉などただの飾りつきの板でしかないわけだし、鍵もかけてしまえば誰かがいることも知られなかったはずだった。なぜ自分がどうしたのかはわからなかった。警戒心がなかったわけでもなかったのだが。

大臣は私の姿を確認すると、また丁寧に頭を下げた。ここでカネル師がいたら飛んできてどうにかなったかもしれないが、間は悪く、もう出かけたあとのようだった。残念ながら神出鬼没の先生は危険察知能力に乏しかったようである。

とりあえず、応接間に案内した。状況に合わせて来客の対応などできない私はライアに倣ってまた茶を出そうとしたが、それは断られた。供は外に待たせておいて、部屋のなかに私と大臣の二人きりだった。

「顔色が悪いようですが、その後はいかがですか？」

私は、精一杯の言葉で返した。

「ええ、まだ少し疲れが残っておりますが、だいぶよくなりました」

大臣はそんな私の目をじっと眺めてきたので、ふるまいに困った。ばれて困る嘘ではなかったが、どうも冷や冷やしてならなかった。このとき気づいたのが、大臣が私をしげしげと眺めるから嫌な気配を感じているのだということだった。実はコリンもそういう癖があったのだが、親子の遺伝だろうか。しかし、コリンに対しては何の不快な感情もなく、不思議だった。

「そうですか。あのあと、車でお送りすることを失念していましたな、大変失礼いたしました」

身分から言っても、私のような者が乗れる車など限られているから、別によかった。しかも、そのときは大臣やレナードたちと一緒に酒も飲んでいたし、そこまで心配されるようなこともなかった。ここまで来て、私とカネル師がその後酒を酌み交わしたことを大臣が知らないことに行きあたった。しかし、今さら言うのも体裁が悪かったので黙っていることにした。

「いいえ、とんでもない。あんなたいそうなところをお訪ねして緊張しただけです。私のような者が入る機会などめったにございませんから」

「何を仰いますか」

大臣は口の両端を上げる。そんな印象を抱いたのは、口だけで笑っているからだ。目の奥には何か重要な思案を巡らせていて、私との雑談はそれに没頭しないための手段のように思えた。

「本日はどのようなご用件でしょうか。あいにく、師は外出しておりますて、ご子息も工房の用事で町に下りていますが」

「ああ、さようですか。では、次室殿に頼みたい」

私の言葉に間髪入れず、大臣は言った。

「今から、イザヴェルにおいでいただけませんか」

イザヴェルというのは、軍やその関係者が言う、エアトンの砦の正式名称だ。我々一般人はただの砦で意味が通じるが、中枢の人間にとっては複数ある砦の一つだからそう呼んだ。

私は戸惑った。助けを出してくれる人間なんて誰もいない状況で、不得意な人間と向き合わなければならず、しかも思ってもない申し出という状況に適切な対応をする能力は持っていなかった。

「どのようなご用件でそのようなことを仰るのか、お尋ねしても？」

「誰もいないということですが、ここでは憚られます。それに、実際にご覧になるほうがよいかと思えます」

何を見るだと？ 私が問うよりも先に、大臣は畳みかけるようにして続けた。

「次室殿にどうしてもしていただきたいことがあるのです」

「いえ、私は……」

「ローハイン師に深く関わる、重要なことです」

言葉が詰まった。カネル師のことなら、師に直接相談すればいい。それなのに、なぜこの人はここまで必死に私を誘い出そうとするのか、理解できなかった。けれども、私はその内容が気になり、つい尋ねてしまった。

「どういうことですか？」

「知りたいのであれば、ぜひお越しください」

そこで流せなかった自分は馬鹿だと思う。しかし、師のこととなると簡単にかわせはしなかった。結局、彼に気圧され、私は頷いてしまった。たいして面識もなかったくせに、その方法を大臣は心得ていたようだった。そこまで言うなら用件をもう少し知って、それから考えよう。そんな浅い考えで、私は彼とともに、あれだけ不愉快だった砦へと向かったのである。

大臣というだけで、砦での扱いは格段に変化した。すぐに建物の中へ入れたし、すれ違う者が皆、レイフォード氏だけでなく私にも頭を下げるのだ。次室といっても工房内でもあまり偉い立場にはいなかったのだよ、私は。だからそういった扱いには不慣れでね、戸惑ったものさ。別に私が偉いわけじゃなかったのだがね。

彼が迷わず私を通したのは、あの廊下の交わる地点だ。そして、その前は私が行かなかった突き当たりへと歩いていった。扉の前に衛兵が二人いて我々に礼をし、中に入るとまた兵が二人いた。その奥には地下への階段がひたすら伸びており、まるで地獄まで続いているように思えた。

階段は幅が思ったよりも広いのだが、灯りもほとんどなく、レイフォード氏が手に持つ小さな灯りだけを頼りに二人で進まなければならなかった。どこまでも深く暗い階段を、この人と二人きりで下りなくてはならない恐怖があったが、それでも私は足を止めることができなかった。それは彼の言うことが気になったこともあり、私自身の怖いもの見たさに似た好奇心がうずいたのかもしれない。

一段降りるたびに寒気がした。それは、あの晩、次室で感じたものと同じものだった。そこに来てわかったのが、その正体が嫌な魔力の気配であることだ。けれども不思議に思ったのは、カネル師である。こんな力、カネル師ほどの人だったら気づかないはずなのに、師は私の看病以外はただ他愛のない話をしただけだった。気づかなかったのか、それとも気づいていないふりをしたのか。なぜ、と私が一人ごちると、先を歩いていた大臣が振り向いた。

「恐れ入りますが、もう少々お付き合いください。少し明るくいたします」

大臣は手に持っていた灯りを一度こちらに向け、火を強くした。その瞬間、初めて壁の異様さを認識した。ひたすら墨で模様が書かれていた。私もよく知っていた封印の文様だった。確かにこれだけやれば効果はあるが、それでも本来は小さなものに用いるものであるはずのその文様がこの壁にある事実には驚いた。異常なほど執拗に、全面にわたって書かれていることにも。それは、まるで呪いのようだった。

階段を下りる時間は、非常に長く感じた。レイフォード氏は全くしゃべらないし、壁の模様も何か悲惨なことが起きたときの痕跡のようで不気味だった。足は重かったが、ここまで来て引き返すわけにはいかず、私は自分を責めながら大臣の後を追いかけた。

ようやく終着点までたどり着いたときには、すっかり汗をかいていた。体調が思わしくないなかそこまでやってくるとは、自分はいったい何に動かされているのだろう。水分不足の頭で考えても、わかる答えではなかった。

やがて我々は、重厚な扉の前にたどりついた。そこにもびっしりと、上から続く壁の文様が書かれていて、不気味とさえ思った。また、扉の表面には蔓の文様が刻まれており、私たちが作っ

た勲章を思い起こさせるものだった。

レイフォード氏は嚴重に鎖が巻かれたところに取りつけられた鍵を開け、扉を押した。冷気のようなものが漂っていて、身がいつそう震えた。促されて中に入ると、灯りがやけに眩しく思えた。

室内の壁には、模様がより多く書きこまれていた。それはまるで茨か何かのようだった。奥半分が鉄格子で仕切られていて、隅の寝台には、鎖で体のあちこちを縛められた誰かが伏していた。老人と最初は思ったが、すぐにそれがくすんだ銀髪であることに気づいた。

「……ラーディラス？」

「さようでございます。少し事情がありまして、ここで匿っております」

そこに至るまでの道のりを見るに、匿っているとは到底思えなかった。あれはむしろ、「閉じこめている」というのである。そこに来てわかったのは、最初に依頼された魔法使いはあまり優秀な者ではないということだ。おそらく、宮廷や都の魔法使いにやらせたのだろう。あまりにお粗末すぎて、封印の意味があまりなかった。

レイフォード氏を見ると、そんな私の思考に気づいたのかにっこりと笑った。そのときはなぜか、普通の笑みだった。

「次室殿へのご用件はこれからお話いたしますので、まずは彼についてご紹介させてください」

エヴァム、と彼は男に呼びかけた。男は薄く眼を開き、うつろな視線をこちらに向けると、眩しそうに腕で顔を覆った。そこには、他よりも鎖を何重にも巻かれた、きらめく腕輪があった。その刹那、私の体は雷に打たれたかのようになった。

まあ、待て、落ちつけ。ああ、そうだ。私は、初めて見たときからそれに惹かれた。多少離れていても鎖の隙間からはっきりと見える、中央に収められた真っ赤な宝石に心を奪われてしまった。千年生きた今でさえ、どんな夕日も花も血も、この宝石よりも美しいものは見たことがない。そのまま地獄の川に引きずりこまれて溺れてしまいそうなほど、私を魅了した。私はただ黙って息をのんで、呆然と赤い石を眺めた。いつまでもそうしていたいと思った。

エヴァムと呼ばれた男は、ぼんやりした表情から、急ににやついた顔つきになった。

「ふうん、結構なのを持って来たじゃないか。それが命の値段ってわけだ」

彼が口を開いた瞬間、今までにないくらいの魔力が私を圧迫した。吐きそうで吐けないような苦しい状態であった。目に見えない闇が、彼を包んでいると感じられた。

レイフォード氏は小さく悪態をついた。おそらく、息子にも見せない姿だろう。眉間に深く皺を寄せ、エヴァムを睨みつけていた。そんな彼を、起き上がったエヴァムは面白そうに眺めるのであった。

「本当のことだろうか？」

「エヴァム！」

部屋全体を震わせるような声で、大臣は怒鳴った。すると、先ほどと同様エヴァムはおとなしくなり、力なく笑った。その瞬間、威圧的で邪悪な魔力の気配も緩んだ。

「次室殿、お加減はいかがですか」

「何とか……」

もう畏まってはいられず、嫌々顔を上げると、エヴァムと目が合った。

「エヴァム、彼はローハイン師の現在の一番弟子にあたる者で、守護魔法に長けている」
ほんのわずかな舌打ちがあった。エヴァムは唇をかみしめる。

「カネルのなんて、どうしてそんなやつ連れてくる」

「悪いが、他に知らぬ。彼と相談してくれ」

エヴァムは複雑そうに私と大臣を交互に見て、溜め息をついた。それを了承と受け取ったであろう大臣は、そこでようやく私とまともに向き合ってくれた。

「あの勲章の出来を見込んで、次室殿に頼みがございます。どうか、この者をここへ封じる手だてを考えていただけませんかでしょうか」

何を言われたのか一瞬わからなかった。私はただ、あの赤い宝石を見つめていた。その視線に気づいたエヴァムはそれを隠してしまったが。

とにかく状況を確認したかったのだが、自分一人では限界があった。何をたくらんでいるのかわからない大臣、師を知っているらしいラーディラスの男、そして美しい腕輪は奇妙な取り合わせだった。

「もう少し、事情をお聞かせ願いませんか？」

「.....どこから話したらいいのか、見当もつきません」

レイフォード氏は悲しそうに笑った。その表情は、とても人間味のあるもので、微かにコリンの面影があった。

「とある縁で、私は彼の処置を任されました。この男は、ローハイン師との深い因果がございます。しかし、あるときはローハイン師を連れて来いと騒ぎ、あるときは師に自分の存在を知らせるな、と私に訴えるのです。そして、とりあえずは後者のまま、現状維持している状態です」

「しかし、これだけの魔力、師にはすぐに気づかれてしまうでしょうに」

「ラーディラスはお互いを感じるができない」

エヴァムはそう呟くと、腕輪に巻いた鎖を引いてさらにきつく縛り、糸が切れたように横になった。奇妙な光景に戸惑ってレイフォード氏を見たが、彼は静かに首を横に振るだけだった。

「そういうわけで、ローハイン師が知ることはないでしょうが、いつまでそれが続くでしょうか。そこで、彼の要望の一つとして、自分を永遠に閉じこめる牢屋を設けました。しかし、我々では少々荷が重すぎました。宮廷魔法使いを呼び寄せて作業にあたらせましたが、彼らも高度な封印技術は持ち合わせてはいなかった。この国は、カネル師のおかげで魔法が盛んだと思われていますが、実のところ不毛地帯ですからね」

これに関して、アールヴの魔法使いの名誉にかけて言うが、彼の思い違いだ。アールヴ宮廷や貴族に仕えていた工房士に問題があったのだ。彼らは他のアールヴ魔法使いとは違い、頑張らなくても高い報酬で生活していける、向上心もないやつらだった。

言うておおくが、そういうやつらは宮廷だろうが在野だろうがどこに行っても駄目だ。よその国の宮廷魔法使いで有能なものもいたし、在野の工房士でもまったく能力に恵まれない者もあった。また、魔法が発達した地域に下手な者がいたかと思うと、未開の地に飛びぬけて稀な才能を持つ者もいた。ひとくくりに、どこの魔法使いが、という言い方は間違っている。

私は嫌そうな顔をしてやったが、レイフォード氏は気にしていない様子だった。

「となると、マティアスを頼るべきですが、かの国と妙な縁は作りたくないのです。秘密をもらさない、国内の人間かそれに近い人間のほうが、私にとっては都合がいい」

「それで、私ですか」

にんまりと彼は頷いた。結局肝心な部分は聞けなかったが、自分の連れてこられた理由を聞いただけ、当時の私には十分だった。いや、本当はもっと突っ込むべきだったが、最初から話す気が見られない人間から聞き出すのは難しいものだよ。

「エヴァムに出会う前から、コリンから工房のことはよく聞いておりました。ローハイン師のことも、ライアさんのことも、あなたのことも。あの子には悪いが、利用できるものは何でも利用させてもらう」

「なぜ……」

私は乾いた声で言った。喉がひりついていて、うまく声が出せなかった。その部屋に入ってから、悪かった体調がさらにひどくなり、頭痛が治まらなかった。

「なぜ、あなたはそれを話す。私を利用したいなら、あなたなら、もっとうまく私を言葉巧みに動かすことができるのではないか」

「意味のないことをするつもりはございません。どうです、力を貸しては頂けませんか。あなたなら、この重大さをご理解下さると信じております」

その場で決められるほど、私は上手な生き方ができなかった。信用できない相手からの頼みなど、その場で切り捨てられてしまえばよかったのに、私はできなかった。ただひたすら立ち尽くすばかりで、考えても何も結論が出せないまま時だけが過ぎていくようだった。

ふと、エヴァムの視線を感じたような気がした。しかし、そちらに目をやると、エヴァムはやはり腕で顔を覆ったまま横になっていた。その宝石を、私にちらつかせるように。

吸い込まれてしまいそうな赤。どこまでも深い赤。全てを打ち消すような赤。私は、ただそれだけしか見えなかった。そして、自分でも思いがけずに言葉が出たのである。

「申し訳ございません。考える時間を頂戴したいと思います」

どうして拒まなかったのか、あとで悔やんだ。しかし、時はすでに遅く、私はただ自分を責めるばかりだった。自分だけならよかったのだが、多くの犠牲を払ってしまったからな。

「ええ、いいでしょう。コリンの話通りの方なら、きっとそう仰ると予想しておりました。しかし、時間はない。いつ、こやつが考えを変えて我々を脅かすのかはわからないのです。明日、またおいで下さい」

もしも翌日行ったら、そのときは手助けをすると契約を交わすのと同じことだった。私はそれには答えられず、その場しのぎの守護魔法を補強してその場を去った。

カネル師やコリンたちに砦へ来たことを知られなくなかったので、帰りの馬車を断り、そのまま歩いて帰ることにした。人混みなど数年ぶりの経験だったのに、私の頭はあの地下牢と宝石のことでいっぱい、何の感慨も感傷も、考えることすらなく、ふらふらと工房への道を歩いた。

「兄さん、どこへ行っていたんですか！」

工房に帰ると、ライアとコリンが顔を真っ赤にして次室にいた。

「帰ってきたら先生も兄さんもいないから、心配しました」

「悪い。先生は外出で、俺は……」

不満そうに口をとがらせるコリンの頭を軽く叩くと、別れ際の大臣との会話が浮かんだ。

「この件は、工房へどうぞご内密に。ご理解いただけるとは思いますが」

「よいのですか？ 師に打ち明けるかもしれませんよ」

「それはない、と私は確信しております」

レイフォード氏は私を見据えて微笑んだ。

くそ、どいつもこいつも秘密なり何なり抱えて、と思ったのに、気づいたら自分が一番いろいろな秘密を抱え込んでしまっていた。自分に腹が立って仕方がなかったが、断ることも話すこともしなかった私の責任ではあった。

私は結局、その日、カネル師にもコリンにも何も話さなかったのだ。好奇心もあったが、どんな形であれ、自分が認められて必要とされることが嬉しかったというのがある。砦を初めて訪れたあの晩、私は自分が小さくて情けなくてたまらなかった。せめて誰かの役に立ってから死にたいとさえ思った。その機会がその瞬間に巡ってきたように感じられたのだ。

そして、もうひとつ、単純だが何よりも大きな理由に、あの宝石にまた会いたいと願ってしまったということがある。拒めば永久にあの輝きに再会することはできないだろう。もっと近くで見つめたい、手に取って触れたい。まるで恋でもしたかのように、私はあの石に心を占められてしまったのだ。いや、あの感情はもう、恋い焦がれていたと言ってもよいだろう。

「兄さん？」

「どうしたんですか。具合でも？」

「いや、ちょっと疲れただけだ。俺も個人的な用事ができて外へ行かざるを得なくてね。けれど、やっぱり工房が一番だ」

二人は、安堵と呆れが混じったような表情で私を見た。

「悪いが、少しここで寝る。ライア、先ほどの続きを。コリン、温室を頼む。どっちか終わったら起こしてくれ」

私は返事も聞かずに、長椅子に横たわった。興奮して寝られないと思ったが、エヴァムに出会って以来、体が重くて仕方がなく、意外なほど深い眠りへ落ちていった。意識の浅瀬で、ライアとコリンが怪訝そうな声色で会話していたのがわかった。

その日、カネル師は帰ってこなかった。私は正直、ほっとした。もしも会ってしまったら、隠し事をできる自信がなかったから。もしも帰っていたら？ そうだなあ、きっと私はここにいなかったろうな。

そして翌朝、私は赤い夢をみた。あの深い赤色が海となって、私の眼前に広がった。潮騒が耳をくすぐり、私を水平線の彼方へと誘うように囁いた。

足を波が撫でるものだからつい触れてみたくなり、かがんで指を伸ばした。しかし、波は引いてしまい、届かない。私は何度も波を捕まえようとするのだが、どういうわけかその手前で波は

引いてしまう。たまたま波の先端を追いかけたが、今度は足すらも届かない。

もどかしさはあったものの、諦めた私は背を向けた。その瞬間、視界は暗くなった。振り向くと、赤い津波が私を飲み込もうとしたのである。

「逃げられない」

誰かがそう言っているような気がした。

そこで私は目を覚ました。次室ではなく、宿舎の自室であった。頬が濡れているので触ると、私は泣いていた。何やらこみあげてくるものがあった、しばらくそのまま出るままに任せた。恐怖はなく、むしろ愛おしい感情が私の中にあっただ。それが、私の運命を決定づけた。

窓の外は、ガラスさえも突き破ってきそうな陽気で満ちていた。ああ、今年も祭りが始まるのだ。私はぼんやりそう思いながら、身支度をした。例年のような憂鬱な気分はなかった。

「兄さん、やっぱり行けないんですね」

いろいろ言いたいことはあったが、とりあえずそれだけは口にしたいというような様子で、ライアは言った。コリンも同感なのが顔に書いてあった。本当にわかりやすい子たちなのだから、つい笑ってしまいそうになった。そういう状況ではなかったのだが。

「二人で楽しんできてくれ」

ライアとコリンは、二人同時にお互いを見つめ合って、何とも言えない表情を浮かべた。しかし、すぐに笑って頷いてくれた。私に土産を買ってくると言いながら、二人は仲良く並んで丘を下っていった。私は手を振りながら、カネル師が帰ってこないことを祈るばかりだった。

コリンとライアから遅れること数刻ほどで、私も出発した。丘の下には、そろそろ見慣れてきた車があった。私はそこに座っている人物を見上げた。

「閣下、乗せてくださいますか」

「ご協力いただき、嬉しい限りです」

大臣は、優しそうな顔をして迎え入れてくれた。このとき、我々は契約を結んだことになる。とても短く、悲惨な契約を。

その日のエアトンは活気に充ち溢れていた。特に、街中を縦横無尽に走る六本の大通の賑わいが目立っていた。ライアは町の楽団に交じって何かをするという話だったから、まさにあの中に入っていたのだろう。お坊ちゃん育ちのコリンには少々きついかもしれない。

我々は、比較的人通りの少ない道を通った。エアトンには高級宿街もあり、貴族たちは彼らなりの楽しみ方で満喫するために祭りへやってくる。その地域を通れば表よりは目立たずにすんだ。

砦に到着し、私たちはまたあの階段を下りた。大臣の灯りだけを頼りに進むのだ。私も火をつける術なら身につけていたが、エヴァムという存在をまだよく理解していなかったため、魔法を使うことはあえて避けた。二人の足音は、思いのほか響き、地獄までの道のりを演出しているかのようだった。

「できれば、今後も彼の監視役もしていただきたいのです。私一人では荷が重すぎます。ラーディラスは長命だ。後継者も探さなければなりません。あなたも私も」

静かな口調で語りながら、大臣は先に下っていった。そして、少し間をおいて、こちらを振り

向かずに言った。

「昨日は自信たっぷりに申しましたが、実は、あなたが来るかは五分五分だと思っておりまして」

影に溶けこみそうな後姿を見ながら、私は口を開いた。口内が渴いていた。

「意外ですね、閣下なら私のことなど全てお見通しであると思っておりまして」

「だいたいが推測ですよ。あなたのことなど、コリンの手紙からの推測で成り立っているようなものです」

いちいち意味深なことを言う人だった。そのころになると、私は彼に何か深く尋ねることを諦めてしまっていた。どうせはぐらかされるのはわかりきったことだったのだから。

「では、よほど人間観察に優れているのでしょうか」

「そう見えますか」

振り向いた大臣の目はどこか冷たく、また嫌な予感がうずまいた。しかし、なんとなくこの人は私自身もわからない私が見えるのではないかという気分させられた。もしかしたら、それが妙な気分を引き起こさせたのかもしれない。私は長い間、誰かと接触するのを避けていたから。それだけでは納得できない部分もあったが、それは単に私の勘のようなものだったのだろう。近づいてはいけない、と。

けれども、愚かな私は、赤い宝石ともう一度会いたいがために彼と接触したようなものである。また、今さらになって誰かのために何かできると些細な喜びを感じることも理由の一つだった。それらの思いは、カネル師たちを裏切っているという罪悪感に勝った。自己嫌悪に浸りながら、私は石のもとへとむかった。

扉は、私が嚴重に封印したままだったが、材料や道具が足りなかったためにまだまだ不十分であった。幾重にも施した鍵をひとつ開けるごとに、私の胸に高揚感があった。そして、扉を開けた瞬間、逸る気持を必死で押さえている自分が馬鹿らしくて、私は笑ってしまった。

エヴァムは相変わらず、力なく伏していた。彼の姿をとらえると、私はすぐに腕輪を探した。前日と同じように、彼の腕ごと鎖で縛められていた。これもたいした準備なしでは効果はなく、その日改めて施術する予定であった。鎖に文様を刻みこむという作業で、ライアがいれば楽だったが、あの子にこんなことを依頼できるはずもなかった。

新しい鎖を用意してもらい、金属に処置を施したあとに削る作業に入り、すべて用意してからエヴァムにつけているものと交換することになった。まだ若干、前の者が行った封印魔法に余裕が残っていたからだった。ただし、私も鉄格子の中に入り、何かあったときにすぐに対応できるようにしなければならなかった。

それまでエヴァムにかけられていた鎖は、処置としては正しかったものの、削りが粗末すぎた。こういうものは鍛錬だ。私もライアに教えるまでは人並みだったので、あまり他人を責められたものではないが。あのライアに教えるのに、私が下手だとどうしようもなかったのだよ。あの子は、見本のわずかな失敗もをそっくりそのまま複写してしまうような子だったからな。

ああ、こういう作業は他の場所でもできる。しかし、それをレイフォード氏は許さなかった。私は、最初から最後まで過程をすべて、その地下牢内で行わなければならなかった。緊張し

たが、日頃努力はしておくもので、何とかある程度の水準を保つことができた。ライアに感謝しながら、私は手を進めた。

三本目の鎖を削り終わったとき、それまで口を一度もきかなかったエヴァムが、初めて言葉を発した。

「カネルは今どうしている」

突然のことだったので、私は驚いた。くすんだ銀髪の間から、鋭い金色の瞳がしっかりと私を捉えていた。

「……お元気ですよ。弟子たちをからかったりして過ごされています」

「あいつが弟子ねえ。大丈夫なのか？」

ふと笑った彼の声の調子と表情がいきなり変わり、私は巻きつけている途中だった鎖を落としてしまった。幸い彫刻が損なわれることはなかったが、その瞬間、強烈な悪意のような魔力が噴出したのである。私は体が締めつけられるような感覚を抱いた。

「エヴァム、気を緩めるな」

前日と同じように、恫喝するような厳しい声が飛んだ。鉄格子ごしに、大臣がきつい眼差しでこちらを見つめていた。私の方が竦みあがるほどだった。そしてエヴァムを見ると、また無表情の彼の姿に戻っており、私を押さえつけるような魔力も消えた。そして彼は、すまない、と小さく私に謝った。

その作業をどれくらい行ったところだろうか、階段を少し慌てて下りる音がした。そして、扉が鳴った。

「閣下。陛下がお呼びです」

「今はここから動けない。あとで参ると伝えてくれ」

「それが……」

そこから先は、こちらまでよく聞こえなかった。扉ごしに会話をしていた大臣は、仕方なしとばかりに少し扉を開け、何やら話していた。そして、苦々しい表情でこちらに近寄って来た。

「申し訳ないが、しばらく席を外さなければなりません」

「かしこまりました。この調子でいけば、さほど時間はかかりません。どうぞお行きください」

「……お気をつけください。やつは、隙あらばあなたを殺すことだって容易い。会話は控えたほうがよろしいでしょう」

私はゆっくりと頷き、レイフォード氏は不本意そうにその場をあとにした。背中で、彼が階段を上がる音を聞きながら、私は冷静に作業を行うことに努めた。

本当は、エヴァムに聞きたいことがたくさんあった。カネル師との関係やラーディラスのこと、腕輪はいったいどういうもので何のために存在しており、どうして彼の手にあるのか。しかし、尋ねる勇気はなかった。またあの強い魔力につぶされそうになるのが恐ろしかった。

そうして、大臣が帰ってくる前に全ての鎖の彫刻が終わった。繊細で壊れやすいように見えるが、半永久的に縛めの効果を果たすものだった。私は一本ずつ交換することにした。まさか、前の鎖を全部取ってからつけるわけにはいかないからな。ただ、複雑に絡まっているので、少し苦労した。けれども、こういうものにはきちんとした巻き方があり、正しくやれば一本ずつの交

換も可能なのだ。下手すると少し腕の肉が削られることもあるけれども。

エヴァムは何の感情もない目で、私の手の先を見つめていた。私は彼の腕を持ち上げ、一本目の鎖に触れた。腕輪の封印が最優先だと、大臣に言われていた。鎖がずれた瞬間、宝石がいつそう輝きを増すように、隠れていた部分を覗かせた。思わず私は息をのんだ。

「気になるかい」

空気が重くなった。顔を上げると、またあの表情と口調のエヴァムがいた。私は、目をそらした。

「いや」

「そういうふるまいをするものではないよ。それでは肯定と同じだ」

私は首を横に振った。そのとき、弾みで手が腕輪に触れた。温かい。私はびくりと腕輪を凝視した。美しさは変わらなかったが、ほのかに光を放っていた。それは、その日の朝に見た夢の、赤い海の色にととてもよく似ていた。腕輪の本体はというと、今まで見たことのないくらい高度な封印魔法が細工として施されており、ところどころに封じるために巻いてあっただろう布の切れ端が引っ掛かっていた。ずいぶん古い形式の魔法だった。

「お前の心も狂わせてやろうか」

いつかのように、視界が揺れる。鎖が高い音を奏でた。私の手は震えていた。こんなやつ言葉に耳を貸してはいけない。私は必死に自分を律しようとしていた。しかし、あの魅力的な赤が私の視界に入り、私の心を揺さぶるのだった。

「お前はいい力を持っているね。あいにく、僕にはそんなものはなくてね……欲しいな」

その声の鈍さに動揺して、私の手から鎖が外れた。慌てて拾おうとしたが、エヴァムに蹴られて鉄格子の向こうへとやられた。

「なかなかだね。そうか、こういう状況に使えるのか。思わぬ拾い物だ」

まるで少年のような声の調子で、エヴァムは立ち上がった。そして、緩んだ鎖から見える宝石を見せびらかすように、私に手を差し出した。ひどい頭痛がした。まるで砂嵐のなかにいるかのように、私の目の前の光景が乱れた。

「さあ、僕の呪いを解いてくれ。僕は、こんな小賢しい細工で縛られるような存在ではないんだ」

石はなお、妖しく光った。私の手は、自分の意志とは関係なく上がった。下ろそうとしても、私ではない私がそれを許さなかった。まるで劇場を観覧しているように、私は自分の腕が鎖の一本一本を外すのを黙って見ていることしかできなかった。

そして、全ての鎖が外れた。直後、目が焼けるような強い光が空間全体を包み、私の背に猛烈な痛みが走った。視界は暗くなり、その向こうでエヴァムの笑い声が遠ざかるのが聞こえた。

胸がつぶれたかと思った。苦しくて何度も咳きこむが、あるのは更なる痛みだけだった。砂ぼこりにむせて咳をすると、よりいっそうそれは深まるのだった。

頭上が騒がしかった。ぼんやりとした頭で、エヴァムが上へ向かったことを思い出したが、なかなか立ち上がることができなかった。

逃がした、解き放ってしまった、何てことをしてしまったのだろう。私は、自分が何を犯してしまったのか考えるのが恐ろしかった。いや、そのときはまだ、事の重大さを目の当たりにしていなかった。けれども、あの瞬間にもう、自分の罪が私の心に入り込んできて、ざわめいて仕方がなかった。自分が何を犯したのか、その時点で予感があったと言ってもよい。

今度は階段を盛大に駆け降りる音がした。エヴァムが帰ってくるわけではないことは、聞きながら理解していた。強い力で扉を開けたのは、レイフォード氏だった。

「何があった！」

彼は倒れている私を見て、一瞬驚いていた。口を開こうにも、鉄の味が口いっぱいにあっとうまく喋れなかった。大臣は私を乱暴に起こしながら、もう一度尋ねた。

「何があった？ 答えてくれ」

答えたかったが、うまく言葉にできなかった。ただうめき声が漏れるだけで、口から顎にかけて滴が伝わる感触が気持ち悪かった。力が入らず首が傾いた。そこで、私は初めて自分が血だらけになっていることを理解した。煉瓦の粉と混じり合って、ひどく醜い赤だった。そうすると、あの美しい宝石を思い出したのである。私はよろよろと立ちあがった。

「ま……お待ちください。その身体でどこへ行こうというのです」

「エヴァムのもとへ……。申し訳ございません、私の責任」

嗜血しながら答えると、よろけた身体を大臣が支えてくれた。

「あれの？ 死にたいのですか」

「いいのです」

あの赤にもう一度会えるのなら、生きたまま裂かれようと焼かれようと構わない。私はそんな心持で、階上を一段一段上っていった。悲鳴はだんだんと大きくなり、意識は少しずつ私を現実から遠ざけた。本当に、どこにそんな力が残っていたのだろうか。全身の骨が砕け散ったような痛みを引きずりながら、私は地上へ出た。

軍人たちの靴の音が会場から聞こえてきた。地下への階段を隠すように設けられた、廊下と接する扉は見事に破壊されていた。そして、窓にも大きな穴が空いていて、その向こうに植えてあった草木は燃やしつくされていた。もう、これ以上ないと言わんばかりの荒れようだった。

誰かが私を呼び、振り返るとレナードが血相を変えて駆け寄ってきた。

「その怪我は、まさかあの奇妙な髪の男ですか？ 魔法使いが砦や町を破壊してまわっているっ

て大騒ぎで」

私はなんとか頷いてみせた。

「ああ……馬を借りられないだろうか」

レナードは、コリンやライアによく似た驚愕の表情を作ってみせた。

「は、正気ですか？ その身体で馬に乗らないですよ？ 医療士のもとへご案内します。さあ、僕に捕まって」

「いや、いい。乗る手立てはある」

私はちょうど近くにいた馬に手をかざしてかがませ、無理やりその背に乗った。そして、手綱と鞍に血と爪で文様を描き、私はレナードを振り切って進んだ。

揺られるたび、激痛が走った。特に胸のあたりが痛かったので、肋骨が折れていたのかもしれない。鎧にかけた足にも力は入らず、下手をすると振り落とされそうだったが、必死に食らいついた。血の文様でかけた魔法のおかげで、手綱や鞍から離されることはなかった。知識とは財産だな。たとえ朦朧としても、身体と心のどちらかが覚えていれば何とかなるものだ。

きっと、レナードは呆然としていただろう。しかし、構う余裕はなかった。あれを探さねばならなかったのだから。

街は想像以上に混乱していた。ばらまかれた魔力は、腐敗臭が鼻に入ったかのような吐き気を私に与えた。屋根が吹き飛んだ家に、えぐられた石畳、恐怖で逃げまとう者に、何が起きたのか理解できずに立ち尽くす者。

たった短時間のうちに、町は一変していた。美しく賑やかなエアトンは消えてしまった。それらがエヴァムの手によるものだと思うと、私は重い罪の意識に押しつぶされそうになった。

取り返しのつかないことをしてしまった。外を出たら世界を傷つける、まさにずっと思っていたことが現実となったのだ。そのまま落馬してしまいそうなほど、がたがたと震えが止まらなかった。頭の芯が強く締めつけられ、胸に大きな槍が刺さったような気分だった。

せめて、自分で始末をつけなければ。エヴァムはどこだ。目に入った血を拭いながら、私は魔力の濃い場所を目指した。魔力は目に見えなくても感じることはできるのだ。そしてそれは、私が唯一慣れ親しんだ丘へと続いていた。

私は焦る気持ちを抑えられず、馬をつぶす勢いで急いだ。丘を上る道の途中で、うずくまる人影を見つけた。ライアだった。一度馬を止めて声をかけると、ライアはこちらを振り向き、慄いた。その腕の中には、私と同じくらい血まみれのコリンがいた。私は目を見開いて、二人を凝視した。

「兄さん、その怪我……」

「何があった？」

ライアは涙をこぼして、嗚咽をもらすばかりだった。私はもう一度、強い声の調子で尋ねた。苛立った口調に、ライアは本気で怯えたような様子だった。かたかたとしばらく震え、それが少し治まってようやく、消えそうな声が返ってきた。

「いきなり男の人が来て、私、何が起こったのか全然わからなかった。急に光って。コリンは私をかばったんです。そうしたら……」

二人の周りには、祭りで買って来たのであろう様々なものが散乱していた。もしも何事もなければ、きっと楽しい話が聞けただろう。

「兄さん」

虫の羽音のような小さな声で、コリンは私を呼んだ。その声の痛々しさに胸が痛んで仕方がなく、泣きそうな気分になった。

「その傷、あの人……。父のせいですか？」

「……すまない。閣下ではなく俺のせいなんだ」

「父に会ったんですね……」

彼の眼は虚ろだった。私は、罪滅ぼしにもならなかったが、馬をやっとのことで降りて彼の傷口に手を当てて応急処置の治癒魔法を使った。しかし、もう可能性がだいぶ失われていることをひしひしと感じた。傷が多すぎて、どこから治せばいいのかわからなかった。とにかく、目立つ箇所だけをふさぐので精一杯だった。私も傷の程度でいったら、少しましな状態だけだったから、残された魔力はそれほどなかった。自分の無力さがどうしようもなく私を苛んだ。

「あれに近寄ってはいけません、兄さん、砦へ一緒に、レナードに」

「もう、しゃべるな。ライア、コリンを連れて行ってくれ」

「兄さんは？ 兄さんだってひどい怪我じゃない！」

そのころになると、完全に痛みは麻痺していた。ただひとつ、胸だけは相変わらず、つぶれるような痛みが残っていたくらいだろうか。魔法を使ったことで、思ったよりも意識が覚醒した気になっていた。それは、あの宝石のもとへとたどり着くための、最後の力だったかもしれない。

丘の向こうでエヴァムの笑い声がした。私は二人に謝り、馬を置いて駆け出そうとしたが、ライアに引き止められた。

「……行かせられないわ」

「そんなことを言う暇があったら、コリンを連れて砦に行け。……こいつを死なせないでくれ」

ライアはびくりと目を見開いた。おそらく、彼女にとって一番傷つける言葉を選択してしまったのだろうが、その時の私にそんなことを考える余裕はなかった。

「俺も後で行くから」

私はそのまま丘へと向かった。ライアが追いかけてくることはなかった。

エヴァムに近づけば近づくほど、まるで体力や傷が回復するように力が増した。吐き気がするほどの魔力もその分増しているのに。丘を上りきると、夕日を背にしたエヴァムと対峙しているカネル師の姿があった。

「お客様だね、カネル」

エヴァムの言葉に振り向いたカネル師は、私の姿に目を見開いた。そうだな、いきなり弟子が血だらけで現れたら、驚くよな。残念ながら、まったく笑いごとにはならなかったのだが。

「来るんじゃない！」

「残念ながら、彼が僕を解き放ってくれた。ああ、いいね。血はどこまでも人を狂わせる力がある」

エヴァムは、邪悪さと無邪気さを併せ持ったような笑顔を浮かべた。カネル師は、私に何か言

おうと口を開いて、結局黙ってしまった。

「あの男は想像以上に働いてくれた。忠義に厚いというのはいいことだ。時に、非常に残酷になれる」

「いつから、どこまでお前が関わった？」

師は、いつもとは程遠い、恐ろしいほど低い声を出してエヴァムを睨んだ。エヴァムは、楽しいことこのうえないというように笑うだけだった。

「とっても幸運だったんだ。全てが僕に味方している。ただ復讐をしたって言ったら、彼は喜んで手伝ってくれたよ。さすがは」

「そんなことを聞きたいんじゃない！」

「まあまあ、いいじゃないか。君が大切にしているそこの彼も同罪だ。何の因果かねえ。僕に惹かれたというのも、巡り合わせとしか思えないよ。まるで、まだ主神が生きているようだ」

師は、自分を恥じて項垂れている私に近寄った。掴まれた肩の感触を、私は今でもまだ覚えている。傷口に食い込んだ痛みは、私の罪と比べたらとてつもなく軽い罰だった。カネル師は、そのまま何も言わなかった。

「二人まとめてやってしまいたいところだが、この身体は意外と不便だね。お前を殺すことはできない。いや、出来るかな。なんていったって、お前はできそこないのラーディラスだから」

カネル師は血が頭に上ったような様子で、エヴァムに向かって腕を振った。すると、刃のような風が何千もの束になり、一気にエヴァムに襲いかかったのだ。煙が舞い、エヴァムの姿は一瞬かき消されたが、その刹那、逆に風が吹いて礫が我々に向かって飛んできた。

粉塵が落ち着くと、ただ土埃を少しかぶっただけのエヴァムが微笑んでいた。

「腐ってもラーディラスか。よかったじゃないか、証明されて。身の置き場が決まったんじゃないか？」

「何を」

「でも、残念だよ、カネル。お前が今の僕を殺せないように、今の僕は君を殺せない。では」

エヴァムが視線をこちらにやると、背筋がぞくりとした。湿った衣服が急に冷えたようだった。殺される――直感でそう思ったが動けなかった。さっきまで怪我などなかったようにふるまえた足はがくりと膝から落ちた。手をつこうとしたがそれもできず、私は見事なまでに無様に地に伏した。カネル師が私の名前を呼んだが、起き上がれなかった。

カネル師が私の名前を呼びながら抱きかかえた。エヴァムの近づく足音が聞こえた。師は彼を睨む。

「中途半端なお前に何ができるんだい？ 昔の約束を守ることも反故にすることもできずに、こんなところで似合わない生活をして。工房ごっこは楽しかったか？」

「ヴィーエ、敗者のお前がなぜこの世界に未だに執着するんだ」

師がその言葉を吐き捨てるかのごとく言った瞬間、エヴァムのなかの何かがふと切れたように、彼は激高した。

「敗者？ 僕が？ 何を言っているんだい。エヴァムでさえ乗っ取ることができる僕が敗者？ 冗談じゃない！ このラーディラス崩れが！」

二人が何を言っているのかは、このときの私に理解できるはずはなかった。そう、今のお前のように。ただ、圧迫されるような魔力がまた私を取り巻いて、全身に絡みつくような痛みに襲われたのだ。

激高したエヴァムは、腕輪を掲げてカネル師に向けた。その刹那、師は吹き飛ばされて、少し離れたところにある工房の壁に激突し動かなくなった。

「先生！」

エヴァムは、瞬時に私のもとへやってきて、頭を掴んで地面に押しやった。口の中に砂が侵入する。忘れたはずの痛みが全身に広がり、声さえ出せなかった。カネル師が叫んだ声も聞こえてはいたがまったく理解できなかった。

ぎりぎり締めつけられるのは、恐ろしいほどの苦しみがあった。

「君も苦しむともしっかり力が出せるんじゃないかい？ 僕にそれを捧げてくれ」

エヴァムは腕を天へ伸ばした。そこに嵌っていた腕輪は斜陽の光に反射して、この世のものとは思えないほどの美しさを誇っていた。地下であれに触れたとき、私はどう思っただろうか。思い出せない。もっと近くへ。私は這いずりながら、手を伸ばそうとした。

「俺を殺してくれ」

その声がどこから発せられたものか、最初はわからなかった。

「この場ではお前しかいない。やってくれ」

それは頭上から、まさに私を苦しめている張本人だった。わけもわからず混乱していると力が緩んだ。私はエヴァムの腕を遠慮なく渾身の力で払って必死に抜け出し、ふらつきながらも改めて対峙した。

「くそ、小賢しい。いや、やってくれ。何を言う」

次々と口調を変えるエヴァムをよそに、私は不思議な気分だった。彼の「やれ」という言葉を聞いた途端、まるで霽が全て晴れたような気分で、それまで感じていた痛みも、麻痺ではなく回復したかのように取り除かれた。

私は腕を上げた。同時に、エヴァムもひどく歪んだ形相で、こちらにむかって腕輪をつきつけるような姿勢をとった。エヴァムの白い肌が、赤銅色に輝いていた。空の赤、太陽の赤、そして腕輪の赤――とても美しかった。

私は笑い、一番の魔法を使った。エヴァムも何か魔法を使ったのがわかった。そこから先は、記憶になかった。視界の端に、ぼろぼろの身体をひきずりながらこちらへ走ってくるあの人の姿を見たのが最後だった。

それからどうしたかって？ 私は、夢をみたんだ。またあの赤い夢だった。今度は波に揺られていて、赤い海の真ん中で浮かんでいた。どこかで懐かしいような歌が聞こえた。私は、今になってもその歌をどこで耳にしたか思い出せない。

しばらく、海を仰向けで漂って、赤い空を見ていた。すると、どこからか人影が降ってきた。何にもない空から、ゆっくりとな。顔は逆光で見えなかったが、幼いころから慣れ親しんだ気配

があったので、カネル師かと思った。

「つかまえた」

その人物は私を抱き、そのまま海へ沈めた。私はちっとも苦しくはなかったが、無性に悲しくなって涙を流した。それは、海の赤と交じってすぐに溶けてなくなってしまった。

そこで夢はおしまいだった。気がつく、私はカネル師の部屋にいたのである。ひどく憔悴したライアが師や他の弟子と何か話していて、私には気づいていないようだった。そして、弟子側の人間はすべて退出し、残ったのは私と師だけであった。師は、ほうと溜め息をついた。

「先生？」

カネル師は驚いた様子で振り返った。あの大魔法使いが包帯やら何やらで痛々しい姿は貴重だったかもしれない。当時は、その姿を見ることがとても辛かった。

「やはり、君は出てきたか」

何のことかさっぱりわからなかった。とにかく、私はその前に起きた出来事を思い出し、尋ねた。

「エヴァムは？ どうなったんです？」

カネル師は何度か私を見て目をそらすことを繰り返し、いくどかためらってから私を窓の前に移動させた。この時点で私には違和感があった。師の腕は私よりもさらに細い。それなのに、子どもならともかく大人の私をやすやすと片手で持ち上げるなんて信じられなかった。

師は窓辺に立ち、杖で窓を叩いた。ちなみに、その時は夕闇が去って、かすかに青が空に残っている状態だった。窓は鏡となり、ぼんやりと映っていた室内の様子がよく見えた。私は言葉を失った。

「君は、腕輪の一部となったのだよ」

そこにあったのは、あの腕輪だった。

「これは、夢ですか……？」

私の擦れた声の問いに、眉を細めた師は目を細めながら否定した。

「いや、現実だ。嫌になるくらいね。……すまない、私が言うことではなかった」

そこに、おちゃらけた様子はなかった。重い口調で、私は思わず二の句を次げなかった。そのままどれくらい沈黙していただろうか。私は意外なほど早く、自分の変容を自然に受け入れていた。それどころか、なんだか少しほっとした気分だった。

悲しいことに、私は自分が人間でなくなったこと自体はそれほど苦ではなかったのだ。これで、もう誰も傷つけない—そんな馬鹿なことを思ったのである。それを過ちと知ることもなく。

「俺は死んだ、ということですか？」

「ああ、肉体はもう葬った。裏の崖にね」

私は驚いた。てっきり、それほど時間が経っていないと思っていたのだ。いろいろ聞きたいことはあったが、まず出たのは、何とんでもエヴァムのことだった。

「先生。エヴァムのこと、俺には尋ねる権利ありますか？」

カネル師はまた何度か逡巡し、深く息を吐いた。

「私の昔話は覚えているかい？」

「散々、先輩たちに聞かされましたから。あれでしょう、魔王を滅ぼして世界を救ったとか」
カネル師は自嘲するような様子だった。

「魔王ね。正確には少し違う。私たちは神を封印したんだよ」

魔王も魔王であれだが、神とはまた突拍子もない。私は絶句した。カネル師は、私の様子を窺いながら、口をゆがめるように笑った。

「信じられないだろう？ 私自身もそうなんだが、事実だ。その神というのがヴィーエ。エヴァムの体に乗っ取って今回の騒ぎを起こした張本人さ」

「なんですって？」

「あれは、かつての世界の覇者だったが、どうしようもないやつでね。世界を新しく、自分の思いどおりにいくように作り直そうとした。我々は、この世界を失いたくはなかった。いや、私とエヴァムはそれほどでもなかったかな。いや、やっぱりエヴァムもそうだったかも。とにかく、それを阻止してヴィーエを封印したのが、私たちの伝説。もう、エヴァムと私以外はみな死んでしまったけれど」

その時点から数百年前の話だ。さすがに、ラーディラスでないとそんなに長い年月を生きられないだろう。

「ヴィーエは神々の中で最も力が強くてね、封印するのにも手間取った。そして、封印してもそれが永久に続くかどうかは定かではなかった。だから、私とエヴァムが見張り役になったんだ。しかし、エヴァムは腕輪を持って姿を消した。ディラン……一世のほうだな、に私を宮廷魔法使いとして迎えることを言い残して。私は懸命に探したが、ラーディラスの気配は見つけれなかった。それから今まで、世界中を渡り歩きながら探していたんだよ」

先生が時折ふらりと出掛けるのは、そういうわけだったのか。私は初めて合点がいった。

「まさか、こんなに近くにいるとはね」

カネル師は声をあげて笑ったが、その姿は痛々しかった。どう声をかけていいのかもわからず、私は遠慮がちに尋ねた。

「大臣とはお会いになりましたか？」

「ああ……コリンを引き取りにきたからね」

「コリンはどうなったんですか？」

こんな危険なところ、もういいだろう。帰ってきなさい。大臣がそう言ったであろうことを予想した。しかし、師の反応は切れが悪く、しばらくして残酷な答えが返ってきた。

「……死んだよ」

「え？」

「死んだんだ。君たちの数日後にね」

死んだ？ コリンが？ 私は頭が真っ白になり、そして、最後に見た彼の姿を思い出した。ライアをかばって全身に傷を負った彼は、助からなかったのだ。それは間違いなく、私が元凶だった。私がヴィーエを解き放たなければ、きっとあの晩はいい時間が過ごせただろう。ライアとコリンの応酬を聞きながら、土産ものを手に取ったり食べたりして――。私は後悔した。しかし、もう取り返しがつかなかった。

「俺が殺したようなものですね……」

「殺したのはヴィーエだよ。しかし、君が彼の誘惑に抗えなかったのもある。たとえどんなにヴィーエの言葉の魔力が強くてね。そして、そんなヴィーエが近くにいることも気づけなかった私の責任でもある。コリンは、気の毒だった」

このとき、カネル師はコリンのために私を怒るべきだった。けれどもそれをしないところが余計に辛かった。その代わり、私のせいではないとも絶対言わなかったが。コリンは私のせいで死んだというのは変わらない事実である。千年経った今でも、そう思う。

私は、ラーディラスはお互いを感じられないということを思い出した。

「ヴィーエはラーディラスですか？」

カネル師は首を横に振った。きれいな銀髪が重く揺れた。

「ヴィーエは虎視眈々と私たちを狙っていたようだ。そのために、エヴァムを利用した。腕輪を通してエヴァムの内側に入りこみ、少しずつ支配していく。そうすれば、ヴィーエの魔力なんてほとんど私にはわからないからな」

「今、ヴィーエは？」

「エヴァムの肉体は、君によって破壊された。腕輪ごとね。エヴァムはヴィーエを全力で抑えこもうとして、ヴィーエの魂と融合した。ヴィーエはその一瞬の隙を突いて君の魂を取り込んだ。そして後に残ったのは、どこへどう転ぶかわからない赤石だけだ」

あの素晴らしいほどの赤が、私の心によぎった。

「三者の魂が融合して赤石に宿った。この石はヴィーエの本性だからね。そして、君が出てきたということは、どうやらヴィーエとエヴァムが拮抗して、お互いを打ち消し合っているらしい」

その理屈が、私にはよくわからなかった。まあ、私の側からわかりやすく言えば、三者とも表に出てくる可能性は持っているが、エヴァムがヴィーエを押さえつけているから、手が空いている私が出てこられるというわけだ。二人？ ……今でも私のなかにいるよ。

「俺は、これからどうすればいいのでしょうか」

「……ヴィーエは、おとなしくなったからといってそのままにしていいい相手ではない」

カネル師は、少しためらいながら言った。つまりは、完全に滅ぼすしかない。それは、私やエヴァムの消滅も意味していた。この石を完全に破壊しなければヴィーエはまた世に解き放たれるかもしれず、石を壊したら私とエヴァムの魂をこの世に留めておくことができない。……そんな顔をするな、お前のための話なんだから。

「だが一つ問題がある。誰が破壊するかだ」

「それは、先生では駄目なのですか」

師は微かに笑った。

「すまない、とっくにやっていた。しかし、そのなかにエヴァムがいるとなると」

それは、かつての仲間を殺すことに抵抗があるということではなく、ラーディラス同士の問題だった。石には三つの意識が宿っている。特に、エヴァムとヴィーエは本当にくっついているような状況なのだという。ただし、それでも魂の原型は残っているがな。掟とかそういうものでは全くなく、本当にラーディラスはラーディラスを殺せないのだ。言うておくが、でなかったら

私などとっくにこの世から消えている。

表に出てくるのは私だが、腕輪としての力は全体の一割程度しか持っていない。後の九割はヴィーエとエヴァムがほぼ同等に分け合っている。たとえ私が表に出ているからといって、私が強いとは限らないのだよ。

「壊せる人なんているのでしょうか」

「探すしかないな」

どうやって？ それは途方もないことのように思えた。

「基準は一つある。腕輪は媒介である肉体を失った。この場合、体を蝕まれていたエヴァムだな。実を言うと、君は腕輪の魔力を通して喋っている。神である腕輪の魔力を感知できない者には聞こえない。これはいくらか高度な素質がいる。つまりは、君の声を聞くことのできる者ということが第一条件だ」

魔力が強ければその分感知できる者も多いというのは、半分間違いではない。人間同士の場合はな、伝達力が高いんだ。しかし、これに神の力が加わると、話は違う。神の力を感知できる人間はそうとう限られてくる。わかりやすく言えば、魔法の才に恵まれた者だ。せめてそれくらいのことのできる人間でないと、腕輪を壊すことなんてできっこない。

こら、慄くな。声が聞こえるからと言って、壊すことができるとも限らないんだ。あくまでも私と会話ができるのが一つの基準になっているだけだ。とにかく、腕輪を破壊するだけのでかい魔力が必要なんだ。

それ以外にも、魔法を使う能力に長けていることが必要になる。違いがわかるか？ 素質だけ持っている人間が野に隠れていることもある。しかし、素質と扱う能力はまったく違うんだ。魔力を制御できないでいたずらにぶんぶん振り回す阿呆もいるが、こういうやつには私たちを消滅させることはできない。でかい魔力は制御が大変で、たとえ元の魔力が大きくても、それを扱う才能に恵まれてなければ何の役にも立たない。魔力だけを過信すると、痛い目をみる。

神を消滅させるほどの魔力とそれを確実に制御できる能力が、とりあえず必要なものだった。あとはおいおい話していくとするか。

「君には、何もしてやれなかったね」

カネル師はすっかり別人のように気落ちしていた。まあ、無理もないか。私は、エヴァムと師の間に何があったのか知らなかった。だから、二人がお互いをどのような存在だと思っていたのかもわからなかった。ただ、師にとってエヴァムは大切な存在だったろうということはぼんやりと理解できた。もしも二人が再会した瞬間にあの丘にいれば、何かわかったかもしれない。

「そんなこと言わないでください。先生らしくない。それに、先生は俺を弟子にしてくれました。俺の人生ではそれだけで十分お釣りが返ってきます」

ありがとう、とカネル師はか細い声で言った。私はそんな師は見たくなかったが、状況が状況なだけに仕方がなかった。

「ただ、コリンだけは残念です」

もしも彼が私の代わりに取り込まれていたら。そんなことも考えたが、きっと彼はそれを拒んだだろう。

「大臣は」

「公には、王家に反感を抱いていた身元不明の希法士が起こした事件とされている。一度捕えられたものの、警備の間隙をついて脱走し、人でごった返したなか暴拳に及んだ。レイフォードがそしてお触れを出した。そして、我々で始末したことになるらしいよ」

他人事のようにカネル師は言った。合っているような合っていないような、不可思議な話になってしまった。ともかく、世間から見たら、師に武勇伝が一つ増えたことになったのであろう。

「あれは自らの行いが不利になるような措置はとらなかった。言いたいことはたくさんあるけれど、息子を亡くしたばかりの今は何も問えないな」

私は、大臣の誘いを受けてしまった愚かな自分を後悔した。結局私たちは何も得られなかったし、私は何も聞けなかった。これでよかったはずはなかった。しかし、後悔しても私が人間に戻れるはずも、死んだ人間が生き返るはずもなかった。

「俺、これからどうすればいいんでしょうか」

カネル師は困った顔でこちらを見た。

「待つか、探すか。残念ながら、今のところ心当たりはない。人間が存在し続ける限り、時間だけは無駄にある。何年、何十年、何百年もかかってでも、君たちを消滅させることのできる者を見つけるしかない」

「探す？」

「ああ、世界を何周してでもね」

途方もないことだった。私はエアトンの片隅、ローハインの工房に閉じこもっていた。世界はその中で完結させてしまっていた。その何千倍も広い世界全体から、いるかないかもわからぬ人物を探さねばならないなんて、海中に落とした小石を見つけるようなものだった。

「待つかい」

「考えてもいいですか」

私の答えに、カネル師は意外そうな顔をした。私も自分が意外だった。きっと、今までの自分ならひたすら待たせよう。それに、いざ行動を起こしたら、取り返しのつかない大惨事を巻き起こした自分だ。それでもその答えが出なかったのはなぜか、今でもよくわからない。

「わかった。もう夜も深くなってきた。私も寝よう。君は、どうする？」

「そうですね、隣の部屋に運んで下さいますか」

了解、と師はどこか颯爽と私を隣の部屋まで連れて行ってくれた。ああ、もう自分の足では動くこともできないのだな、と私はぼんやり思った。

「腕輪になるって変な感じですね」

「正確には、君たちは赤石だよ。腕輪は、封印のためのものだ。文様が刻まれていただろう」

あのときの私はあまり覚えていなかった。この赤い石しか頭になかったのだから。そう言われてみればとても美しい彫刻があったことを思い出す。ちなみに、今のとは微妙に違うぞ。

「あれはエヴァムが作ったものでね。私は昔から、魔法では彼に勝てなかったんだ。いま君が嵌っている腕輪は、残念ながら私の作だ」

「こういうのはライアが得意でしょうが、あいつは」

「……今はそんな状況じゃないね、彼女は。三日間ほとんど寝ないでコリンを必死で見ていたんだが、亡くなってしまったからね。かなり参っている」

私はあの憔悴した様子の彼女の姿を思い出し、心が痛んだ。あの子にも気の毒なことをした。私が黙りこくっていると、カネル師は、私の机に私を乗せた。視点がいつもと違って、とても落ちつかなかった。

「じゃあ、おやすみ……次室」

わざわざそう言うと、師は部屋を出て行った。私は一人取り残された。寝れはしなかった。どうやら、この姿になると睡眠は必要ないらしい。いや、辛くもない。そういうものなんだ。

その晩はずっと起きて考えていたが、一向にまとまらなかった。朝が来て、カネル師が迎えにやってきたが、私は何も言わなかった。師もそれを察知したのか、特に何も聞かずにいてくれた。私は、ひとまず自分の墓が見たいと頼んだ。

私の墓は、ローハイン工房のはずれに位置する。まあ、めったに誰も来ないような場所だな。私の部屋とは違って、海が見渡せるようなところに、私は葬られたのだ。もっとも、遺体がどのような状況だったのかは詳しく知らされていないが、思うに、ほとんど残らなかったのではないかな。

「いい景色ですね、ありがとうございます」

簡素な墓だったが、誰が持ってきてくれたのか、花が飾られていた。私は自分の死後は適当にしか考えなかったが、こうして誰かに葬ってもらえるほどの人生だったのか考えると、心が静かになった。そこまでしてもらった価値など、私にはありはしなかったのだから。

海は見晴らしがよく、とても美しかったが、反対側の街や山はひどい有様だった。よほどエヴァム……ではなくヴィーエが荒らしたんだらう。街は穴ぼこだらけだったし、平原は爪痕のようにえぐれていたし、最も近くにある山は無残にも頂が削り取られていた。私は、自分の立場も考えずに怒りがこみ上げた。

数年ぶりに外へ出たあの日、私は世界を美しいと思った。私は世界に対して畏怖と愛情を抱いていたのだ。それが、こんな有様になってしまうのはひどく悲しかった。ああ、世界はあんなにも美しかったのに。私が見ていた景色がすべて失われてしまった。

海は静かに波音を立てていた。その先はシェスカにつながっていたのかな。遠くから船がやってきていた。その背にはおそらく、より大きな世界が構えていたのだらう。

遠くに、微かな島影が見えた。うっすらとした灰色の姿に、私は心ひかれた。今まで、工房から見える海にそれほどの感動は覚えなかったのに、なぜかそのときはとても切なくなった。自分の墓ごしに見える海が、なんだか輝いて見えたのである。

そして、私の口から自然と言葉が出た。

「先生、探してもいいですか？」

「え？」

いきなりのことに、師も驚きを隠せていなかった。

「俺たちを消滅させてくれる人間を探したいです」

「いいのかい」

私は、はい、と言った。もう自分が頷くこともできないことに気づいた。人間のときのように歩くことも何もできない。それでも――。

「すみません、正直に申し上げますと、死ぬ前に世界をもっと見ておきたいんです」

窓から見える風景が私のすべてだった。しかし、世界はそれだけではないのだ。あの美しい景色が破壊されたのを見て、私は、それまでの世界のすべてまでもが壊されたような気がした。同時に、他の景色を目にしたくなったのである。他の、美しい世界を。私は、世界を愛している。そのときにはっきりと理解した。

「それに、向こうがやってきてくれるとは限りませんから。それなら、自分で探しにいきます」

「どっちにしろ、何年かかるかわからないよ」

「はい、いいんです。たとえ千年かかってもいい」

このとき、私は完全に解放された気分になった。ローハイン工房の次室に閉じこもっていた生ける亡霊のような日々は、このとき終わりを告げたのだった。

さて、話の続きだ。この間のは、少しお前に不親切な話し方だったかもしれない。すまない、ここらへんの事情は説明しづらいな、なんとも。余計なところや足りないところもあっただろうが、そういうときは遠慮なく言ってくれ。

とにかく、私は思いついたままに、世界を回りたいなどと言ってしまった。まるで子どものようだな。自分でも笑ってしまう。だから、カネル師にこう尋ねられても、答えることができなかった。

「どうやって巡るつもりだい？」

あ、と呟いて何も言えずに黙ってしまった私を、師は苦笑しながら見つめた。見てのとおり手足はないし、念じれば移動という器用な真似もできない。

師は、手の中の私をからかうようにぶらぶらと揺らした。視界はされるがままに動き、抵抗などできなかった。本当に物だからな。

師の言うことはもっともで、あの日の私はこんな状態でどうするつもりだったのだろう。私が言葉をつなげないでいると、師まで黙ってしまった。師が私に視線を向けたりそらしたりして考えこんでいると、いきなり後ろから声がした。

「先生」

カネル師が振り向くと、工房の一員であるグレンの姿があった。身体も態度もすこぶる大きな男で、植物の育成に関する魔法に長けていた。工房の中でも特にカネル師に傾倒しており、他の弟子たちの指導においても、次室の私よりもずっと熱心だった。いろいろ私とは正反対で、私はずっと彼に嫌われていた。

その前夜は特に意識しなかったが、私やコリンが死んでから少し時間が経っていたようで、工房を空けていた面々もぽつぽつと戻ってきていたらしい。そういえば、最初に目覚めたときにも何人かいたな。グレンは確か、エアトンからそう離れていないところで仕事があったため、比較的早めに帰ってこられたのかもしれない。

「ここにいらっしゃったのですか」

グレンは私の墓標を一瞥すると、顔の片側だけで苦い表情を作った。しかし、すぐにいつもの仏頂面に戻り、姿勢を正した。

「また外のやつらがやかましいのですが、本日はどうですか」

カネル師は私に一瞬だけ目をやると、首を傾けた。

「そうだね。とりあえず今日も帰らせてくれるかな。理由は昨日と同じでいいよ」

「はい、かしこまりました」

「悪いね」

師の言葉を受け、グレンは一瞬だけ言葉に詰まり、首を横に振った。そして、そのまま踵を返して工房の方へと戻って行った。

グレンの足早に去っていく様子を、私は不思議な思いで見ている。私のことが嫌いだった彼は、顔を合わせるたびに私を睨んでばかりだった。その彼が、私にあからさまな敵意を飛ばさないことに違和感を覚えた。

ああ、そうだ、自分は死んだのだ。私はその事実気がついた。彼という居心地の悪い思いをしていたことは確かだったが、こうなると自分の存在が認識されないほうがよほど空しかった。もちろん、今は慣れたよ。

「今、立てこんでいてね。しばらくは今回の後始末に追われることになりそうだね」

そう言いながら目を細め、師は近くの壁に手を置いた。エヴァムーではなくヴィーエが好き勝手に暴れたせいか、崩れていたり表面がえぐれていたりしていた。

「結構頑丈にしてたんだけどなあ。……ハロルドたちと作ってさ」

カネル師はこの建物に思い入れがあったようで、表面では笑っていたが、その背中に落胆の気配が見て取れた。

「さっさと直したいんだけど、依頼人たちとの調整もあるし、余所の連中はいろいろ言ってくるし、うまくいかないもんだね。いっそのこと、あっちの孤島にすればよかった」

乾いた笑い声をあげながら、師は工房へと歩き出した。今となってはもうとっくに慣れたが、そのときはまだ視界や感覚の変化に戸惑っていた。足を進めたわけではないのに勝手に変わっていく景色が妙に落ちつかなかった。

「ねえ、もしも、私が一緒に行けないというなら、君はどうする？」

不意の質問に、私は最初、妙な気分を抱いた。一瞬あっけにとられた私に、「さっきの話」と師は付け足した。

外に出てみたいと宣言したものの、師と一緒にとは思い当たらなかった。けれども、師は自分が私に同行することを前提にそう問うてきたのだ。

私が質問をよく飲みこめないでいるのを察したのか、師はふざけて私を指にかけて回し始めた。空と海と地面が交互に視界を横切った。酔って気分が悪くなるということはなかったが、あまり愉快ではなかった。

「……先生と一緒にとは、考えてみませんでした」

私がそう言うと、師は一瞬止まって小突くように私を指先で弾いた。

「君はどうやら自分では動けないみたいだけど、それなら人の手が必要だ。運び手がね」

「はい」

「本当なら私が一緒に行けたらいろいろと安心なんだけどね、他の子も抱えているし、エアトンを今動くわけにはいかない。そうだな、五十年ほど待っててくれるかい？」

まるで、一杯の酒を飲み干すほどの感覚で言うものだから、私は思わず啞然としてしまった。冗談だと師は付け足したが、当時の私からすればあまり洒落になっていなかった。

まあ、今の私だったら本当に五十年待たせよう。いつの間にか、私にとってそのくらいの時間は特に長いものではなくなってしまった。うん、少し嬉しいような寂しいような気分だ。ん？ 嬉しいという言い方は変か？ でも、そう思うこともあるんだ、どういうわけか。

私は確かに弟子の中でも位置づけは上だったし、付き合いも比較的長かった。縁はけして希薄

ではなかったけれど、その時点ではまだ唯一無二の特別な存在というほどでもなかっただろう。他にも弟子はたくさんいたから。あの人からしたら、皆かわいいのだと思っていた。それまで面倒を見てきた歴代のアールヴ王の一人一人のこともよく覚えていて、思い出話もよく聞かせてくれたしな。

だから、私は師についてきてくれなんて、言うどころか思うこともできなかった。むしろ、あの発言は意外にさえ感じた。師と一緒にいたら心強かったし、妙なことにも巻き込まれなかっただろうし、問題は思いのほか早く解決できたかもしれない。それでも、やっぱり私は師との旅を考えられなかった。実際、それでよかったと思う。そうでなければ、出会えなかっただろう人間もたくさんいただろうからな。もちろん、お前とも。

「その件についてはまたゆっくりと話そう。さすがに私もしばらくは仕事に精を出さなければならぬし」

私が思案に浸っている途中で、カネル師はそれで話を一度終わりにした。とにもかくにも、その時点での優先事項は工房の復旧だった。そのときは、私もカネル師もこの問題を一度、保留する予定だった。もしゆっくりと二人で考え合う時間があったら、今後についてきちんと相談できていたなら、また違った旅路をたどっていたかもしれないな。ああ、いかん、過去に「もしも」は必要ないのにな。すまない、つい何度も使ってしまうんだ。

何というか、間がいいのか悪いのか、カネル師の提案はなしになった。工房の二階に上がり、奥にある師の部屋に向かう途中の廊下で、少し荒れた話し声がした。グレンとライアだった。

「だから、どうして俺には言えないんだ」

「わざわざ先にグレンさんに言うものではありませんから。先生に直接お話しします」

「先生だって今は」

師の存在に気づくと、二人は気まずそうに黙ってしまった。師だって、会話の端々が耳に入っていたはずなのに、何も聞こえませんでしたと主張するような態度で首を傾げた。

「何の用？」

ライアはグレンを見た。そして、難しい表情のまま顔を伏せた。

「ご相談があるので、お時間いただいてもよろしいですか？」

師はグレンに向き合って、その日の予定を確認し、少しだけならと答えた。わずかにライアの顔が緩み、グレンはますます不機嫌さを露わにした。

カネル師は彼女を部屋に招き入れた。グレンはそのまま立ち去ってしまったので、二人分の杯を用意したものの、肝心の茶葉を保管していた容器が空になっていた。元々埃をかぶっていたので、ライアの健康を思えば幸運なことだった。

師は他の容器も探していたが、ごちゃごちゃした棚に紛れたのか、淹れられるものが何もなかったようだった。

「ああ、これしばらく使わなかったから。ごめん、ちょっと待ってて」

その「しばらく」が具体的にはどれくらいの年月か気になったが、知りたくはなかった。だって、恐ろしいだろう？ でも、そのときは工房ができて三十年あるかないかだったのかな。師の感覚からすると……いやいやいや、考えてはいかん。

師は私とライアを置いて、私の部屋であった次室へつながる扉を開けた。ライアは視線だけで師を追ったが、師が隣へと姿を消した途端、泣きだしそうな顔になった。もう一度きちんと見れば生気を失ったような佇まいで、今にも消えてしまいそうで、コリンや私と笑い合っていた彼女とは別人のようだった。

「ライア」

声をかけてみたけれども、返事はなかった。ライアはただ、膝の上においた拳を強く握っただけだった。その指には切り傷や火傷がいくつああって、私は不思議に思った。

「すまないね。飲み物がないことすっかり忘れてた」

飄々とした様子のカネル師が戻ってきて、ぞんざいに次室への扉を閉めた。そして、水を入れた瓶を指でつついてすぐに湯を沸かし、茶を入れた。匂いを感じない私は最初気づかなかったが、師が机に置いた茶葉入れの文字を見て、コリンがいつも飲んでいたものだと知った。

ライアは少し震えた手で、それを一口飲んだ。

「それで、用件を聞こうか。あ、でも、魔法に関する質問ならまた後日にしてほしいな。今は手いっぱいだからさ。人手は足りなくなっただし、まだ戻ってきてない子もいるし」

彼女の手がびたりと止まった。視線は器の中。

「君のこと、これでも頼りにしているんだよ」

俯いて黙りこくるライアを、師は考えを悟らせない微笑で見つめ、答えを待った。やがて、垂らした髪で表情を隠すように、ライアは顔を上げないでゆっくりと口を開いた。

「すみません、やっぱり、なんでもないです。お邪魔してごめんなさい」

乱暴に茶器を置いたライアはそのまま立ち去ろうとしたが、師が彼女の手をつかんで引きとめた。ライアの半身が一瞬、宙に浮いた。

あの人は、私と大差ないくらいに細い腕をしておきながら、不思議と力が強かった。まだ私が幼く見習いだったころ、失敗をしたらよく師に投げつけられたりなどしたものだよ。

「待ちなさい」

薄く笑った師の顔を見上げたライアは、怯えに近い表情を浮かべた。いや、師は怖い、確かに怖い、カネル師自体を恐ろしく思ったという感じではなかった。うまくはいえないが、悪事がばれてしまったかのような様子だった。

「せっかく淹れたのだから、最後まで飲んでほしいな。師匠に対してちょっと失礼だと思わない？」

ライアの視線は卓の上。私はただ見ることしかできないが、よほど力のせめぎ合いが行われているのか、捕えられた手はぶるぶると震えていた。

「グレンを不機嫌にしたくらいの価値はある話を期待していたのだけどね。彼だって、怒り損でしょう」

ライアは黙々と席に着き、一言も発せずに茶を一気に飲みほした。

「忘れてしまいました」

「嘘つき」

「嘘じゃありません。すみません、戻ります」

ライアは駆けるような足どりで出て行ってしまった。師は頭を掻きながら、茶器を持ち上げて私の前で揺らしてみせた。

「どうしよう、まだ残ってるんだけど、君は飲めないよね？」

「当たり前じゃないですか」

私はわざと大げさに溜め息をついてやった。

「彼女、すっかりあの調子なんだ。君もコリンも死んでしまったし、今はグレンが面倒をみてくれているんだけど、彼女らしくない失敗が増えて」

師はもう一杯、自分の器に湯を注いだ。コリンが見ていたら思わず悲鳴をあげそうなほど杜撰な淹れ方だった。

「コリンの死が大きかったね。手当をしてずっと付き添っていたんだけど……残念だった。彼だけが傷を負ったことを悔やんでいてね。我々が叱っても励まして、耳に入らないらしい」

どうしたものかと言うように、師は首を傾げた。

「あの調子が続くと、どうしようもなくなるかもしれない」

「どうしようも？」

私の言葉と同時に、扉を叩く音がした。師は困ったように笑った。

「見ていればわかるよ」

そのころ、ローハイン工房には本来の半数しか人手がなかった。事情はいろいろさ。仕事の状況だったり、物理的な距離だったり。あと、町の出入りが制限されて足止めを食らったという話も聞いたな。そういうわけですぐに復旧とはならなかった。

育てていた薬草や保存していた材料は使い物にならなくなっていたし、作業場も被害を受けて道具が破損あるいは行方不明になっているものが多かった。書物もだいぶ灰となった。私の部屋は外壁だけで済んだのは幸いだったが、持ち主は死んで持ち物は残るのは皮肉だな。

弟子たちが寝起きする宿舎もほぼ無傷で、どうせならこちらを破壊してくれたらよかったのに、と私は他人事のように思っていた。え？ なぜって、宿舎には服と寝台くらいしかないだろう？ 魔法使いにとって大事なものは、魔法に使うものに決まっている。

工房を再開するには、とにもかくにも環境を整える必要があった。町自体も復旧に追われていて応援を呼ぶどころではなく、限られた人数で工房の復旧を行うのはなかなか大変だったようだ。

あっという間に業務は滞った。カネル師は新しい依頼の全てを断るよう指示を出していたが、弟子の中には癖のある依頼人を抱えている人間も少なくなかった。師が出ていけば引き下がるのもいたが、人質を取られているも同然の者もあり、完全に排除するわけにもいかなかったのだ。それで完全に工房を立て直すのに専念できず、工房の復旧に従事する人間、依頼された仕事を進める人間の二つに分かれなければならなかった。

私だって生きていれば手伝えたらうに、ただ見ているしかない自分がもどかしかったよ。生前は他人に対してさほど積極的ではなかったのに、いざ生者の輪から締め出されてみると、何も

できないという現状が馬鹿らしくなるほど悲しく思えた。

この状況で実感したのは、私と意思の疎通ができる人間が本当にいないことだった。私の声を聞けるのは素質のある人間だけと言ったとき、私は話半分に捉えていた。師は普通に話すことができたからな。しかし、私がちょっとしたことで声をあげても、誰もが無視した。無視というのは変か、元々聞こえないのだし。

神の力がなんだ、ヴィーエが強大な神ならば、素質のない人間にも声が届けられる方が自然ではないか、と隠れて愚痴を言いたくなかった。このときはまだヴィーエについての理解も少なく、自分がその神に取りこまれているという意識もなかった。ただ、会話ができないことに寂しさを感じる自分はとても不思議だった。コリンとライアが来る前は、弟子同士でもあまり言葉を交わさずにいて、その方が気楽だったのに。いつの間にか二人といることに慣れてしまっていたせいだろうか。

そのライアはというと、彼女の能力を考えれば妥当だが、急ぎの依頼分をこなす役目を任されていた。普通の彼女ならとても頼れる存在だろうと呑気に考えていた私だが、師はやけに彼女のことを注意して見ていた。そして、その理由はすぐにわかった。

「比率が違う。四六でなくて五七だ」

「ここ、余分に切りすぎている。これじゃ使えないよ」

「指定と形がちがう。もっと鋭く」

他の弟子たちからの指摘がたびたびライアに出された。別に彼らの意地が悪いわけではない。彼女にしては信じられないほど多くの失敗が発生した。どれも単純なものであるが、まさかこの子が、と言いたくなるような予想外の問題が相次いだ。どうしたんだ、と彼女を叱責する声が聞こえることも少なくなかった。

「医療士になったら失敗はもっとできなくなるぞ」

肩に手を置かれて確認するような口調で言われると、ライアはますます俯いて、小さな声で謝り、淡々とやり直していた。事件前は多少の皮肉も平然と交わしていたのが嘘のようだった。ライアを嫌っていた者でさえ、同情的な視線を送るようになった。

工房の修理に回しても、結果はあまり変わらなかった。失敗するか、心ここにあらずという状態であるかのどちらかだ。こちらは力と速度を求められていたこともあり、すぐに別の男の弟子と交代させられた。

「先生、ライアに仕事を振らない方がいいと思うのですが」

彼女の様子に苛立って、そう進言してくる弟子もいたが、カネル師の答えはたいてい一緒だった。

「この状況で何もしなかったらますます萎縮するだろう。今、あの子はここを出てもどうしようもないし、私がついているから」

手先が器用なことを除けば、ライアは魔法使いとしてまだまだ力不足だった。他の弟子たちに負担をかけさせないなら、師が補助に回るしかなかった。師はライアを自分のそばに置いて細かく状況を監視するようになった。

私は手を出したくても、出せないどころか声すら彼女には届かない。カネル師がそのときその

ときで適当に置いた台の上や棚などの、遠い場所から何もせず黙って見守るしかなかった。まだ肉体があったときと同じ感覚でいた時期だったから、とにかくもどかしくて仕方がなかった。手を伸ばそうとしても、その手がもうないのだから。

それがどれくらい続いたか。敷地内の目立った瓦礫がなくなったころだったと思う。自分のもとに届いたまま放置していた書簡に目を通していた師は、一通だけ除けて束から離れたところに置いた。そしてライアを呼び、それを手渡した。

「君宛のものが私のところにまざっていたよ」

頬のあたりが痩せこけて、眼下の隈が濃くなっていたライアは、宛名を見て訝しみながら紙をひっくり返す。そして、差出人の名を見つけたのか、まん丸に目を開いた。

「知り合い？」

「はい、シェスカのプリムサズにいる……。すみません、ありがとうございます」

プリムサズは、シェスカの内陸にあったベネディーラという国の一都市だ。宝石の採掘と加工が有名で、そこで作られる装飾品はシェスカ西部の王侯貴族に好まれていた。

ぼんやりと部屋を出ていくライアを見送って、私の疑問をわかっているかのように師は口を開いた。

「昔の仲間かな」

「確か、以前は何度かやりとりをしていましたね」

ライアはたびたび、シェスカに残してきた仲間は何通か自分の近況を知らせていたのだった。戦の最中だったから届くかどうかもわからなかったが。

「無事を知らせるものでしょうか。それであの子が少しでも元気になってくれたらいいんですけど」

私の言葉にカネル師は何も応えず、難しい顔をして窓の外を見やった。そんな師の様子に、私は強い不安を感じた。だから、翌日以降のライアがやけに穏やかで、時々こやかにさえしている様子を見たときはほっとしたんだ。グレンをはじめとする他の弟子たちも、安堵する者もいれば、心配して損したような表情を浮かべる者もいた。

しかし、師だけは依然として、いや、もっと渋い顔をしていた。異様にさえ思えるほどで、どうしたのかこっそり尋ねてしまった。カネル師は深く溜め息をついた。

「油断ならないね」

私は最初、この人は何を言っているんだと呆れた。ライアは見るからに変化があり、元通りとまではいなくても、ずっと雰囲気明るくなった。むしろそこは安心すべきところだろう、と。

「もうちょっと様子を見たい」

理由は語らずに師はそう呟くと、自分の仕事に取りかかって私の言葉なんか耳に入らないような態度だった。

それから数日経ってもライアは元気に見え、師の言葉は杞憂にしか過ぎないと安心したのだった。一時よりも集中して仕事をしているように見えた。

「ようやくあいつを気かけなくてもよくなりましたね」

グレンはライアに対しては普段から毒を含ませたような物言いをしていたが、このときばかりは少し嬉しそうに見えた。いや、さすがに気持ち悪いなどとは思わなかったよ。珍しいとは感じたが。

そう話しながら、彼と師と私が廊下を歩いて師の部屋に向かっていると、その隣、つまりは私の部屋だった場所からライアが出てきた。師たちの姿が目に入って、あちらもぎょっとしていたが、こちらだって驚いた。

「やあ、ライア。どうかした？」

真っ先に声をかけたのはカネル師である。彼女がいないときとはうってかわって、その笑顔と朗らかな声の調子と表情は、まるで詐欺だった。

「別に、何でも」

何だか久しぶりにライアの顔を間近でじっくり見たような気がした。にっこりと笑いながら首を横に振る彼女を、私は奇妙に感じた。ライアは、こんな風に笑う子だっただろうか。確かに朗らかな様子なのに、何かが違った。表面的な笑顔なのだ。以前の心の底からの笑みではなく、腹に一物抱えているような。私はふと、コリンが別の世界の人のようにだと砦で話していたときのことを思い出した。何となくあのときと似ていた。

「探しもの？」

「はい。ちょっと必要になって」

「でも、勝手に荒らすと次室に怒られちゃうかもしれないよ」

そこで何故私の名前を出す、と軽く抗議した。グレンが眉をひそめたと同時に、ライアの目から大粒の涙があふれた。自分でもびっくりしたらしく、彼女は慌てて手で拭おうとしたが、指の隙間からこぼれつづけた。

「ごめんなさい、私、どうして」

口を挟むべきか迷いながら師とライアを交互に見るグレンと、ただまっすぐ彼女だけを見つめる師は対照的だった。

「とりあえず私の部屋に来なさい。グレンも一緒でもいい？」

返事を聞かずに一人だけ先に自分の部屋の扉へ向かう師の背後には、涙を拭くことを諦めて立ち尽くすライアと、とにかく彼女に歩くように促すグレンの姿があった。

ライアたちが入室してきたのは、師から遅れること数分だった。その間、カネル師は無言で地図を広げながらシェスカの国々を指でなぞっていた。

グレンに引かれるようにやってきたライアは、魂が抜けたように無表情だった。グレンはライアを師の向かいに座らせ、自分は壁際に立っていた。自分がここにもいいのか考えているようで、視線は定まらなかった。

「何かあるなら率直に言ってほしいな」

師にそう言われても、ライアはしばらく口を開かなかった。

「ここが嫌になった？」

問われて彼女はすぐに首を横に振った。

「勉強が辛い？」

次の問いに、ライアは一瞬迷って同じ動作を繰り返した。

「二人がいなくて悲しい？」

今度は何も反応がなかった。グレンがじっとライアを見つめていた。

ライアの顔色は真っ青だった。思わず駆け寄ってやりたかったが、私は師の机から三人の様子を見ることしかできなかった。死んだなら本来この会話も聞くことはなかったのだから、何もできなくても仕方ない。そう思おうとしても納得できないでいた。

「近頃ね、君があまりにも元気にふるまうから、心配だったんだ。無理しているのを隠そうとすると、逆に不自然だよ」

師は薄い微笑みをライアに投げかけていたが、ライアはきちんと師の顔を見ようとしなかった。

「忙しさにかまけて、君のことちゃんと考えてやれなかったね。それについては申し訳なく思っているよ」

ライアは無言でその言葉を否定したと同時に、師は続けた。

「この状態は望ましくないとも感じているんだ。どうだろう。今の君の気持ちを、正直に話してくれないだろうか」

ライアは口を少し開けた。声にすらなっていなかった。聞き返そうとするように師が笑顔のまま小首を傾げたが、ライアはうまく言葉に表すことができない様子だった。

グレンが何か助け船を出そうと身を乗り出したが、師はライアを見つめたまま、彼女から見えないような位置で手を挙げて彼を制した。

もう片方の手で、師はライアの肩を軽く叩いた。

「言えない理由が私への遠慮か自己嫌悪なら、構わないで言ってごらんよ。私は別に何を言われても君を疎ましく思わない。そして、君も君自身を嫌う必要はない」

ライアははっとした表情で師を見上げた。師はにこりとしつつ、頭を撫でた。

「己を恥じることはないよ、ライア。人間ね、苦しいときほど正直になったほうがいいんだ。それがどんなに低俗で卑小で醜いと思ってもね。言わないで抱えこむと、本当にそうになってしまうから」

無言の時間が流れた。ライアよりもグレンの方が気まずそうだった。カネル師は、あの不思議な色をした猫みたいな瞳で、にこやかに弟子の反応をまった。

ライアの唇が震える。それを隠そうとするように、彼女は俯いた。

「言いたくなったら、いつでも言いなさい。五年くらいなら私も待てるから」

五年なんて、あなたの感覚では短すぎるのではないか。そう言おうとしたのを私はついこらえてしまった。どうせライアにもグレンにも聞こえないからそう言ってしまうても良かったけどな。

話に区切りがついたと思ったようで、一つ息を吐いたグレンが去ろうとしたとき、ようやくライアが口を開いた。

「先生、しばらくの間だけお暇を頂きたいと言ったら、軽蔑しますか？」

一瞬間があったが、師は表情を変えなかった。

「全然」

「昔の仲間に会いたくなかったと言ったら？」

「そうだね、それはシェスカかい？」

頷くライアを見て、グレンが慌てて開けかけた扉を閉めたが、反動で跳ね返り、半開きになってしまった。

「おいおい、何を言っているんだ」

つつつかとグレンは歩いてきた。彼は大柄だったから、力を入れて歩いていると床がミシミシと音を立てた。本人もそれを自覚して、二階にいるときは歩き方に気を使っていたが、このときばかりはそうも言っていられなかった。

「まさか、シェスカに行くってわけではないよな？」

片手で机を叩くグレンに動じず、ライアは彼や師の目も見ないで言葉を返した。

「その……まさかです」

グレンが嘆くように額に手を当てて天井を仰いだ。驚いたのは彼だけではない。私も、いきなりの発言に戸惑った。知り合いがいるからって、それがわざわざこの時期に行く意味になるのか理解できなかった。

たった一人、カネル師だけが動揺もなく、姿勢を少しだけ変えながら口を開いた。

「一応、言わなかった理由も聞いていい？」

「危ないって、言うだろうから……」

「そうか」

師は目を伏せて、広げていた地図を閉じて、傍らに置いてあった本に挟んだ。なんだったか忘れたが、地理とはまったく関係のない内容だったことはよく覚えている。そんな状況にあっても、私は「そんなところに適当に入れると、あとで探すはめになりますよ」と言いたくなかったのだから。

「他には？」

「ちょっと、先生」

さっきからどうしてこうもしつこくライアの口を割らせるような真似をするのだ。ここまできるとただの尋問じゃないかと私は進言したものの、師は何の反応も示してくれなかったし、他の二人にも届かなかった。

ライアはもう挙動不審なところは見られず、いつの間にかまっすぐ師を見つめていた。

「休業中だから……」

「そうだね、私だってその二つの理由で止めたいと思っていたよ」

グレンの動作が大きくなる。

「俺だって。ライア、今の状況をわかっているか？ 世間のことも、自分のことも」

「わかっています」

やけにきっぱりとした言い方だった。

「それでも、私は……」

それを聞いて、師は静かに細い息を吐いた。

「私はね、その判断を好ましくないと思っている。もっとはっきり言えば、賛成しない。プリムサズは一応西側だが、あのあたりの治安がいいとは考えられない。わざわざ君を旅に出したいとも思えない。けれど、君の行動について一つ肯定的な言葉が出すとしたら――」

師は私を手にはめて、くるりと回した。

「人間、いつ死ぬかどういう形で別れるかわからない。会えるときに会っておいた方が後悔は少ない、ということかな」

その言葉を聞くやいなや、グレンは一気にまくし立てた。唾が大量に飛んで、生身でそばになくてよかったとこっそり思ってしまった。

「先生、あなた止めるべきでしょう！ ラリア、今は修行に励め！ もう俺が紹介状書いてやるから、ただちに学校に行け。そこでもまれてこい、落ちこぼれて落第して修了が遅れたらもっといい。今のお前なら確実だ！ そうしてシェスカも安定してるころになってから潜りこめ」

「グレン、一応止めてるよ」

「肯定的な言葉とか何とか言って唆さないでくださいということです」

それについてはもっともで、私だってグレンの言葉を支持したかった。

「なぜ反対するのは私が伝える前に、彼女が既に理解している」

両者の視線がラリアに注がれた。

「じゃないと、今日になる前に何か言っていたでしょう」

ラリアは複雑そうな顔をしながら、微かな声で肯定した。

「言えません。だって、私、ここで行ったら……今まで何だったのか」

握りしめすぎた彼女の拳が震えていた。

「でも、先生の仰るとおり。まさに、そのとおり。だって、いつどこで会えなくなるか、誰も教えてくれないもの」

「だからって――」

グレンの声を師が遮った。

「ラリア、行くにしても、道中はどうするつもり？ 何か当てでもあるの？」

ラリアは黙って師をしばらく見つめていた。師も視線をラリアに定めたままで、二人はしばし見つめ合うというか睨み合うというか、無言で相手の出方を窺っている様子だった。

グレンと私は、意志の疎通こそできなかったものの、同じようにどちらかに動きがあるのをただ待っているしかなかった。私はまだいいが、ここに居合わせたグレンは気の毒といえば気の毒だったかもしれないな。私も生きてここに立っていたら、身の置き場に困っただろう。

さて、その膠着状態を破ったのはラリアだった。本当は何も話したくないと言いたげに頷いた。

「一応は」

「……そう」

それまで質問攻めだったわりには、師の反応はあっさりとしたものだった。グレンが何か口を挟

もうとしたが、うまく言葉が出ないようだった。

「先生、行ったら破門になりますか」

ライアの問いに、師は頬を掻いた。

「別に。一度弟子になったら自由にすればいいと思っているよ。独立しようとしまいと、出来が良かろうと悪かろうと、私にとってはみんな弟子だよ。戻ってきてまた勉強する気があるなら、場所は空けておくけれど」

「ちょっ！ それではまるで……」

「落ち着いてよ、グレン。私の言い方も悪いけれど、ただ単にライアのことを考えれば反対だ。それだけは今、しっかり主張させてもらうよ。行く意味はあってもそれが今である必要は、ライアだけを見れば感じられない。むしろ行ってほしくない」

念を押すように、カネル師は語気を強め、すぐに緩めた。というか、少し力が入らなくなったようだった。

「でもね、誰もその人を縛りつけることはできないんだよ。何百年生きていて、それはよくわかっているんだ」

グレンは机を叩いた。

「今！ 今、ここで止めればいいじゃないですか！ 彼女はただの素人に毛の生えた程度の弟子の小娘ですよ？ あなたがなぜ止められないのです？」

必死なグレンだったが、その内容は先ほどからなかなかライアに対して失礼な気がした。しかし、彼としてはなんとかライアを留まらせたかったのだろう。そういう男だ。

私は私で、ここで師がライアをもっと積極的に引き止めないことがなんだか不思議だった。賛成しないと言いながらも、行くなとはっきりとは言わない。

そのとき抱いた感情は「狡い」に似ている気がした。もしも何かライアにあったら後悔しないのだろうか、あの子自身の判断に委ねすぎではないかと。

「先生、俺も行かせない方がいいって思いますよ」

口出ししても、やっぱり無視された。ここで師に意思疎通を拒否されると、私はただの幽霊と変わりがなかった。

ライアははっきりと、私たちにも聞こえるように大きく呼吸をした。それで我々の視線が彼女にしっかりと向いたときに、まっすぐな眼差しで言葉を発した。

「先生、グレンさん。私、行きます」

カネル師は目を伏せた。長い間そうしていた。寝ているのではないか、もうそのまま動かないのではと思わせるほどに。

不意に長く伸ばした師の髪の一房が静かに揺れた。

「わかった」

師の手が少し強めに握られた。ライアは力の入った微笑を浮かべ、深々と礼をした。

「……ありがとうございます」

グレンは顔を歪めて黙りこくった。

「君が帰ってくるのを待ってる。私と……グレン、君もそうでしょう？」

「そりゃあ、帰ってくるのなら」

「じゃあ、決まり」

師はライアに向き直った。

「君の希望に合わせて船の手配はしておこう。こればかりは私がやらないとね。ついでに誰か信頼のおける同行人――」

「それは、いません！」

ライアは慌てて手を振った。

「一人で行きます」

カネル師は一瞬何か言いかけた。しかし、ライアが遮った。

「大丈夫です。さっきも言ったでしょう、当てがありますから」

「信用してもいい？」

「……はい」

師の頬に、長いまつげの影が落ちた。いつの間にか部屋に差しこむ光が鋭くなっていた。

「わかった」

泡のようにすぐに弾けて無くなるような返事だったが、師はそれ以上の追及を諦めたようだった。とにもかくにも、ライアは自らの言葉でシェスカ行きを口にした。こういうときカネル師が必要以上に口を挟まない性格なのは長年の付き合いでわかっていたため、私もそれ以上は何も言えなかった。

「戻ってくる？」

「迎えてくださるのなら。そうしたら、今度こそちゃんと勉強します。そして、立派な医療士になって、弟子として先生の名誉も汚さぬよう人々の助けに」

「別にそこまでしなくていいよ。私の名誉なんてどうでもいい。では、君の居場所は残しておこう」

ライアはほっとしたように笑った。しかし、一瞬、それが泣いているような表情に思えた。師も同じように見えていたかどうかは知らないが。

「まあ、しばらく抜けるのだから、修業はだいぶ後退したところからやり直しになるだろうことは覚悟しておいて。あとは、君が抜けると仕事の進行はちょっと心配だけだね。君の技術は本当に貴重でありがたかったもの。でも、ほら、そこはグレンが補ってくれると期待しておこうかな」

いきなり話を振られたグレンは嫌そうに眉をひそめた。

「先生、俺はあんまりそういうのは」

「だって今度からは君が頼りなんだよ。頼むよ、私もこの歳だから結構きついんだ。頼る相手が減った」

私が死んだ以上、今度は彼が次室となるのは明白だった。次室というのは代々こき使われる運命にあった。師の無茶な言いつけにも問答無用で従わなければならない。いい気味だと私がこっそり言うと、カネル師はにやりと私に向かって微笑みかけてきたので、私は口をつぐんだ。

「先の次室は工房から出たがらなかったし、他人との関係は見渡す限り壊滅的だったけれど、君

はそんなことないからいろいろ頼みがいがあるなあ」

カネル師が明朗な表情を浮かべているその向こう側で、ライアは魂が抜けたような様子だった。

「いろいろ支度しなくちゃいけませんね……。向こうにも報せを送っておかないと」

「そうだね、一応空き時間は多めに作ってあげる。その間に出立の準備をするといい。ある程度進めば、いつ出発できるかの見込みがわかるだろう。そうしたら私に知らせてくれれば、あとは用意しておくから」

こくりとライアは頷いた。

「今から始めてもいいですか？」

「もちろん。ああ、すぐに出て行けて意味じゃないからね」

その言葉に困ったような笑みを浮かべながら、ライアはふらふらと出て行った。それを見計らってから、グレンは口を開いた。

「本当に行かせるのですか？」

「うん……」

「もしも、もしもですよ。あいつが死んだら、あるいは死ぬと同じくらいに辛い目にあったら、どうするおつもりですか？」

カネル師は椅子に深く座り直し、背に重力をかけて椅子の前脚を持ち上げた。木のきしむ音がかすかに響いた。

「そうしたら、行かせた責任を感じるね。それでも」

「それでも？」

「今は帰ってくることを祈って待つことしかできないのさ」

その答えをグレンは気に入らなかったようだ。不満そうな表情を隠さずに挨拶して、乱暴に扉を開けて出て行ってしまった。

残された師は姿勢を元に戻し、細く溜め息をついた。私はしばらく黙ってその様子を窺っていたが、そのうち唐突にカネル師は口を開いた。

「ところで、いい気味ってなんだい、君」

「え、なんのことですか？」

とぼけてみせると、そのまま置かれているところから軽く払い落とされた。ころころと床を滑り、壁の直前で止まった。

「グレンに言ってたろう、さっき。きちんと聞こえていたよ」

「そのままです。死ぬほどこき使われると聞いてね」

ライアの心配をしていたというのに申し訳ないが、この妙な会話がそのときの私にはやけに楽しかった。例えて言うなら、いたずらが成功したあとの反省会をしているときの気持ちというか。

その答えに、師はくだけた笑みを浮かべ、席を立てて埃を払うと私を元の位置に戻した。

「死ぬほどって、君はさんざんこき使われる前に死んじゃったじゃないか。説得力ないな」

「いや、死なない程度にこき使われていたと思いますけどね。もう何もできない存在ですからね。」

せめて何かやらなければならない人のことを笑わせてくださいよ」

「確かに、君は今とても無力だね」

耳が痛い限りではあったが、力がないままこの場に存在しているのは不可抗力だから仕方ない
と思いきむことにした。

「ああ、私も本当に無力だ」

机の上に両肘をついて指をくみ、その親指に頭を押しつける師に何か言葉をかけているうちに
、その日の太陽は沈んでしまった。

ライアの出立は、予想以上に早いものだった。彼女はさほど大きくもない袋に詰めた荷物だけで事足りると言った。部屋もそのまま残しておくという師の言葉に甘えたらしく、身のまわりのものはほとんど置いていくことにしたらしい。

「いいのか？」

不審がるグレンを、ライアはおどけたように鼻で笑った。

「これだからお坊ちゃんは。荷物を運んでくれる召使いもいなければ、安全に送り届けてくれる優雅な馬車もないんですよ。いざというときにすぐに自分で抱えて走っていける荷物だけ。それが庶民の旅の基本です」

むっとするグレンを見ておかしようにライアは忍び笑いをした。

「そうだ、グレンさん。そういうわけで、あまり本を持っていけないんです。二つ持って行くならどれがいいですかね？」

「二つ？ 最低でも二十は」

「私の話もちゃんと聞いてくださいよ。十冊もこれには入りませんよ。それに、もしまとめて盗まれたりなんかしたら、私、一生働いても返せません」

そう言われてむっとしながらも、わざわざ書棚にあるもの一つ一つをじっくり眺めて吟味するグレンは、なんだかんだ言ってやはり面倒見のよい男であった。工房の他の弟子たちはライアを遠巻きに見ているだけで、グレンを介していくらかは話すことがあっただろうか。あとは残りの仕事のときか。

見たところ、出発を決めてからのライアは変にうろたえたりせず、空回りすることもなく、粛々と回された仕事をこなしていた。むしろ私やコリンがいたころよりも冷静だった。静かに集中して、作業する自分の指先をどこか淡泊な目で見つめていた覚えがある。

師はあれほど彼女のことを気にしていたというのに、あの日以来は放任するようになり、同じ部屋にいても絡むことは少なかった。二人が再びきちんと会話をしたのはライアが発つ前々日だったと思う。師が彼女を自分の部屋まで呼んだのだ。

「いよいよ明後日だね」

そう師のほうから声をかけると、ライアは薄く笑って応えた。

「おかげさまで。先生」

改まった声で師に呼びかけたライアは唇を震わせながら静かに頭を下げた。

「ごめんなさい、ありがとうございました」

「どうしたんだい、いきなり」

「私は、わがままだから、いつも、いつだって勝手なことを言って」

師は苦笑しながら肩をすくめた。

「まだ一回くらいしか君は私にわがままを言ってないよ。最初にここに来たときだけだ」

「いえ、もっとたくさん言ってしまったと思います」

カネル師は自嘲気味に首を横に振った。

「ごめん、そうだったら覚えてない。もう歳だからさ。だからもしまづいことを言ってしまったと思っているなら忘れてしまう方がいいよ」

そうやって都合のいいときだけ年寄りぶる。私がそう言ってやると、師は私を手首にはめたまま、自分の太ももに打ちつけた。そんなことをしても痛覚なんてないのに。

ライアは困惑しながらも少しだけ気持ちを緩めたようだった。

「なら、お言葉に甘えて。では、これが二つ目ですね」

「何が」

「出ていくこと」

カネル師はやや間をおいて口を開いた。

「ライア、何度も聞いている気がするけれど、戻ってくる？」

その問いに、ライアはとっくに慣れきったようにすぐに答えを返した。簡単な答えだった。

「はい」

そのあとライアは何か続けようと少しだけ唇を動かしたが、止めてしまった。二人はしばらく、窓の向こうの微かな潮騒を聞いているようにお互い黙っていた。

「ライア。船で最初にシェスカに着くとしたらアブファムだろう？」

アブファムは、シェスカ大陸の中でもアールヴに最も近いランデンドという国の港町だ。エアトンからシェスカに向かうとしたら、まずはアブファムに向かう者も多い。

「港ですか？ はい。まあ、おそらく即日か遅くとも翌日には、また別の船で出港すると思いますけど」

ん？ ああ、またあとで話すが、ランデンドはそういう港だ。たくさんの船が頻繁に出入りするから、どんなに長くても一日待てば乗り換えられるんだ。当時、既にそういうものがあったんだよ。

師は顎に手を添えた。

「すまない、一つお使い頼まれてくれないか」

ライアはきょとんと差し出された手紙を見つめた。

「あの町にハロルドという男がいる。私の最初の弟子のうちの一人だ」

その名前が出た瞬間、私は魂がしめつけられるような思いになった。

「彼の家に行けば、きっと旅の役に立つ何かを得られるだろう」

「え、でも」

「手間かけるけど、寄ってくれないかな？ 単純に私が彼に用事があるんだ」

師は一枚の紙を取り出してさらさらと何か書いて体裁を整えると、ライアに手渡した。赤の封蝋に、師を表す刻印が浮かび上がっていた。

「よければ、ついでに届けてくれないか。彼ときたら、まったく返事をよこさない。私が怒っていたと伝えてくれたら嬉しいな」

ライアはためらいながら受け取るのを見て、師は安心したような素振りを見せた。

「悪いね」

「いいえ。その人のこと、話には聞いていますから、私も会ってみたかったですし」

伏せた目でライアは笑った。

「ついでに、先生。私からも一つお願いがあります」

「なんだい？」

「隣のお部屋……開けていただきたいんです」

師の部屋の隣といえば、つまりは私の部屋だったところ、ライアがコリンとさんざん入り浸って騒いでいた場所だ。その一日か二日前から鍵がかけられ、他の弟子たちが入れないようになっていた。

「忘れ物？」

師がこう尋ねたのは、おそらく彼女らの私物があちこちに置かれていたからだろう。

ライアは首を傾げながらも頷いて、師は立ち上がると同時に手をかざして次室の鍵を開けた。私には鼻も口もないが、入った瞬間に埃っぽさを感じた。人間の出入りがないと空気は目に見えて淀むのだな。あの嫌な息詰まりが自分の記憶を通して蘇り、私は押し黙ってしまった。

ここにライアの姿があると、自然とコリンの姿も探してしまった。どこにもいないということを知っていても。ライアもきっと同じだったのだろう、部屋を見渡すと悲しげな息を漏らした。

彼女は棚に並んだ品々をいくつか手にとって眺めていた。それは彼女自身のものだけでなく、コリンの所有物であったり私が使っていたものであったりした。

「これ、持って行ってもいいですか」

不意にライアが持ち上げたのは護符の一つだった。彼女の修行の最初期に、ライアへの製作の課題にした覚えがあった。最初、私はそれがあの子が作ったものだと思った。しかし、よく見ると、細部から私が手本として先に作って渡したものだとうかがった。

元々ライアの方が器用だとはいえ、このころはまだ彼女の魔法についての素養がまったく足りていなかったもので、まだ私も指導役として面目を保っていた。これより数回の課題を経て、私は隠れて基礎を学び直すはめになった。

「ライア、それじゃなくて、その隣にお前のがあるだろう」

そう声かけても無視された。聞こえるはずがないのだから仕方ない。代わりにカネル師が彼女に声をかけた。

「次室の作ったものだね。指導者としての彼のやる気が不足していたことがよくわかる」

「先生、それはないでしょう」

私は一応抗議した。確かに新入りの指導なんて他の弟子にやらせればいいのにと思っていた時期ではあったが。

「コリンがまだグレンさんのところにいたから、私と兄さんの一対一でしたね。まだお互い警戒心があって、何をしてもぎこちなくて。でも」

ライアは窓を開けた。泥を水で流すように、清浄な外気が室内になだれこんできて少し眩しか

った。彼女は護符を陽光にかざした。

「私、これが好きなんです。あのときの兄さんの貴重な自己紹介ですから。自分のこと、あの人は全然話そうとしませんでした。皆さんそれぞれ得意分野があるようですけれど、次室さんはどういことをするんですかって言ったら、これを押しつけてきて」

「私の躰が足りなかったね。こんな、人を選ぶようなものじゃなくて、誰でも簡単に動かせるものを作ればよかったのに」

いちいち師の言葉が突き刺さった。本当はこの人、私がこの場にいることを忘れていてのではないかと思うほどに。

「結局、私のは形が一緒でも全然護符としての効果は出ませんでした。あとで別の先輩に聞いたら、こんなの次室じゃないと無理だよって。嫌がらせじゃないかって思いました」

え？ わざとではないよ。疑うなよ。

ライアは、何が違うのかわかったときは詐欺だと思ったとかなんとか、護符をいじりながら散々ここに存在しないはずの私を笑顔で責めたあとにこう加えた。

「兄さんがどういう人なのか垣間見える出来事でしたね。あんまり印象のいい話ではないんですけど、あとになればなるほど、兄さんらしい話だと思いました」

カネル師は天井を仰いで色々思いを巡らせるような仕草を見せながら、なるほどね、と小さく呟いた。

「だから、自分ではなく兄さんのを持っていきたいんです。身を守るため……というよりも、私のために」

その言葉でようやく私は自分の方が思い違いをしていたことに気づき、決まりが悪くてつい黙り込んでしまった。そして、自分のためという彼女の言葉を、もう少しきちんと受け止めるべきだったと後に悔んだ。

無論、ライアはそんな私のことなど知る由もなく、まだ棚を物色していた。それは私こそが部屋の主だからよくわかったさ。彼女が見ているのは、コリンゆかりの品だってことはな。

コリンと一緒に作った品々、よく使っていた道具、何かの拍子に私たちに分けてくれた嗜好品、そういった物を眺めていると、あの部屋の思い出が浮かんできた。その前の十年の孤独を無にするような、賑やかな一年だった。

ライアは何か小さなものをつかむと、師に向きなおった。

「では、これとこれは持っていきます。二人なら……きっと見守ってくれるのでしょよね、私が行って帰ってくるまで」

陰を含みながら笑うライアはどこか自虐的だった。少し前までは無邪気にコリンとからかいあっていたのに、当時の私にはあの日々がやけに遠く感じた。

「ライア、二つ持っていくというなら、もう一ついいかい」

唐突に師がそう言い出すものだから、ライアはきょとんと目を丸くした。師は私を彼女の目の高さまで持っていった。

「これもハロルドに」

思いも寄らぬ発言に、私は驚きの声をあげた。二の句をつげないままわけのわからぬ言葉を発

しているうちに、ライアはきょとんとしながらも頷いてしまった。

「よかった。これはまだ少し時間があるから調整したい。さっきの手紙も書き直すから、出立のときに改めて渡そう」

師はライアから手紙を返してもらおうと、彼女を連れて自分の部屋まで戻り、適当に話を終わらせてライアを退室させた。

「先生、渡すって、いったい、その」

私があいかわらずきちんと文章として言葉を発せないでいると、師は積み上げた本の上に私を置いた。そして、金の瞳でまっすぐ私を見つけた。

「言ったとおりだよ。彼女に連れて行ってもらおう」

「いったいどうして」

「賭けたいんだ」

返してもらった手紙を惜しげもなく破り、新しい紙を取り出した師は、ペンをくるくると回した。

「賭け？ 何を言って」

「ああ、そうだ。これは賭けなんだよ、次室。長い人生で三回目の賭けだ」

今となっては、長い人生で三回目というところに言及したほうがよかったかもしれないが、あいにくそんな余裕はなかった。

「別に、俺は先生に一から十まで頼るべきとか、そんなことは思っていない。けど、急にそんなことをなんでそんなことを言い出すんですか」

尋ねたものの、師は黙ってしまった。

私は途方にくれてしまった。この身は言葉しか使えない。師の肩をつかむことも髪を引っ張ることも頬を叩くこともできないのだ。それなのに、唯一私に残っている言葉を無いものにされると、どうしようもなくなってしまうのだ。

「ライアは俺がこんな姿になっているとも知らないんですよ」

師はようやく返事をよこした。ただし、私の方は見ないで。

「うん、わかってるよ。そして、私は今後も言わないつもりだ」

「それで俺をあいつに預けるんですか？ いったいどうして」

疑問符の洪水で思考は決壊寸前だった。私はカネル師がどうしてそんな無謀に無茶を重ねたことをするのかまったく理解できなかった。

師は苦い顔をして、私に向き直った。

「私は当分動けないだろう。けれども、君にはなるべく早く外を見てほしいんだ」

そんなにさっさと厄介払いしたいんですか。そう言うと、違うと弱々しく笑った。

「君は孤独かもしれないが、私と離れることで見えるものもあると思うよ」

こういう状態なので、私には自分の身の振り方を決定する権利など無きに等しかった。

師の言うことにまだ完全に納得できてはいなかったが、私は了承するしかなかった。そう返事をする、師は安堵した表情をわずかに浮かべた。

「君、ライアを頼むよ。あの子はとても危ういから、そばに誰かいた方がいい。どうか見守って

いてくれないか」

「……俺は、見ているだけしかできませんよ」

師は力なく笑った。

「それでもいいんだ」

そうして私の出立は、唐突に未消化のまま決められたのである。外の世界を見てほしい、と師は言った。こう告げられると私が工房から一步も外へ出たことがないようにお前は思うかもしれない。けれども、実はまだカネル師の弟子入りして日が浅いころは、件のハロルドさんに連れられてよく旅をしていたんだ。

そんなに広範囲ではなかったけれどな。魔法の素材や職人との交渉に立ち会ったんだ。私が晩年、そういう仕事をほとんどやらなかったから特別に聞こえるかもしれないが、そういうのは本来、魔法使いとしては基本の仕事だよ。

確かにあのころが懐かしく思ったな。だが、それは外の世界がどうのというわけではなくて、ハロルドさんに対して感傷的になったんだ。私が工房に入ってから親のように接してくれたが、結局、あの人がシェスカに帰ってからは手紙一通のやりとりもなかった。私が……私の事情で拒んだんだ。別にハロルドさんに何の非もないよ。

「そうだ、君の貯えはライアの旅費にしよう。それがいいね。私の見立てではだいぶ残されていると思うのだけれど」

悪戯っぽく師は片目をつむった。まあ、見立ても何も、私が金を使うことなどほとんどないことは師も前々からよくわかっていたはずだが。

「居候迷惑料をさっ引いてもまだまだあったらろう？ ああ、君って本当にいい兄弟子だ」

「コリンの分まで言い出さないあたり、先生もいい師匠ですよ」

軽く言葉に出したあと、私は自分の肉体のどこかに小さなとげがささったような気分の悪さを味わった。彼はいない。自分のように人知れず存在しているのではなく、本当にいなくなってしまった。言葉にした途端、空虚が広がった。

「ああ、そうだね……」

私の沈黙に寄り添うように、師は瞼を閉じた。

私が考えても考えてなくても時は過ぎ、人々はそれぞれのやるべきことをする。それは、千年前でも今でも変わらんな。

カネル師にときどき話し相手になってもらう以外は退屈な時間がようやく終わった。ライアの出立の日になったのだ。

ライアは私の墓に花を供えて祈ってくれた。安らかに眠るどころかすぐそばにいたわけで、この立場では奇妙な光景に思えてしまった。

「次室はちゃんと見守ってくれているよ」

師が彼女にそう囁いた。ライアは頷こうとしたが、瞳をわずかに動かした。

「コリンは……どうでしょうか？」

もちろん彼も、とカネル師は答えた。ライアは師を見上げながら唇を軽く噛んだ。そして、膝についた土を払い、丘を下る道へ向かった。

港まで見送るのはグレンだけ、わざわざ工房の外に出て別れを告げるのも師を含めて三人だけだった。あとの弟子たちはすれ違えば挨拶くらいする程度に軽いものだったよ。

師は私を手渡した。ライアはそれを大事そうに受け取ったが、中身は私で申し訳なかった。ああ、一応エヴァムとヴィーエもいたか。

ふいに師は一度私を自分の手に戻して、ライアの腕にはめた。

「先生？」

「こっちのほうがいいな。ハロルドに渡すまでは君が身につけててよ」

師は寂しそうに微笑む。

「じゃあ、ライア。くれぐれも気をつけて」

彼女の手を握りながら師は私へと視線を落とし、頼んだよと小声で呟いた。

「はい」

私よりもライアが先に返事をした。おそらく、これをハロルドさんにきちんと渡すようにという意味合いで受け取ったのだろう。

「別に、今になって行かないって選択肢でもいいんじゃないか」

グレンは変わらず不機嫌そうだった。ライアは苦笑して、首を横に振った。

「では、行ってきますね」

ライアは手を振って、グレンと連れだって丘を下る道へと進み出た。

まだ直っていない工房の屋根や壁を見て、私は急に名残惜しい気持ちになった。本気で、ずっとここで生きていくのだと思っていたんだ。人生の大半を過ごしたあの建物から、自分は今去っていく。哀愁が心に湧いてきた。

だから私は、ライアの真似をするように言ったのだ。

「行ってきます」

その言葉に気づいてくれたのは、師だけだった。心配と期待が交じった顔で手を振ってきた。そうして私は、十年以上も世話になって暮らしていた工房からひっそりと去ったのであった。劇的でも何でもない、妹弟子の付属品として――ただの物として。

二人はゆっくりと丘を下った。祭りがとうに終わって静かになった港では、私が生きて外に出たときには気づかなかった、不思議な光景があった。服も肌も汚れた物乞いたちやそれを取り締まる軍人たちが目立っていた。のちに私は、彼らがシェスカからの難民だと知った。

「規制ももう限界だろう。これからこっちに渡ってくる奴らが増えるんじゃないか」

顔をしかめながらのグレンの言葉に、ライアは薄く笑った。

「今でも思ってるでしょ。私が馬鹿だって」

「ちがう、大馬鹿者だと思っているんだ。まともな頭の持ち主とは思えないな」

突然ライアは吹き出した。その意味がわからないグレンは少し慌てた様子だった。

「それ、グレンさん、最初のときも言った」

「最初？」

「弟子入りさせてくださいって頼んだとき」

グレンは複雑そうに視線を逸らした。

工房にも色々あるが、うちの工房は入った時点で既に最低限の能力を持っている人間しか入れない決まりがあった。カネル師が決めたことだ。王と決別して王家の子どもの教育係を辞したとき以来、他人の面倒を一から見る気が失せた、とか。そのあと、「まあ嘘だけどね」とすぐに付け加えたから、真相はやっぱり不明だった。

この時代から既に魔法教育を専門に行っている学校もあったことだし、学問を修めてから魔法職人として工房に所属する場合も珍しくなかった。それでも、まだ七割近くは最初から工房に入って魔法を学んでいたのではないかな。

ライアがうちで異端だったのは、教育を前もって受けていなかったことだけでなく、工房で勉強したあとは医療士の学校に行きたいと主張したことだ。

彼女はそれまで魔法とは無縁の生活で、医療士になるには前もって魔法使いとしての修行が必要だという情報だけ入手していた。ライアも、自分のような身分の人間が中途半端な経歴を持っているだけでは門前払いとわかっていたらしい。どこか名のある工房で修行して、生まれつきの遅れを取り戻そうとしたらしい。

まあ、実際は医療士の学校に入るのもうちの工房に入るのも同じような条件で驚いたらしいが。こっちだって、身の程知らずがやってきたと大騒ぎだったよ。

グレンとライアは歩きながら、わずかな思い出を辿っていく。ライアが修行のあれこれを語っていると、ふいにグレンの顔が曇った。

「俺は……あいつらが嫌いだった。次室は、さんざん先生からも兄弟子からも出入りの職人からも可愛がられていたのに、そういうの全部切り捨てて、工房の中に閉じこもって人を遠ざけて。それなのに先生は相変わらずあいつには甘いし。コリンは、俺の実家でもお目通りがかなわないような大貴族で、都に籠もっていればいいものをわざわざ魔法使いになるし。俺が指導役だったのにお前に対抗して、自分も次室に見てもらいたいとか言い出すし」

グレンは淡々と語ったが、コリンが自分の指導から外れたくだりになると、やや拗ねたような口調になった。

「絶対あいつら苦労するだろうと思って眺めていたら、何だか二人とも次室とうまくいくし」

「あら、実際苦労したんですよ私たち。だって、最初はすごく暗くてとっつきにくくて、グレンさんの方がまだ良かったかもって思ったくらいなんですから」

これも耳が痛かったが、ライアの言葉に反応したグレンの様子がおもしろかったので、流すことにした。

「『まだ』ってなんだよ。俺の方がずっと親切だぞ」

ライアは声をあげて笑った。

「そうですね。あのとき最初に対応してくれたのがグレンさんじゃなかったら、私、今ごろ工房にはいなかったと思います。グレンさんって口と愛想が悪いだけで、実はいい人ですよ」

「なんだよ」

彼はむっとした様子だったが、照れを隠すように視線を逸らした。ライアよりも私の方が付き

合いは長かったのに、彼がこういうような態度を取ってきたことは一度もなかった。

「でも……兄さんもいい人でした。少なくとも、私とコリンにとって」

コリンの名前を呟くたびに、ライアは喉に引っかかるような声になった。長い沈黙のあと、彼女は一瞬で布に染み渡る滴のような声で呟いた。

「ずっと、このままでいられたらいいのになって、そう思っていました」

グレンは対応に困ったような表情を浮かべたあと、そっと彼女の肩に手を置いた。

「いつかはお前も医療士の学校に行くだろうし、コリンも都に帰っただろう。次室はずっとあのまま引きこもりだっただろうが、お前たちもいずれは変わっていくものだったんだ」

グレンが言い終わると同時に、二人は港に着いた。馴染みの人間に手配してもらって、ライアは客船に乗せてもらえることになっていた。

最後に乗りこむ客として渡し板を歩いていたライアは、一度立ち止まって振り向いた。

「グレンさん、どうもありがとうございました！」

彼女が背伸びして手を振ると、グレンも大きく振り返した。

「行ってこい。気をつけろよ、お前無鉄砲で危なっかしいからな！ またな！」

船は静かに動き始めた。ライアは岸が遠くなるまでずっと手を振っていて、グレンもその姿が小さくて確認できなくなるまでずっとそこにいた。

「また、か……」

エアトンが遠ざかるとライアは軽く溜め息をつきながら言い、身体の向きを変えた。

「ライア」

私は呼びかけてみたが、返答はなかった。彼女はただ、シェスカがある東の水平線に視線を向けていた。

エアトンから出港し、船はコスモス諸島を進む。まあ、シェスカに渡るなら必ずあそこは通るな。海に散らばる島々を見つめながら、ライアは何を思っていたのだろうか。

船内には、他にもシェスカに渡る客たちがいた。沿岸部に住む身内に会いに行くという者、一度はグランリージに逃げたけれども終戦の報を聞いて戻ることにした者。ライアは加わらなかったが、そういった人々は輪になってそれぞれの身の上話をしていった。そんな類の話題は盛り上がるもので、彼らは飽きることなく、戦争と自分たちの身に起きた不幸を語っていた。

難民生活だったがようやくシェスカに戻れるという女性が、ふと溜め息をついた。

「私ら西側はまだいいよ。アールヴなりコスモスなりに逃げこめるんだから。東側は可哀想だよ。北と西は敵の領地、南は氷だらけ、東に行けば遭難確実の海が広がっているだけなんだ。逃げ場がまったくない」

その言葉を聞いて、隣の男が舌打ちをして立ち上がった。

「おい、ばあさん。俺たちの家や畑を散々荒らしまくったシェスキのクソ野郎どもに同情しようってか？」

「私が言っているのは、東の民のことだよ。国は悪いかもしれないが、民に責任はないだろう？」

」

「民が集まって国だろうが！」

こういった話は、入れ替わり立ち替わり誰かしらしていた。

あの戦争は、凍った大地しか持たない南の大国シェスキが周囲の国を煽って、西へ北へと進撃したことで始まった。その結果敗北して、国内でもまだまともな領地を戦勝国側に取りられ、あとは飢えて全滅するしかないと言われていた。

その身の上にひそかに同情する声もあれば、いかなる理由があろうと侵略という罪はけして許されることではないと主張を曲げない人間もいた。

「こういうときこそ、カイ様みたいな人が必要なんじゃないの。あの方がもう少し生きて、世界統一が進んでいたら」

彼は……今では認知度が低いのか？ それは残念だ。もっと広く教えればいいのに。私が生きていたころなんか魔法使いでなくても常識だったんだが。

カイは、歴史上初めて世界統一を目標に掲げて実行に移した魔法使いだ。こうした国家間の争いがあるたびに、よく名前が出てくる存在だな。この時点でも、八百年ほど前の人物になるのか

。

彼は志半ばで反逆に遭い、不幸な最期を遂げたため、大きな統一構想のうちの一部しか成し遂げられなかった。すると、もし彼の失脚がなかったらと考える人間が出てくるのだ。実際、言葉が通じるようになって一部の共通認識を持ったところで、壁が完全に取り除かれたわけではないから、彼の死の直後からこの仮定がよく持ち上がった。

国の争いに苦しむ人々にとって、カイはある意味神聖化された存在なのだな。中には、神に准じる者として彼を祀る者もいたな。全歴史においても、三本の指に入るような魔法使いであることは事実であろう。もしも彼がこの世の中を見たら何というか、私も気になるところだよ。

「ふざけるなよ、世界統一なんてしても意味ないだろ。現に、言葉が通じても人は争いをやめないし、国同士が決まりを作ってもどうせ破られるじゃないか」

「ああ、マティアスのことかい」

「まずはシェスキだろう」

人々の言い合いに、ライアは憂鬱そうに顔を歪めた。そして、逃げるように荷物を持って甲板へ上がった。

遠くの水平線へ日は沈みかけていた。アールヴからだとシェスカは近いからな、そのころの船だと四日か五日もあれば到着するはずだった。

ぽつぽつと、コスモスの島々に灯りがともりはじめた。まるで海上に星空が出現したようだった。かつて目にしたかどうかももう忘れてしまったそれを眺めながら、私は切なさを感じていた。慣れ親しんだエアトンがどんどん遠ざかっていく。たったそれだけのことなのに、どうしようもない寂しさを覚えた。

ライアは積荷に寄りかかって、グレンが選んでくれた本を一冊広げた。それは、もしも私の言葉が通じたなら同じように勧めたかったものだ。ライアはぶつぶつと復習を始めた。

「ライア、今だったら一つ先の章を見るといい。そこからで問題ない」

期待していたわけじゃないが、返事もなければ、彼女の指が私の示した場所まで紙をめくるともなかった。

予定よりもいくらか遅れて、船はアブファムに到着した。港に降り立つと、ライアはシェスカの空を見上げて目を細めた。

アブファムは、当時のシェスカ大陸南西岸の中で最も栄えた町の一つだ。大きさはエアトンと同じくらいだろうか。あの時代の港では群を抜いて出入りする船の数が多かった。現代にもひけをとらないくらいだ。多くの場所から船がやってきて、またあちこちへと出ていく。海を眺めているだけで面白い場所だったよ。

アブファムには大きな商会在二つあった。双方ともに多数の船を抱え、それらを交代させつつ絶え間なく外へ送りだして稼いでいた。同じシェスカ南西岸はもとより、グランリージやコスモス諸島も近いからな。遠方まで行かなくとも商いの目はたくさんあった。

ライアが港の片隅で休憩していると、ちょうど彼女が乗るはずだった船が出ていくところだった。赤と紺の二色に染められた旗がばたばたと激しく風になびいていた。何も用事がなければ、すぐにここを去っていたはずだ。しばらく無言でそれを見つめ、だいぶ小さくなったころ、彼女はその場をあとにした。

私ははじめ、アブファムも戦で荒れているものだと思っていたから、想像以上に綺麗なままであったことに驚いた。一応、東の盟主国シェスキとは、大陸の端と端になるからな。西の海に向こうにあるアールヴは同じ西軍側、南の海は進軍に向いていない。内地に比べたら戦火が届かなくても不思議ではないか。

ライアはあちこちで通りすがりの人間を捕まえては道を尋ねていた。こういうところで物おじせず且つ尋ねる相手を見極めていた彼女にひそかに感心してしまった。よく考えれば、ライアのほうが私なんかよりもずっと世間について知っていた。その事実を忘れていた。アブファムに来たことがあるかはさておき、シェスカ自体には既になじみきっているようだった。

しかし、当てはあると言ったものの、彼女は一人だった。特に誰かと落ち合うこともなく、別の土地に人を待たせている気配もなかった。その場しのぎの嘘を咎めようなんて思わないさ。ただ、心配だっただけだ。いったいこれから先どうするのかと。

港から歩いてどれくらい経っただろうか。我々は職人街に出た。明るい色の煉瓦の屋根、白い壁、組まれた木の深い色。美しい街並みに感嘆の息がもれそうになったものの、どこか侘しさがあつた。港はまだ活気があつて人も多かつたが、ここは閑散としていた。本来ならば大きく開け放たれているはずの扉も、閉まっているところの方が多かつた。

ハロルドさんは有名なのか、名前を出しただけで具体的な場所を教えられたこともあつた。しかし、そういう相手は口をそろえて言った――今はいないはず、と。

不安そうな顔をしたライアは、確かめるように教えられた場所に向かい、そして立ち止まった。ハロルドさんの工房は見るからに主がいなくなって久しいとわかるほど荒れ果てていた。壊れ

かけた扉が開いており、覗いてみる。空気中に細かな埃が舞っていた。少々薄暗くはあったが、昼間だったおかげで室内の様子は窺えた。

元は繁盛していたのだろう、工房内は小さいながらも細々としたものまで揃えていて充実していた。どれも薄く埃をかぶってはいたが。かつては賑わい、あの人が忙しさをぼやきながらも笑っている様子が簡単に想像できるからこそ、今に寂しさが強調されていた。

「ハロルドさんに何か用？」

ライアは肩を跳ねさせる。周囲に目をやると、彼女とあまり変わらない年齢の少年が、ひょっこり隣の家屋から顔を出していた。ライアは呼吸を整えた。

「ここのご主人に届けたいものがあるの。その人の師匠から預かってきたんだけど、いらっしゃらないの？」

「ずっと前にいなくなったよ」

少年はそっけない言い方だった。

「外の人？ 戦争で魔法使いが徴集されることになってね」

ぶっきらぼうに告げる彼の言葉に、ライアよりも私の方が青くなる心地だった。まさか、戦場に送られたのかと。

「あの人はそういうの大嫌いだから、兵士が来る前にここを離れたんだよ。帰ってくるって言ってたけど、いつになるか」

その答えにほんの少し安堵した私の存在なんて知らずに、少年は口をとがらせて、「魔法教えてもらうはずだったのに」と小さくこぼした。あの人は面倒見のいい人だったから、ここでも子ども相手にいろいろ世話をやいていたのだろう……幼い私にもそうしてくれた。

「それ、いつになってもいいなら渡しておくけど」

私が感傷に浸っているそばで、ライアは手紙と少年を見比べながら悩んでいた。

ハロルドさんが戻ってくる保証はない。このころはまだ、行方不明になった人物と容易に連絡を取れるような手段はまだ確立されてなかった。ここで待つか、自分で探しまわるかだ。

「私、中身知らないの。ここで渡してもいいのかどうかも」

カネル師はこの状況を何も知らなかったのか、知ったうえで託したのか。それは私でもわからなかった。師がハロルドさんのことを言ったときは健在であると認識しているような態度だったが。

少年は不機嫌そうに一―もしかしたらそれが地顔だったのかもしれないが、ライアを見つめながら黙って立っていた。

「ライア、帰ってくると言っているのなら渡してしまってもいいだろう。どうせハロルドさんがいても、あの人が受け取ったまま放っておくこともあるだろうし」

この声が届かないとわかっていても、私はつい口を挟んでしまった。もちろんライアに聞こえるはずもなく、彼女は無言で考えに耽っていた。

「ニール、まだ？」

少年が出てきた家から、別の少年が顔を覗かせた。そして彼は、ニールと呼んだ自分の友人とライアを、目を丸くしながら交互に見つめた。

「あれ、女の子？」

「隣に届け物だってさ。ほら、ハロルドさん。フェリクスも色々と世話になったろ？」

ニールの言葉に、フェリクスという名らしい少年は手を叩いた。首にかけられた飾りの鈴が、わずかに音を立てた。彼は不思議な空気を身にまとっていた。

「ああ、ハロルドさんか」

フェリクスはライアに笑いかけた。

「もしかして、そのためだけに来たの？」

「いいえ、元々アールヴのエアトンから別のところに行くために出てきたの。アブファムに寄るついでに頼まれたのよ」

「だったらニール……彼に預ければいいよ。万が一ここで渡さないですれ違ったら難儀じゃない」

思い返してみれば、ここの会話は、自分を壊してくれる人間を探すことになった私に少し共通する部分があるな。まあ、私の場合は後に大当たりになったわけだが。

「でも」

「大丈夫、信用できるやつだから。ハロルドさんには恩があるしね」

少年たちは顔を見合わせた。

ライアは逡巡したあと、おずおずと手紙をニールに渡した。ニールはうさんくさそうに表書きの文字をひっくり返しながらかめて、ゆっくりと頷いた。

「お願いします」

簡単に挨拶すると、ライアはそのまま港に向かった。少しの間を置いて、少年たちが何やら呼びかけてきたが、ライアは振り向かなかった。そのまま足の速度を速めて振り切った。

その日は運が良く、見送ってしまった船以外にもう一つプリムサズの方へ向かう船があることを、ライアは到着直後に確認していた。彼女はもうそのまま出立するつもりでいたようだ。私はハロルドさんの不在に若干後ろ髪を引かれる思いだったけれども、何もできないこの身にはこの町に一人留まる権利などなかった。

ライアが戻ってくると船乗り場は騒然としていて、遠くの空も人々の表情も暗かった。

「あの、船は……」

ライアは近くにいた船乗りの青年に尋ねた。彼は首を横に振って告げた。

「しばらく出ないよ」

「え、どうして？」

船乗りは海の彼方を指した。

「急に天候が変わって大荒れだ。このあたりだと昔からたまに起こるんだ。前触れなんて一切ない。コスモスの気まぐれって言われているんだけど。ああいうときは何日か続くだろうから今はどうとも言えないよ。それよりもちょうど当たってしまった仲間たちが心配だ。まったく、そもそも無理があるんだよ」

男の愚痴も耳に入らない様子で、ライアは陰っている水平線を見つめていた。

「私、本当はさっき出た船に乗ってたかもしれないの」

「それは運がいい。乗ってたらきっと巻きこまれていただろうさ」

まるで自分の妹を労るかのように、青年はライアの頭に軽く手を置き、荷物を担いで行ってしまった。

ライアは溜め息をつき、その場にあった適当な荷に腰かけた。これからの旅路をどうするか考えていたのだろう。宙に地図を描くような仕草をしながら、私にも拾えないような小さな声で何かを呟いていた。

「ライア。船が永久に出ないわけではないだろう。宿を取って、悠然と構えておけばいいんじゃないか」

声をかけてみたが、やはり届かなかった。まあ、もしも私が人間として側にいても、当時は世間知らずにもほどがあった。たいして役には立たなかったろうな。

足下の影に目をやりながら一人悩んでいたライアは、何度か瞬きを繰り返して急に顔を上げた。そこには、さっきのフェリクスがいた。

「港に向かったようだから、嵐のこと言いにいこうと思って」

フェリクスは、きょろきょろとライアの左右に視線を動かし、首を傾げた。

「君、一人なの？」

「ええ、まあ」

驚いた表情のフェリクスは頭を搔いた。

「本当に？」

「本当に本当よ」

今度は呆れたように息を吐いたフェリクスに、ライアは少しうんざりした表情を作ってみせた。

「嵐のことはもうわかっているから」

「いや、あの……君はどこかのお嬢さまってわけではないよね？ 使用人もいないってことは」

ライアは自嘲気味に言葉を返した。

「お嬢さまなんて。親もいないどころか、つい最近まで流れ者やってたような人間よ」

「それにしても世間を知らないにもほどがあるんじゃない？ ここは戦火が及ばなかったとはいえ、もっと北や内地は荒れていて、とても女の子一人で旅できるような場所じゃないよ」

フェリクスよ、それについては彼女は既に散々言われてきたのだよ。そう言いたかったものの、どうせ届かないだろうと私は黙っていた。

「僕と父だって旅しているけれど、このご時世で動けないことだってよくあるのに」

「私には目的があるし、危険については承知しているわ。言われなくても」

ライアは荷物を持って移動しようとした。それをフェリクスが彼女の袖を引っ張って慌てて止めた。

「とりあえず、さっきのニールの家に行かないか。じきにここも嵐が来る。どこか中に入るべきだ」

逡巡の末、空模様を確認したライアは立ち上がった。

「ありがとう。でも、宿を探すから」

荷物をつかむと、彼女はフェリクスから逃げるようにつかつかと町中へ進んだ。フェリクスが心配そうにこちらを見ていたが、彼女は無視した。エアトンにいたときの彼女なら素直に親切を受けただろうが、一人で旅をしている身であるので、警戒心を強くしなければならなかったのだろう。

人の出入りが激しい港町だから宿も十分にあるはずだが、戦で閉めたきりの場所が少なくないことと、ライアのように突然の悪天候で出発できずに足止めをくらう羽目になった人間が多いことで、かろうじて開いている宿はどこも満室だった。

「別に倉庫でもいいんです。雨風がしのげる程度で私は平気なので」

「そこももう限界なんですよ。通常の客室ですら一等の客が入りきらないくらいですから」

宿の主人は頭を掻きながら帳面をまくっていた。

「今、町の住人にも宿貸しの協力を仰いでいるんです。うちよりも取締のところに行った方がいいですよ」

細かい部分は違えども、交渉した宿の者は口を揃えてそう言った。仕方なくライアが最後の宿を出ると、すでに小雨がぱらついていた。濃い灰色の空の向こうから黒い雲が静かに迫ってきており、ライアは小走りで教えられた場所に向かった。

陰鬱な色彩の景色には、町の者でも単なる旅の者でもない様子の人々が、あちこちにひっそりと隠れるように座りこんでいた。粗末な衣装をまとって数人で固まっている姿は、小動物を想起させた。

ライアは彼らと出会うたびに、一瞥してはためらうように進んでいった。雨粒が彼女の前髪から頬、あるいは鼻を経由して頬へ流れて落ち、他の滴と同様に地面に跳ねた。

取締役だという男のところは人で溢れていた。使用人なのか船乗りなのかそれとも町の有志なのか、幾人かの若者が声を張り上げて、来訪者たちをさばいていた。

ここで話を聞くに、町の有力者の屋敷に最上級の客をあてがい、中の上以上は宿屋、もう少し程度が低い者は個人の家、最下層は雨風を防げる程度の場所が用意されているようだった。

それまでにライアがすれ違った野ざらしの人々は、直接戦場となった内地からの難民だという。たいして財産も持たず、コスモスかグランリーグへ渡る船に拾ってもらえるのを待つだけの者たちとのことだった。ただし、金のない難民を無償で乗せた船には厳罰を下すと商会らが決定してからは、彼らを助ける者は激減してしまっただろう。

ライアは元々船の客であるため、彼らよりは優遇してもらえる立場にあった。複雑そうに顔をしかめる彼女の肩を誰かが叩いた。見ると、全身濡れ鼠のフェリクスだった。

「君はニールのところだって」

ライアは戸惑ったものの、忙しく動き回る男どもに急かされ、了承するしかなかった。フェリクスはすぐに彼女の荷物を持ち、水を吸って用をなしていない外套を着たまま歩き始めた。ライアもその場しのぎの布を渡されてかぶり、それに続いた。

もしもライアに自分の声が届くのだったら、私はここで一旦彼女を止めたかもしれない。彼に

は妙な気配があった。空気の流れがそこで不自然に遮断されているような、彼の周りだけ背景の色が異なるような感覚だった。私にはこれに馴染みがあった――彼は何らかの守護魔法を受けている。彼の首にかけられているのは、装飾品ではなく護符だった。

しかし、空間の歪みがあまりにも奇妙なため、この姿になって間もない私は、それが何なのかあと少しのところまでうまく測れないでいた。護符自体、少し珍しい形をしていたしな。全体を見れば「排除」の効果のある形に似ていたが、わざと基本を外したような箇所がところどころにあった。

それとは別に不思議だったのは、彼に対して嫌悪とともに甘い心地よさを感じたことだ。正反対の感情抱いた理由は、自分でもまだわからなかった。未知というのは恐怖だ。だから、できれば彼についていかせたくなかった。しかし、ライアに私の声は届かないのであった。

ライアとフェリクスのお話もなく、ハロルドさんの隣家、ニールの家に着いた。出迎えたのは、ニールの母親だという年嵩の女性だった。ライアはすぐに個室に連れて行かれ、替えの衣服も濡れていることが判明すると、ニールの妹の服を着せられた。

家に入って初めてわかったが、ニールの家は彫金を生業としていた。住居と店を兼ねた建物のすぐ裏に流れる川沿いに作業場があり、表から見るとよりもずっと広がった。ハロルドさんの工房も、外から見た限りでは同じような造りだった。

「エアトンから来たの。船乗りが言っていたけれど、向こうでも何かあったんだって？ 今は入るのも制限されているらしいとか。大変だったね」

ニールの母の言葉にライアは一瞬表情を固くした。そして、それを隠すように作り笑いを浮かべる。

「いいえ……戦争よりは、ずっと……」

彼女の睫毛がわずかに揺れた。

その家には、ニールの祖父と両親、彼とその弟妹たちが暮らしていた。そして、客人として滞在していたのがフェリクスと彼の父アルノルドだった。アルノルドは鉱物の研究をしており、時折ニールの家を厄介になって仕事に協力しているとのことだった。

「戦でお互い商売があがったりだよ。一時期は武具防具に鞍替えを迫られたくらいにな」

ライアが落ちついて、全員が居間に集まって雑談になったとき、ニールの父が皮肉げに笑ってそう言った。アルノルドも同じ表情を浮かべた。

「それでも手に職があれば生きていける。私なんか平時でないとまともに仕事ができないからね」

「そりゃあ、あんたが学問なんてケチなものやってるからだ」

その場にいた全員が笑ったが、ライアだけは居心地悪そうに、出された蜂蜜酒に口をつけてやり過ごしていた。

「君は？」

突然フェリクスがライアに話を振ってきた。

「私？」

「うん。ハロルドさんの知り合いってことは魔法使い？」

杯の縁を爪の先で弾きながら、ライアは曖昧に首肯した。

「正確には知り合いじゃないの。私はハロルドさんが以前いた魔法工房で修業していて、ちょっとこちらに来る用があったからついでに頼まれたの」

「用ね」

ニールが気だるげにため息をついた。

「やっぱりアールヴの人って呑気だよね。よくこんなところまでわざわざ来ようと思うのか。逃げ出したい人間がこの町にもたくさんいるってのに」

ライアは一瞬言葉に詰まったあと、遠慮がちに尋ねた。

「……外に座っていた人たち？」

「うん、あれは全部内地からのやつら。東側の連中も混ざってる。財産全て放って逃げたから、路銀がなくてね。疲れて別の道を探す人も少なくない。商会に忠誠を誓うなら雇ってもらえるといっても奴隷扱い。幸い、戦火はここまではやってこなかったけど、外へ渡った人がどれだけいるか」

ニールは、自分の口調が若干責めているように思ったのか、言葉の勢いを遮断して小さく謝った。ライアは首を横に振って、構わないと告げた。

「私も、元々シェスカにいたの。ずっとぐるぐる南西のあたりを回っていて。でも旅を続けられなくなって、しょうがないから生まれ故郷のアールヴに戻ったのね。アールヴは豊かな国だから、新参者には適さなくて、だいたいがもっと北へ行ったわ。向こうの方が住みづらくても、アールヴよりいいって」

アールヴの中にいるとあまり意識しないが、あの国は他のグランリージともシェスカとも真の友好を築けていない土地ではあった。

元はシェスカ出身の初代国王が……先住民族の暮らしていたあの地を侵略して築いた国なんだ。世界の最南に位置するのに、同じ緯度にあるシェスキなどとは違って冷えず、土壌や環境に恵まれている。

神聖山岳地帯で隔てられている他の国は暑いうえに痩せた土地しかなく、いつも貧しかった。人の足ではけして越えられない山はそのままアールヴを大陸で孤立させ、向こうの人間たちにとっては嫌悪の対象になっていた。

では、シェスカはどうかというと、こちらの関係もけしていいものでもなかった。距離はあまりないとはいえ、間に広がる海の存在は大きいもので、仲間というほどの精神的な近さはない。

最古の大陸であり、常に物事を中心であり続けるシェスカからすると、アールヴも田舎の新興国になってしまうようだった。私がアールヴ人だから擁護に聞こえるかもしれないが、国単位で見れば、へたなシェスカ大陸の国よりもずっと歴史はある。それでも、こういうときだけシェスカ人たちは妙な結束を示して、アールヴは自分たちの一部が分離して新しく興った他所の国という意識になってしまうから不思議なものだな。

というわけで、孤立しがちなアールヴは独立心が高くなり、他国と自国を切り離し、自分たちだけでやっていくという意識が強い。シェスカ大戦に軍を差し向けたのも、当時までのアールヴ史からしたら珍しいものだった。いざというときに誰も頼れないことを想定しているから、その

ころ魔法面では弱かったものの、豊かで強大な国の希求があり、実際に成し遂げた。

そうして手に入れた富裕さと、やや排他的というか、他国民への意識が低いことを考えれば、難民にはけして良い土地とは言えなかつたろう。私はライアとは違ってその現実をほとんど直視することはなかった。今告げた内容だって、所詮は後世に得た知識で推察して構築したものだ。

すまない、話を戻そうか。ライアの言葉に気まずい様子でいながらも、ニールは口を開いた。

「君はアールヴに残ったの？」

「ええ」

「どうして？ 居心地が悪くはなかった？」

ライアは苦々しい笑みを返した。

「正直に言ってしまうえば、私は旅芸人だったから冷たい視線には慣れているの。親はとっくに死んでしまっていたけれど、やりたいことがあって工房に入ることもできたし、私は……あまり辛くはなかった」

そんなことを言っても、声が微かに震えていた。

「今はちょっとお休みして、昔の知り合いに会いに行く途中。だいたいベネディーラのプリムサズに行ったから、そこを訪ねようかと」

「プリムサズなら僕らもこれから向かう場所だよ」

フェリクスが弾けたように言った。プリムサズは石の産地として名高い町だから、彼らの目的地であっても不思議なことではなかった。しかし、できすぎではないか。

当時の私でさえ訝しむくらいだから、ライアはなおさらこの偶然に驚いたことだろう。

「僕らは海路でベネディーラの西隣、サクラーツェのコスタスまで行って、そこからは陸路」

いそいそとフェリクスは地図を広げた。南から順に、現在地のランデンド、マティアス、サクラーツェ、その隣にプリムサズのあるベネディーラと国が並んでいる。

「君は、どう回るつもりだったの？」

ライアは地図の上で指を滑らせた。アブファムから、マティアスまで。

「本当はここ経由ですぐにマティアスのエーデルポルトまで行ってしまおうつもりだったの。うちの師匠にハロルドさんへの手紙を頼まれなかったら、そのまま嵐に遭っていたわね。それで、プリムサズまでまっすぐ陸路。これがアールヴからは一番安全な行き方だと思って。マティアスは戦勝国の中でも豊かだし、普段から兵が各地に配備されているし」

そこに口を挟んだのはアルノルドだ。

「あの国は今、難民でいっぱいだよ。元々いた国民との衝突が絶えない」

「東の国境以外は戦地になってはいないのでしょうか？ それに、マティアスほどの国なら……」

「戦で兵が少なくなって、取り締まりも戦前よりは弱い。」

フェリクスは座り直して微笑む。

「ライア、よかったら僕らと一緒に来ないか？ 一人よりはずっと安全だと思うけど」

ライアは押し黙ってしまった。彼を見つめる目には、警戒の色が濃く表れていた。それを見て、フェリクスは慌てて付け加える。

「別に、君の財産を奪おうとかそんなんじゃないかね？ ほら、一人旅は危ないだろう？」

「ええ、危ないわね。やけに親しげにしてくる見知らぬ人とか」

その言い方に食いついたのは、ニールの方だった。

「そういう風に言わなくてもいいんじゃないか？ 君よりもフェリクスやおじさんのほうがよほど信用に足る人間だよ」

「それはあなたが彼らを知っているからでしょう？ 私は知らないもの」

ニールはそれ以上何も言わなかったが、今度こそ本当に不愉快そうな顔をした。思わずアルノルドが宥めた。

「まあまあ。明日もきっと出発できないだろう。ひとまずはここでゆっくり休むがいい。旅の話はそれからだ」

「おいおい、それは私たちが言う台詞だよ」

ニールの祖父の言葉に、その場の全員がどっと笑った。ライアも苦笑いを浮かべた。

その翌日も雨がひどく、引き続きライアはニールの家に滞在した。嵐は平均三日ほどで収まるという。

嵐のときはよく客人を受け入れているとのことで、ニールの家は他人をもてなすことに慣れていた。はじめは遠慮がちだったライアも、会話しているうちに少しずつ彼らと打ち解け始めた。

双方にとって幸運だったのは、ライアの手先の器用さだった。工房で学んでいたこともあり、ニールの家の仕事を多少手伝えた。環境が変わったせいか、工房を去る直前よりももっと調子は戻っていた。まだ表情に硬さは残っていたが、手を動かしていると気が紛れたようだった。

修行している魔法使いにとっての彫金は大事な要素だ。とは言っても、たいていは専門にやっている職人には敵わない。しかし、ライアの技術は本職の人々には大いに好まれるものだった。

「魔法の工房よりもこのままうちの工房にいてほしいくらいだね」

そう言って笑うニールの両親にも、ライアは最初何と返せばいいのかわからないようだった。けれども、作業を進めていくうちに、ぽつりぽつりと自分のことを話していった。医療士になりたいと思って魔法工房の門を叩いたこと、いずれは医療士の学校に進むこと。

もったいないと口々に言われることも、もうライアには慣れたものだった。

「魔法と医療って何の関係があるんだろうね」

そう切り出したのは、ライアと同じように下仕事を続けていたニールだった。

「医療ってさ、別に魔法を使わなくてもどうにかならぬものなの？」

ライアはしばし考えたのちに返答した。

「どうにかなる場合もあるけれど、時間はかかるわね。魔法を使わない医療士を野士って呼んだりするみたい」

希法士・工房士・医療士の話は前にしたな？ 魔力がある医療士は瞬時に傷を癒せる。魔力を用いない医療行為もできるが、患者自身の生命力にどうしても依存してしまう。中には腕のいいやつもいるんだがな。

「魔法の医療も完璧ではないの。ただ、応急処置として傷をふさいだり、すぐに発熱をおさえたりするんだったら魔法ね」

「魔法使って複雑だね。わざわざ学校に行かなくても、独学でっていうのはできないの？」

ライアはわずかに目を細め、皮肉めいた表情を見せた。

「ちょっとした資格が人生を左右するのよ」

医療士の学校にはそれぞれ、自分のところで学んだ者へ認定の証を渡す権限が与えられている。場所によって規格は違うが、医療士同士は特にどこで医療を学んだかどうかをお互い気にするようだ。

「私は目の前で倒れた誰かをすぐに助けたい。何の障害もなく堂々と。ただそれだけなの」

ニールは興味を失ったように、自分の手元に集中していた。ライアもそれを気にする様子もなく、無心で作業を進めた。

しばらくしてふとライアは手を止めて、ぽつりと言葉を落とした。

「助けたい人がいるのに何もできないのは、辛すぎるから」

隣にいたフェリクスがふと顔を上げて、ライアを見つめた。彼女はそれに気づかず、たがねを再び動かしはじめた。

扉を開けるのもためられるほどの嵐も、翌日の夕暮れには弱まった。一晩様子を見て、問題ないようなら朝には船を出せるようになるという。

「思ったよりも早かったね。それで、どうする？」

フェリクスはあらためてライアに問いかけた。

「まだ考えられない？」

「とりあえず明日には私も出立したいわ。長居するのも気が引けるから」

「船はどれに乗るの？」

「同じ商会の船に空きがあればいいんだけど。フェリクスとおじさんは？」

「僕らは元々今回の足止めは関係ないからね。明後日、知り合いの船がサクラーツェに向かうから、それに乗せてもらうつもり」

ライアは視界が良好になりつつある景色を見る。必ず戻ると師には言ったものの、別に期限を定めているわけでもない。けれども、ニールの家で長居する理由もない。

「ライアは結局、エーデルポルトから行ってしまう？」

フェリクスは心配そうな顔で彼を見つめる。ライアは、一度港に行ってから決めるとだけ答えた。フェリクスはそれ以上尋ねはしなかったが、こっそりとライアに囁いた。

「あのさ、ニールのことなんだけど」

フェリクスは本人の不在を確かめるように周囲を見渡す。

「悪いやつじゃないんだ。ちょっと愛想が悪いだけで」

ライアは苦笑した。

「あなたが謝ることじゃないわ。元は私の方が感じ悪かったし」

それと、と彼女は付け加える。

「あえてあんな風に物を言う人って、意外といい人だったりするしね、私の経験上。彼が怒ったりするのは理由があるのだから、悪いなんて思わないわ」

その言葉を聞いたフェリクスは嬉しそうにした。ライアはそんな彼を微笑ましく思ったようだった。

改めて彼に挨拶して、ライアは小雨の中を歩き出した。数日の間に降りつづけた雨で、土がむき出しのところはぬかるんでいた。慎重に石畳を踏む。

ふと彼女は立ち止まった。その視線の先にはニールの姿があった。彼は難民たちを何か話しこんでいた。彼はすぐにこちらの存在に気づいたようだった。一瞬両者ともに固まった。ライアは何も言わず、そのまま港への道を進んだ。

先にも言ったとおり、アブファムの港には商会在二つ。彼らが毎日のように船を出すからこそ、旅人たちは多少楽ができるというものだ。まあ、事故さえなければな。ライアは船乗りたちがよく集まるという酒場や詰め所を中心に回った。少しでも集めたかったのはシェスカの国々の状況である。

しかし、商會に所属している船乗りたちはお互い商売敵の悪評を彼女に吹きこむばかりで、ライアはすっかり閉口してしまった。それでもなんとか話を聞き出す。

アブファムからプリムサズまで陸路で行くという選択肢はすぐに消えた。商會の隊にまぎって北を目指しても、比較的 안전한 経路を選ぶと恐ろしく時間がかかる。しかも海以上に賊が跋扈しているため、襲われないという保証はどこにもない。アブファムの商人たちも、戦争が終わってからも海路を主軸にしたままだった。

シェスカの南西で最も安定しているのは、魔法の本場であるマティアス王国。ここと周囲とは国力がまず違う。シェスカ東軍の侵略も許さず、領土を守り続けた。国内の治安もいいが、移民はやはり増加しているという。特に魔法の腕に覚えのある東側の魔法使いが亡命してきて、飽和状態だった。その反面、農民の数は増えず、徴兵で削がれた人手を元に戻せないでいる。

サクラーツェはというと、こちらは悪くはなかった。彼の地はマティアスほどの大国ではないが、比較的穏やかであるという。しかし、むしろベネディーラのプリムサズ周辺に、宝石目当ての賊が蔓延しているとの情報も得た。

ライアは詰め所で地図を確認した。エーデルポルトからプリムサズ、サクラーツェからプリムサズの経路。しばらく見つめたあと、ライアは商會と交渉することなくニールの家に戻った。

「おかえり」

ニールはライアの方を見ずに言った。グレンとはまた違った無愛想さだ。

「ああ、帰ってたの」

ニールと並ぶと、フェリクスの愛想の良さがより目立つ。フェリクスはニールに声をかけてから、ライアに温かい飲み物を渡した。

「どうだった？」

「あの、ね……」

ライアは遠慮がちに口を開いた。

「私も……一緒に行っても問題ないかしら？ 目的地が一緒なら、同行した方が心強いから」

フェリクスは嬉しそうな顔をした。

「もちろんだよ！ ねえ、父さん」

アルノルドはライアの方を見て、微笑みながら頷いた。しかし、私にはそれがぎこちなく見えた。

「よろしく」

差し出された手を、ライアは恐る恐る握った。フェリクスは朗らかに笑った。

「ボッティさんには僕から頼んでおくよ」

「いや、私が行く。お嬢さん、明日の夜までに支度をしておいてくれるかい」

ライアは了承する。アルノルドは本を閉じて外套を着こむと行ってしまった。静まりかえった室内には、ライアとフェリクス、ニールの三人が残された。

「二人とも、失礼な態度とってしまっておめんなさい」

俯きながらライアは謝った。フェリクスは全然気にしていないという態度で、ニールは小さく息を吐いたものの「別に」と答えた。

その日も、ライアは仕事の手伝いを申し出た。

「別にお客さんはやらなくていいんだよ。本来そういうものなんだから」

彼女と並んで座っていたニールは手から目を離すことなく言った。彼は彼で、さすがは職人の家に生まれただけの技術を持っていた。ライアは「泊めてもらっているから」とだけ答えた。こういうとき、コリンなら素直に客人として寛いだろう。彼はもてなされることに慣れていたからな。それができないところが、ライアとコリンの違いだった。

「ねえ、ニール」

無心で作業している途中、ライアはふいにニールに声をかけた。彼は煩雑そうな態度を見せた。

「何？」

「昼間は……難民の人たちといたの？」

彼はためらいながらも首肯した。商会の人間だけでなく、他の住民も難民とむやみに接触することは禁じられている。特にこの町の職人は、商会を敵に回すと生活が成り立たなくなる。彼が表だってできることも少なかった。

「それでも、見て見ぬふりは嫌だからさ……」

彼の言葉を聞いたライアは少し間を置いて、傍らに置いていた自分の荷から貨幣を何枚か取り出した。

「これを、あの人たちに渡してくれないかしら。何かの足しになるなら」

「はあ？」

ニールはこれ以上ないくらい目を見開いた。そうだよな、当時でも高額だった。

「何を考えて」

ライアは彼の言葉を遮った。

「私も……昔はあの人たちと同じだったから……。そのとき、親切な人に拾ってもらえなかったら、きっと同じようにしていたかもしれない」

「同類を憐れんでいるの？ それとも、自己満足？」

「……あなたと一緒に」

ニールは一瞬詰まった。そして、差し出したライアの手を優しく戻した。

「これは、僕に押しつけるものではないよ。君が自分で彼らにやるべきだ。それに、余所者がやった方がきっと見逃される」

何度かライアは瞬きをし、「そうね」と笑った。

「でも、いいの？ 旅人なら君も金が必要だろう」

まだ財産は自分で持ち歩かなければならない時代だった。ライアは平均よりもずっと手持ちの金は多かったはずで、荷物の中や自分の服に隠していた。

「いいのよ。正確にはこれ、私のお金じゃないの。元の持ち主はもういないから、代わりに私が使うようになって先生が」

目を伏せたライアに、私の貯えがどうかという話をしていたことをここで思い出した。

「確かに私には全然財産はなくて、途中で稼ぐことも考えてたわ。先生に言われてもらったものの、これは私のものではないから、持っているだけで罪悪感があるの。あまり多くは出せないけれど、自分のために使うよりも、こういう使い方なら許される気がして」

私は構わない、と言ってやりたかった。どんなに叫んでも彼女には聞こえないのだが。

「うん、自分が楽になりたいだけ。持っていると後ろめたいお金を、困っている人に渡して助けた気になりたいの。そうやって自分が助かりたいの」

私は彼女が後ろめたいと思うことを不思議に思っていた。別に彼女が受け取った分なのだから、堂々と旅に役立てたらいいのに、と。けれども、彼女は自分がそうする権利があるということにどうしても納得できなかったのかもしれない。

寂然としないような表情を浮かべながらも、ニールは薄く笑った。

「君は、いい人じゃないけれど、悪い人というほどでもないね」

ありがとう、と小さく言ったライアは、どこか嬉しそうだった。

「自分にできることって、本当に少ないのね」

「うん……。だって、王族でもなんでもない平凡な人間だもの」

「そうね」

翌日、ライアは町中に出た。そして陰でうずくまっている人々を見比べた。しばらく当てもなくうろついていた彼女だったが、意を決して何人かにこっそりと船賃になる程度の金を手渡した。国はともかく、商会は対価さえあれば便宜をはかってくれる。彼らにとって大切なのは、無料で乗せるかどうかなのだから。

しかし、その後も彼女はどこか浮かない顔だった。たまたまそばを通ったフェリクスやニールが話しかけてきても上の空だった。

「どうしたのさ」

「ちょっと……」

「渡さなかったの？」

ふるふるとライアは首を振った。

「いざ渡そうとすると、ためらってしまって。私のあげられるものは限られていて、それは全員に行き渡らない。私が考えなしに選んだ誰かと、選ばなかった誰かで運命が分かれるかもしれない」

思えば、ほんの少しのことで人生とは大きく変わるものだ。私があのとときレイフォード氏に誘われても行かなかつたらここにいなかったかもしれないし、ライアが飛びこんできた工房が違ふところだったら別の人生が待っていただろう。二つ並んだ果実のどちらか一つをもぐときに、右にするか左にするかで、どちらを生かすのか選択をすることになるのだ。

「それを君は僕にやらせようとしていたわけだ」

ニールの皮肉げな言い方に、フェリクスが咎めるような声を出した。それをライアが止めさせる。

「今日私がお金を渡した人は、いつかの私だった。あときは本当にたまたま、アールヴに行く船に乗れたの」

「あとは、彼らがいつかまた別の誰かを助けることを期待するしかないよ——今日の君みたいに」

「うん……」

ライアはすぐに散って消えてしまいそうな声で呟いた。

「兄さん、ごめんなさい。使っちゃいました」

だから別にいいのに。どうせ余っていたものだし、ライアが自分のために使うことだって私はまったく問題に思わなかった。

「好きにすればいいさ、もう既にあれはお前のものだったんだよ」

彼女には届かないとわかっていても、伝えたかった。もちろん、ライアの反応なんてなかったさ。まあ、代わりにフェリクスが振り向き、彼女に声をかけたわけだが。

「何か言った？」

「ああ、あのお金は私の兄弟子のもので」

自分のものでもないのにあげてしまった、とライアは苦笑いを浮かべた。

「兄弟子？」

「うん、実は……」

ライアは口を開きかけ、止まった。商会の見回りの者が近くにいたので、三人は不自然にならないようにふるまいながらすれ違ふ。ニールは顔を知られているので話しかけられたが、彼はいつもどおりの態度でやりすごした。

結局、ライアの話はそこで終わってしまった。三人は帰宅し、フェリクスは旅立ちの支度に追われた。元々荷物がまとまっていたライアは、最後にと自分にできる仕事を全部引き受けて、その日はもう話の続きが出そうにもなかった。

そうしているうちに朝を迎え、ライアたちがアブファムを去る時間になった。

「お世話になりました」

またぜひ来てほしいと一家は笑った。三人は話をつけていた船に乗りこみ、アブファムを発った。港にはニールがついてきてくれ、ずいぶんと長い間手を振ってくれていた。

船は海外線に沿って北上した。

「そういえば、昨日の話、途中だったよね」

いきなりフェリクスがそう言い出し、ライアも思い出したようだった。彼女が何か言おうとすると、船員がフェリクスを呼ぶ声がした。

「またか」

フェリクスは肩をすくめた。ライアは笑った。

「これからしばらくは船の上でしょ？ 話す時間なんていっぱいあるわ」

言いながら見上げた空は快晴で、鳥たちが鳴きながら飛んでいくのが見えた。

幸運にも嵐に遭うことなく、ライアたちを乗せた船は順調に航海を続けた。ライアがエアトンから乗ってきたものに比べると、今度の船は少し規模が小さかったが、彼女にとってはあまり関係ないことのようにだった。

ここでも、ライアの身の置き方はあまり変わらなかった。じっとしているよりは、と何か仕事はないか常に聞きまわっていた。とは言っても、素人の少女に任せられるものは少なかったが。

彼女の言ったとおり、確かに時間はあって、フェリクスとはお互い手が空いたときに話しこんでいた。

「父さんは元々マティアスで工房士をしていたんだ。でも、何年か前に工房をやめてさ。研究って言っても、商人みたいなこともやってるよ」

海風に髪をはためかせながら、フェリクスは遠くの水平線を眺めた。北上するにつれて視界に入るコスモスの島々は少なくなっていく。

「実は最近まで、コスモス経由でグランリージの北とシェスカを往復していたんだ」

フェリクスはよく自分のことを語った。それに比べて、ライアはまだ若干口数が少なかった。時々旅芸人をやっていたときのことを語るくらいか。それはフェリクスが喋りすぎるからということではなく、なるべく彼の方がたくさん話すように彼女が誘導しているように見えた。

それでも、彼女は笑う回数が増えた。ああ、ライアだ、と私は思った。おい、馬鹿みたいななんて言うなよ。ようやく、自分の記憶していたあの子と一致するようになったんだ。

「創世神話は知ってる？」

フェリクスにそう問われたライアは首を横に振った。魔法工房では、そういうことは教えていなかった。実際、私も昔に聞いたきりで、詳細はあまり覚えないうままであった。

「主神は世界のあらゆるものを創造したけれども、そのなかで最も愛したものは宝石だった。主神は彼らに自分と同じ神の位と力を与え、宝石たちはこの世を治める主神に忠実でよく従った。その後、他にも神の位を授かった者がいても、けして宝石たちと同格にはなれなかった。彼らは、この世界で主神の次に権力のある存在だった」

ライアは興味深そうに耳を傾けていた。旅芸人時代も、こういうものには触れていなかったのかもしれない。ああいう人間が語るのは、たいていもっと劇的な作り話だ。

「主神はあるとき、突然姿を消した。お前たちの中で最もふさわしいものが後継者になるように、と宝石たちに言い残して。彼らは、我こそが新たな世界の主と互いに争った。その結果勝利したのが赤い宝石」

フェリクスはちらりと、ライアの腕にはまった私を見た。そのときの行為には特に意味がなかっただろう。そのまま続けた。

「しかし、彼はあまりにも傲慢だった。他の者に対して驕った態度をとりつづけ、それに反発した宝石たちは罫にはめる形で赤い宝石を封印して追放した。けれども、赤い宝石が元々最も主神

の寵愛を受けて力を授けられ、神々の争いの勝者になったわけで」

風は強く、波はやや高かった。当時の私は、その話を心穏やかに聞ける心境ではなかった。かといって去ることもできない。

「ここからは神話というより昔話？ 他の石たちを恨んだ赤い宝石は自らの力で封印を解き、今度は世界を破壊しようとした。神々は赤い宝石を押さえるために人間の力も借り、赤い石を再度封印した。そして、人間に世界を委ねると、自分たちも表舞台から姿を消した」

そこまでくると、私の記憶にも新しい出来事だった。

「宝石たちに力を貸した人間。その一人が、君のお師匠さんって言われているよね？」

「あ」

小首を傾げていたライアだったが、そう言われてようやく思い出したらしい。弟子の中にはこういう話をしたがる者もいたけれども、師は直接この話を誰かから憧れ交じりに振られると嫌がっていた。若気の至りと答えるときもあれば、それは作り話だとはぐらかすときもあった。

「不思議だよ。何百年も前の話だよ。実際その生き証人がいて、君はその弟子だっていうんだから」

ライアは複雑そうにした。

「私はまだそういうことに疎くて、先生がどれだけすごいのか実感があまりないの。もちろん、私でも知ってるくらいには有名な人だから、工房を探すときにまっさきに向かったんだけど」

「ローハイン師ってどんな人？」

フェリクスは期待に満ちたまなざしを向けてきた。師に幻想を持ちすぎて弟子入り後に拍子抜けした者たちは、最初同じ目をしていた。

「うーん、とね。気さくで、思ったよりも普通の人かしら。私は下っ端だから、直接魔法を教わることは少なかったんだけど。でも……ああ、この人はお師匠さんなんだなってしみじみ思うことはあったわ」

そういえば、ライアがカネル師のことを他人に語っているところを見たことはほとんどなかったな。あ、当たり前か。彼女が弟子入りしたころは、私自身が工房に関わらない人間と接触することはほとんどなかったのだから。もしかしたら、エアトンの街に出たときに、外の人間には話していたかもしれない。友人もいくらかいたようだったからな。

「へえ、一度会ってみたいな」

フェリクスは父の影響からか、石にまつわる神話や伝説に詳しかった。アルノルドは現在、産地や種類の異なる鉱石の相性を調査しているらしい。

「フェリクスたちはエアトンに行かなかったの？」

アブファムとグランリージ北部を行き来していたのなら、誰もがというわけではないが、多くの人間はエアトンを通るはずだった。

「父さんはアールヴには近寄らなかったよ。戦争に関わりそうな国は避けたんだ。だからエアトンも行ったことない」

「そうなの……」

ライアは南西の海を見つめた。

「とてもいい町よ。うん、いい町だった……」

「ライアは、あまりエアトンの話をしないね」

ライアは息をのんで、フェリクスを見つめた。

「そう？」

「うん、ニールの母さんがエアトンの話をしたときも、なんだか辛そうだった」

ライアは大きな目を歪ませる。その様子を見たフェリクスは慌てた。

「ごめん、僕、何かまずいこと言った？」

「ううん、ちがうの。そうじゃなくて」

「工房が辛かったの？」

ライアは無言で否定した。せつかく戻ってきたはずの笑顔も完全に消えてしまった。

フェリクスは何も言わず、彼女を隅に座らせると、自分もその隣に座った。どれくらいそうしていただろう。落ちついてきたライアはぽつぽつと工房での話をしはじめた。

門前払いをくらっても食い下がって無理やり弟子になったこと。それで工房の人間と距離があったこと。私から指導を受けるようになったこと。コリンが加わったこと。三人で下らなくも楽しい日々を過ごしたこと。ヴィーエの一件で、それに終止符を打たれたこと——つまりは私とコリンが死んだという話だが。

「兄さんはね、第一印象は無愛想」

ライアはいたずらっぽく言った。本人がすぐそばで聞いているなど夢にも思わなかっただろう

。「山の動物みたいだった。最初は警戒して全然心を開かなくて、私やコリンが近寄るとすぐ逃げちゃうの。でも慣れてくるととても親切でね、工房の人達の評判は良くなかったけれど、私もコリンもあの人が好きだった」

「コリンは？」

ライアは困ったように笑って、言葉もなく何度か溜め息をついた。そして、意を決したようにフェリクスをまっすぐ見返した。

「自信家なお坊ちゃん」

そりゃそうだろう。私はひそかに同意した。

「最初ね、私だけが兄さんの指導を受けていたの。コリンは別の人をつけられていて。でも、彼ったら何て言ったと思う？ 自分が次室の指導を受けられなくて、どうしてそっちの飛び入りは受けられるのかって。どうせなら自分も次室がいいって。それで、彼の指導役だった人が機嫌損ねて、あとで先生がこっそり謝ってたの見ちゃった」

それは初耳だった。私は師に同情したと同時に、そういう板ばさみになって弟子に頭を下げるのがあったのかと意外に思った。

「もう、私もさすがにこの人とは気が合わないって思ったの。でもね、打ち解けてくると逆に話しやすかった。彼は誰かに媚びる必要も卑屈になる必要もなく、いつも物怖じせずに堂々としていた。主張すべきところははっきりと言ってしまえて、それで相手と衝突することもあったんだけどね。納得できないことは嫌い、でも一度受け入れたものはその分大事にした人だったわ。

気が強くて負けず嫌いで、でもふとした瞬間に優しくなるの。それを感謝すると慌てて」

そう語るライアは、穏やかな顔つきになっていた。

「誰かの幸せを素直に喜べるところもあった。あと、結構冗談好き。笑うこと、楽しいこと、ちょっと羽目を外したりとか、そういう瞬間が楽しくて仕方ないんですって。だから気が合ったのかしら、お互い相手がふざけたときは便乗したりして」

「好きだったの？ そいつのこと」

ライアはフェリクスの方を向き、しばし瞬きをしたあと、ゆっくりと頷いた。

「一方的にね」

「どうして？ 興味ないとか言われた？」

今度はふるふると首を横に振った。

「何も。向こうはアールヴ指折りの大貴族。私は孤児で、蔑まれる旅芸人をやっていて、無理やり魔法使いの道に飛びこんだだけ人間。違いすぎるでしょ。お互い魔法使いを目指さなかったら、会うこともなかったでしょうよ」

「工房では同格だったんだろ？」

ライアは眉をひそめながらわずかに天を仰いだ。我々の工房についてどう説明しようか迷ったのだろう。

「入った時期が一緒なだけ。私たち、工房の中でも立ち位置が違うの」

彼女は俯いて、悲しそうに笑った。

「彼はいずれ都に帰ったでしょうね。都の魔法は自分が発展させるって情熱を燃やしていたから。先生にも食ってかかることあったし。私は、教わることを教わったら医療士の学校に進むつもりだった」

「学校を卒業したら、自分の身分がどうのこうの言わずに堂々とできてよかったんじゃないか？

だって、医療士っていったら、どこでも歓迎されるだろ。貴族だって、末息子だったら――」

彼の言葉を遮るようにして、ライアは再びフェリクスを見つめた。泣きそうな顔だった。

「もう彼はいない。だからこんな話をしても無意味だわ。私は彼が好きで、でも叶うはずもなく、彼は死んだ……私のせいでね。それだけの話よ」

両端が少しだけ上がった彼女の唇から、長い溜め息が漏れた。

あのときそばにいればよかった。どうして自分が代わりに死ななかったのだろう。自分は身寄りがないから、死んでも悲しむ人なんてほとんどいないのに。

ライアはそう言いながら己を責めた。直接殺したわけじゃないけれども、自分が原因でコリンは命を落とすことになった、と。

「兄さんだってそう。あのとき、止めればよかった。コリンを死なせるなって言われて、私は追いかけて彼を引きずって丘を下りたの。私は選択を間違えた……兄さんを止めていれば、あの人がだけでも助かったかもしれない。それで兄さんを失って、コリンも結局死んでしまっ。私は何もできないで、ただコリンのそばで祈ることしかできなかった」

ライアは自分の手をじっと見る。そのときの彼女の指は、とても白く見えた。工房にいたときにあった浅い傷はおおかた癒えていた。

「命が逃げていく感覚ってあるのね。医療士が治療している間も、ずっと手を握っていたの。助かってほしかった。でも、ふとした瞬間に、どんどん冷えていくの」

ライアの歯がかたかたと鳴った。フェリクスが何か口にしようする前に、彼女は続けて言った。

「こんな私が医療士なんて笑っちゃうわよね。目指したときの覚悟ってどこに行っちゃったのかしら。そんなもの、あのとき消え失せてしまった」

彼女の声も手も、次第に震えていった。

「私は大切な人たちをこれ以上失うことが怖かった。あの人たちがもういない現実が苦しかった。エアトンを出たときね、私、ほっとしたの。あの二人の抜けた工房に残されなくてすむから」

ライアは膝を抱えて、顔を伏せた。私は何も言えなかった。フェリクスの手が彼女の頭に触れようとした。しかし、その指先は何度か宙をさまよったあと引っこんでしまった。

声をあげることなく泣いていたライアだったが、しばらくして顔を上げた。

「変な話してしまっておめんなさいね。でも、ちょっとだけすっきりした」

「ううん、僕の方こそごめん……」

「そんな顔しないで。むしろ感謝してるくらいだから」

まだ目が赤かったものの、ライアは弾むように立ち上がった。

「工房の人には、何も言えないからね」

大きく伸びをすると、ライアはその場を去った。フェリクスは心配そうに彼女を見つめるだけだった。

ライアには、小さく狭いながらも個人的な空間が与えられていた。そこに入ると、彼女は声を押し殺しながら再び涙を流しはじめた。床に倒れて袖を自分の目に押し当てながら、ずっとそうしていた。時折、私やコリンの名を呼んで、特にコリンには何度も謝っていた。

この期に及んでも頭を撫でてやることも声をかけてやることもできない。そんな自分が心底情けなかった。この姿では手を伸ばせもしない。

「ライア、俺はここにいるんだ」

コリンはいないけれども、自分はお前のそばにいる。そう何度も呼びかけたけれども、とうとう彼女がそれに気づくことはなかった。

虚しさだけがあった。きしむ天井を見上げながら、私はずっと彼女の抑えこんだ嗚咽を聞くことしかできなかった。たった一月も経っていないはずなのに、三人が一緒だったころがひどく懐かしく思えた。ここにコリンがいたら――そんなどうしようもない願いがぐるぐると回った。

ライアは泣き疲れてそのまま眠ってしまった。起きたのはかなり時間が経ってからで、彼女は気まずそうに外の様子を窺うと、また自分の部屋に閉じこもった。

自分の荷袋を引き寄せると、ライアはその中から物を二つ取り出した。一つは私の作った護符、もう一つはコリンが余った材料で作っていた銀細工だった。

自分よりも課せられたものが多いライアを待っている間、彼が手慰みで作ったものだ。彼がそうした暇つぶしをすることは多かったので、いつのものだったかは覚えていない。けれども、ライアはやけにそれを大事そうに指の腹で撫でていた。

「ライア」

外からフェリクスの声がして、ライアは慌ててそれらをしまう。

「食事はどうする？」

ライアはしばらく考えてから、まだ残っているなら欲しいと告げた。

フェリクスに誘われて、ライアは甲板に出た。日が沈んで間もないようで、西の空には橙、薄緑、青の色彩が美しく広がっていた。どこか妖しい色合いであった。

「ごめんなさい」

パンを受け取りながら彼女は謝った。

「どうして？」

「いつもフェリクスには何かしてもらってばかりなもの」

足下に置いた灯りに照らされながら、フェリクスは柔らかく微笑んだ。

「そんなこと気にしなくてもいいのに」

「私はあなたに何もしてないでしょ？」

ライアの横に座ったフェリクスは微笑しながらしばし考えこんだ。

「多分、今の僕には余裕があるから、君にあれこれできるんだと思う。君は余裕なくて精いっぱいなんじゃない？ だったら余裕ができたときに返してよ。それでいいじゃないか」

「余裕、か……」

ライアは黙々と食事を無気力そうに口に運んだ。エアトンにいたころの、街中の露店で売っているようなものから工房の賄いまで嬉しそうに食べていた彼女の姿が脳裏をよぎった。シエスカでの生活が長かったとはいえ、食べるのが好きなところは私よりもずっとアールヴ人らしかったのに。

「確かにないわね。全然、ない」

「昔の仲間に出会えるだろうか？ もしかしたら、重い気持ちが少しはなくなるかもしれないよ」

ライアは唇の片端だけ動かした。

「うん、そのためにわざわざプリムサズまで行くのよね……」

フェリクスは笑みを崩さないまま小首を傾げた。ライアは、どこか申し訳なさそうに彼に視線を送った。

「昔一緒だった人たちに会うのはね、とても楽しみなの。生きていくための術をたくさん教えてもらって、かわいがられて……。それなのに」

彼女の唇から前歯がわずかに覗く。

「どうしてだろう。ここまで来ておきながら、たった一年しかいなかったあの工房のことばかり考えるの。一年しか一緒にいなかったあの人たちのことばかり思い出して……。本当に自分が情けなくて弱い人間なんだって思い知ったわ」

ライアが見上げた空は、いつの間にか日の光の名残さえも失せていた。エアトンでは見られないような北の星々も遠くに見えた。

「私、逃げたの。当てなんかないのに、工房を逃げ出して別の場所に行ったら悲しみがなくなるような気がして。そうやって逃げても、どうしようもないのに」

だんだんと彼女の声に圧力が加わった。もしも私が人間の姿をしていたなら、あの子の肩をつかんで止めただろう。私が、もうそれ以上聞いていられなかった。

「本当はあのまま時間が止まってほしかった。コリンと一緒にいたかった。兄さんのところで二人でずっと修行していたかった。いつまでも、ずっと……。罰があたったのかしら。私がそんなこと願うから、あの二人は死んじゃー」

そのとき、フェリクスは彼女の両頬を軽く弾くように触れた。

「そんなこと言っちゃいけないよ。それじゃ彼らに失礼だ。彼らの人生は、君に左右されるためだけにあつたわけじゃない。そうだろう？」

ライアは目を丸くした。そうやって、どれくらい彼と向き合っていたらろう。だいぶ間があつてから彼女は俯いた。

「君が幸せにならなければ、それこそ君を助けてくれたコリンの死が無駄になるじゃない。図太く生きてもいいじゃないか。彼がどういう人だったのかは全然知らないけれど、一生悲しまれたら逆に辛いんじゃないの？」

ああ、そうだな、と私はひそかに同意した。きっとあの子だって、ライアを悲しませるために死んだのではないのだから。私だって、あの子が私を思い出して悲しむと、こちら辛かったさ。あんなに近くにいたのにな。

「……そう思えたらいいんだけど」

彼女の言葉に、フェリクスは慌てたそぶりを見せた。

「心の傷なんて今すぐ癒すものでもないね。無理に元気出す必要もないよ」

溜め息が一つこぼれた。

「そうだよな、僕こそ無神経だ……」

ライアはとっさにフェリクスの袖をつかんだ。

「ううん、もう一度言うけれど、私はフェリクスと話すことはむしろ嬉しいのよ。だって、あれから誰かに泣き言なんてめったに言えなかった。先生にさえ、全部は……」

彼の服を離したライアはそっと私の上に手を置いた。

「本当にわがままばかり」

彼女の指の隙間から見える星を見つめながら、私はライアとフェリクスの会話を聞き流していた。

「工房から逃げても私は行く場所なんてないのよね。親に捨てられた孤児には、もっと惨めな生活しかない。さっき言ったとおり、仲間に会いに行くというの、工房を出る口実。もちろん、みんなには会いたかったけれども」

自分で自分を納得させるように、頷きながらライアは喋った。

ライアは、芸人時代の仲間にもお互いの命があるうちに一度再会したいと語った。この機会を逃すとこれから先何年も会えないだろうし、その間に何が起こるのかもわからないから。

「……先生の言葉を借りるんだけど、会えるときに会っておいた方がいいのよね。戦争になって旅が続けられなくなったとき、最初はアールヴに帰って親を探そうと思ったの。でも、二人はとっくに病気で死んでいた。実の親なのに私は顔も知らない。赤ん坊の私がどんな子だったのか語

ってもらふことも、どうして私を捨てたのか直接問いただすこともできなかったわ」

ライアに身寄りがないのは知っていたが、私はその詳細もあまり聞いてはいなかった。彼女が言うには、ライアの両親は貧しいうえに身体が弱かった。赤ん坊のライアを孤児院に預け、ろくに働くこともままならず若くして揃って亡くなったとのことだ。

話しているうちに、ライアの瞳が少し暗くなる。

「人ってどうして死んでしまうのかしら。言いたいことも全部言えないで、みんな私を置いていく。兄さんだってコリンだってそうよ。みんな、みんな私を置いていくんじゃないかって、それが怖い……」

「僕は置いていかないよ」

フェリクスは強いまなざしでライアを見つめた。

「絶対に君を置いていかない。約束する」

その言葉を聞いたライアは彼の顔を見て、泣く一歩手前でなんとかこらえた様子だった。我に返ったフェリクスは、暗い中でもわかるくらいに顔を赤らめた。

「こんなこと言われても、困るよね」

唇を震わせながら、ライアは首を横に振った。

「ううん、ありがとう……」

言葉の最後の方はあまり声になっていなかった。彼女にとって、少々熱心すぎるほどのフェリクスの励ましは力になったのかもしれない。私は、それについてはフェリクスに感謝している。その夜、二人はライアが食べ終わったあとも、とりとめのない話をし続けた。

翌日も、二人は一日のほとんどを一緒に過ごした。船旅が続くと、さすがにライアもすっかりフェリクスと打ち解けたようだった。彼がライアの話をもてなすに聞いてくれたおかげか、ライアが話すことも日に日に多くなっていった。

暇な時間になると、それぞれが自分の知識を教え合うようになっていた。ライアは芸のことや魔法のこと、フェリクスはやはり宝石の話が多かった。あとは、自分の旅で出会った人についてかな。

「こんな話は知ってる？」

ライアは小首を傾げる。

「人は死ぬと土に還るだろう？ だから、北の鉱山では、人は死ぬと宝石になるという言い伝えがあるんだって。まあ、あくまでも迷信だよ。でも、もしもそうだったら、石が愛しくなっちゃいけないか？」

彼女は黙ったまま視線を落とし、私と目が合った。少なくとも私はそう感じた。

「僕の母さんは病気で死んだんだ。今はマティアスのアイベルクで眠ってる。実際にはありえなくても、石のどれかが母さんだったらと思うと、なんとなく大事にしたいなってさ」

フェリクスは胸元の護符につけてある藍玉を摘んで彼女に見せた。

「これ、母さんが一番好きだった石なんだ。これはマティアスじゃなくてエクシーアで出た石なんだけど。綺麗で、母さんの目に似てるからかな。手に取った瞬間母さんが笑ったような、そんな気がしたんだ。だから、ずっと持ち歩いていて……」

ライアは親指でそっと私を撫でた。それで何かが伝えられたなら、どんなに嬉しかったことか。

「これこそ自己満足だよ。母さんなわけがない。でも、僕は母さんだと思ふことにしてる。死者をどう思うかは僕の勝手だからね」

「コリンや兄さんも、石になるかしら」

彼女は不安そうな顔をしながらフェリクスを見上げた。

「もしそうになって、いつかまた巡り会えたら、僕は素敵だと思うよ」

そこまで喋ると、フェリクスは頬を搔いてそっぽを向いた。

「ごめん、死者をどう思うのかは僕の勝手に、君の勝手でもあるから、気にしないでほしい」

船員に話があるからと言い、フェリクスは早歩きで去っていった。その背中を見送りながら、ライアは掌で私を包むように触れた。

フェリクスの話とは違うが、私は奇妙な縁でこうして石になってしまった。もしもライアが私と会話できて、私がここにいることを知ってもらえたなら、少しは彼女の心を軽くすることができただろうか。コリンの代わりにはなれないが。

そんなことを思いながら、私は声を出した。

「ライア、俺のことわからないか？」

「コリン……兄さん……」

それは、私への返答ではない。私は何度目かの静かな落胆を味わった。フェリクスが羨ましかったよ。彼は私とは違って、何かすればライアが応えてくれるのだから。

ふと目をやると、その彼が立ち止まってこちらをじっと見つめていた。憂いを帯びた顔で視線を落としていたライアはそれに気づかない。彼は眉を寄せるような表情でしばらくそうしていたあと、背を向けて行ってしまった。

そうこうしているうちに、私たちを乗せた船はサクラーツェにある港、コスタスに到着した。途中でアブファムに立ち寄ったとはいえ、エアトンを離れてから船での生活が続いたライアは解放されたような表情だった。

コスタスからプリムサズは近いというほどの距離ではない。国境を越えるからな。しかし、プリムサズが栄えた宝石の産地ということもあり、人の行き来はそれなりにあった。ライアたちはここで、とある商隊に同行させてもらうことになった。

ここで印象的だったのは、アルノルドはマティアスそのものを意識的に避けていることだ。フェリクスの話では、彼の母親の墓がある町はベネディーラとの国境沿いらしい。フェリクスは一度そこを訪れたいと言ったのに、アルノルドは別の予定を主張して聞き入れなかった。商隊についても、マティアス関わりのところはどんなに条件が良くても候補から外してしまった。

「父さんはマティアスが好きではないみたい。でも、母さんが少し可哀想……」

フェリクスは残念そうに呟いたが、父親に従った。ライアは事情を聞くのはためらったようで、ただ彼を慰めていた。

コストスからプリムサズは、おおよそ数週間ほどの旅だった。もちろん荷運びくらいはしたものの、船よりも仕事は少なかった。移動しながらでも十分に雑談ができた。

「医療は資格がないといけないんだろう？」

「ええ……」

「魔法自体はどうなの？」

フェリクスの疑問に、ライアはしばらく考えたのちに答えた。

「魔法には資格はいらないのよ。技術を磨くだけ。特に希法士は工房修行しなくても不自由ないし。ただ、生まれつきの魔力がないとね」

「生まれつきの魔力？ 希法士の？」

「えっとね、工房士にも医療士にも魔力はあるのよ。それを利用して人々の生活に還元しているし。希法士は、生まれつき持っている魔力が他の魔法使いとはちょっと質が違ったりするの。しかも修行してもなかなか身につかないような魔法が簡単に使えたり」

フェリクスは魔法大国マティアス出身で、しかも父親のアルノルドが工房士だったのに、魔法については驚くほど疎かった。まあ、幼いときに故郷を離れて、各地を回っていたせいだろうかと思っていた。

「じゃあ、ライアも魔力はあるんだね」

「ちょっとだけね。でなければ修行すらもさせてもらえないわ」

「そういうのってどうやって知るの？」

ライアは、自分の荷を見つめた。商隊から預かっている荷物を抱えているので、身動きが取りづらかった。

「それについてはあとで。フェリクスが素質あるかどうかもきっとわかるわよ」

フェリクスは期待に弾んだ様子だった。

「ライアは工房で調べてもらったの？」

その問いを聞くと、彼女は一瞬固い表情を浮かべた。しかし、それを作り笑いで隠した。

「ううん。昔の……知り合いが教えてくれたの。そのおかげで、医療士になろうと思ったの」

日暮れが近くなり、一行は平原の一角で野営をすることとなった。約束どおり、ライアはフェリクスに一对の結晶石を持っていった。え、ああ、結晶石を知らないか。魔力を調べる道具だよ。もう今では古典的と言われてしまうな。

二つの結晶石を両手で持ち、石と石の間に意識を集中させる。すると、何もなければの空間に光が生まれるんだ。この光の質や強さで、素質を判断する。昔の魔法使いだったら誰でも一度はやることだ。

ああ、結晶石は他にも使い道がたくさんある。彼女も別に魔力の有無を確かめるためだけに持っていたわけじゃないさ。道中の勉強に利用するためだったんじゃないかな。

まずライアはお手本を見せた。黄色みがかかった穏やかな光が両手の間に生まれ、それは数十秒ほど輝くと空気に溶けるように消えた。

「すごい！」

フェリクスは目を輝かせた。周囲の人間も魔法が珍しいらしく、興味深そうに二人を遠巻きに

眺めていた。ただ一人、アルノルドだけが渋い表情を浮かべていた。それは、ありふれたものに対する冷めた感情……というわけではないようだった。

「僕もやってもいいかい？」

「もちろん、どうぞ」

ライアからフェリクスに結晶石が渡った瞬間。

「フェリクス。お前は幼いときにやったはずだよ」

アルノルドが口を挟んできた。どこか苦い声だった。フェリクスはきょとんとした。

「え、そう？」

「ああ。そのときは何も起こらなかった」

落胆したフェリクスに、ライアは助け船を出した。

「あの、特に子どものうちは魔力が安定しなくて、成長するにつれてまた変わるんですって。もしかしたら今は魔力があるかもしれないわよ」

フェリクスの顔が、ぱっと明るくなった。彼は期待をこめた視線を父親に向けた。

「やってみるね」

アルノルドは身を乗り出したが、ふと我に返ったようで、不承不承といった態度を隠さずに頷いた。

フェリクスはわくわくしながら、結晶石をかざした。その直後、強烈な閃光が彼の手から発せられた。まるで雷のようだった。

「わあっ！」

彼の驚嘆の声とともに、闇に食われるようにそれはすぐに収まった。フェリクスはライアに結果を尋ねる。彼女は呆気にとられ、何度も瞬きをする。わずかに唇も震えていた。

「初めて見たわ、今みたいなの……。いえ、私だってそんなに多くの例を目にしてはいないんだけど」

「安定していたらお嬢さんみたいにしばらくは光るさ。それが一瞬だったということは、まだ不安定な証拠だ」

アルノルドはほっとした様子で、穏やかな声色で言った。ライアは戸惑うように、彼のことを見つめた。

「ちえ。ライアだって僕と歳変わらないのに」

「おいおい、仮にもお嬢さんは工房士だぞ。魔力を安定させるのも修行のうちだ。そうだろう？」

ライアはびくりとしつつも、アルノルドの言葉にこくこくと頷いた。

「父さんもやってみてよ」

「ああ、また今度な」

アルノルドはフェリクスの手から結晶石を回収する。そして、苦笑いを浮かべながらライアに返却した。

二人のやりとりを見ていた他の者たちも何人か試し始めた。隊の面々は思いのほか盛り上がっていたが、ライアは心あらずといった様子でフェリクス親子をちらちらと見ていた。

おそらく彼女もわかったのだと思う。フェリクスの手が光を放った瞬間、彼が身につけていた護符から魔力が吹き出した。まるで、光を抑えこむように。

あれほど激しい反応は、私すらもなかなかお目にかかったことがないほどものだった。よほど強い魔力……そう、希法士でなければ一瞬とはいえあんな風に輝くことはない。

私はようやく、彼の周囲に漂う奇妙な違和感の正体に思いあたった。あの護符は外敵から身を守るのではなく、内にある力を強制的に抑えこんでいたのだ。まさか彼にそれほどの力が秘められていたとは思ってもよらなかった。彼を取りまく妙な気配をようやく理解できた。もし生身だったらもう少し気づくのが早かったかもな。封じるのにかなり無理をしなければならないほど、フェリクスの魔力が強大だということだ。

その後、火の番以外が眠りについたとき、ライアはこっそり結晶石を取りだした。星空にかざすようにして、長い間それを眺めていた。

翌日になり、前夜の出来事が楽しかったのか、フェリクスはそれまでよりもライアに魔法について尋ねるようになった。あまり無駄話をしないように、とアルノルドは言っていたが、息子の扱いには困っているようだった。無理にやめさせるのもやぶ蛇になるのではないかと思っていたのではないだろうか。

その日の夜、フェリクスが早々に眠りについてしまった際にアルノルドはライアを呼んだ。小枝を集めて作った小さな焚き火を挟み、ライアを真向かいに座らせる。取っ手がついた壺に水を注ぐと、彼は火にかけた。

両者の間に沈黙が流れる。アルノルドはしばらくの間、ゆらめく炎を瞳に写しながら考えこんでいたが、とうとう口を開いた。

「お嬢さん、申し訳ないが、あまりあの子に魔法の話をしなくてももらえないだろうか」

ライアは何も言わず、大きな目でアルノルドを見つめた。彼は力なく地に視線を落としていた。ライアは音が聞こえそうなほど強く唇をかみしめていた。

「既に察しているかもしれないが、あの子は魔法の才に秀でている。幼いときからそうだった。きちんとした教育を受けさせるように、都にやるように、と言う者もいた。しかし、私はそれを拒み、魔法には一切触れさせないようにしてきた」

重々しい空気の中、ライアは遠慮がちに返答する。

「……私は魔法使いとしてまだ力不足ですけど、それでも彼は何か他の人とは違うように感じました。昨日の光、魔力が安定していないからといっても、あそこまで強く輝く人は見たことがありません。けれど、なぜ彼に魔法を学ばせなかったのですか？」

アルノルドは膝に両手を置いて、長く息を吐いた。

「私も親だからね、あの子の才能には早くから気づいていた。同時に、魔法使いにさせたくはないという恐怖もあった。あれはあまりにも力がありすぎた」

ライアも黙ってしまった。彼が希法士であろうことは理解したようだった。

「本格的に危機感を抱いたのは戦争が始まるよりも少し前だった。これまでは表向き、魔法使いの戦争利用は統一法により禁止されていた」

ライアは工房にいたころに学んだ魔法史概説の一節を諳んじた。アルノルドは彼女をうつろに

見つめながらわずかに頷いた。

「水面下ではとっくにそんな決まりは破られていたがね。しかし、いよいよシェスキの西方進出が現実味を帯びてきたというときに、マティアスは独自の法でもって、堂々と魔法使いを軍に組み入れた」

当時は、魔法使いには戦争に参加してはならないという掟があった。これを破った魔法使いには手痛い制裁があった。まだ古い統一法が生きていたころの話だよ。

マティアスは当時から世界の魔法の最先端を行く大国であった。しかし、なにせ魔法使いに比重が偏りすぎていて、軍事や商業との格差があった。これについては後でまた話すが、そもそも魔法使いが優遇されすぎていたがために、民も他の職業に就きたがらないほどだった。自国だけで魔法使いは飽和状態で、行き場のない者も多かったという。私も生前は噂でしか聞かなかったが、魔法の軍利用については何代にも渡って訴えていたようだ。

「そうになると、魔法使いも軍人……いや、むしろ兵器として扱われることは目に見えていた。私はね、息子にはそうあってほしくはなかったのだよ。けれども」

もう一度、沈黙と長い溜め息。

「あのままマティアスにいたら、フェリクスはきっと利用されただろう。各国、優秀な魔法使いの奪い合いになって、そんな状況にあの子を放りこむくらいならいっそのこと才能そのものをつぶしたかった。だから私は、あの子を連れて旅に出ることを選んだ。親の勝手と言われればそれまでだが、戦争に使われるよりはマシだ」

それは、彼なりの親としての愛情であったのだろう。あのご時世、子どもを連れて工房も捨てて故郷を去り、ひたすら放浪するのは並大抵のことではなかった。

「おじさまは、彼が魔法使いになれば、必ず国に目をつけられると考えているのですか？」

「そうだよ。身内の鼻屑目なしに、あの子が魔法使いになれば頂点に近い位置にまで上りつめられるとね」

火が爆ぜた。アルノルドは沸かした湯を慎重に器に入れて、茶か何かの粉を入れて混ぜるとライアに手渡した。

「君が手紙を届けにきたハロルドって男がいただろう。彼にはその点でずいぶん世話になった」

「あの首飾りですか？ 魔力を封じていますよね」

彼女の言葉に、アルノルドは薄く笑った。

「わかるかね」

「私の兄弟子……あ、ハロルドさんも一応兄弟子にあたるんですけどね。私の面倒を見てくれた人が同じ研究をしていました。二人ともローハイン先生から教わったのかも」

このようにライアの口から私の話題が出ると、どうもいつも複雑な気持ちになったな。

「だから、それでたまたま見覚えがあったというか、前に見たものに似ていると思ったんです」

「ハロルド……彼との出会いは偶然だったが、ずいぶん助けられた。ハロルドもフェリクスの素質には驚いていて、本格的に学ぶことを勧めてきたが、最終的には私の意向をくんでくれた」

アルノルドは、すぐに消えていきそうなほど弱く溜め息をついた。

「もしかしたら、自分の才能に気づいた方が、自分に何ができるのか知った方が、あの子は幸せ

になれたかもしれない。しかし、私は後悔していない」

確信的な口調に、ライアは何も言えなくなったようで、黙って器の中身に口を付けた。最後の一口を惜しむように、ゆっくりと時間をかけて飲み干した。

アルノルドとのやりとりのせいか、ライアはその後、フェリクスとどう距離をとったらいいのかわからない様子だった。彼は相変わらず話が好きで、自分が語るのも相手のことを聞くのも楽しそうにしていた。けれども、時間が経つにつれ、ライアはなるべくフェリクスに話させるようにしていた。フェリクスにはいつもどおり接しつつ、アルノルドの意思も尊重したいように見えた。

「ライアは、プリムサズは初めてなんだよね？」

「ええ。ベネディーラ自体、ほとんど寄らなかったから。フェリクスは？」

「僕は何度か。ここまで来るのは大変だけどね。もっと海に近ければよかったのに」

「こればかりは仕方ないわ。大地の都合だもの」

フェリクス親子は確かにプリムサズに馴染みがあるようだった。サクラーツェとベネディーラの国境でも、両国の兵の中に顔見知りがいいたくらいだった。

国境を越えて数時間ほど行ったところにプリムサズがある。ベネディーラは賊がはびこっているとのことで、正式な通行証を持っている商隊ですら入国が厳しくなっているらしい。一行は、国境の町で一泊することになってしまった。そして翌朝早くに出発して、ようやく彼らはプリムサズにたどり着いたのであった。

遠目には、プリムサズは高い山と平原を結ぶ蝶番のように見えた。平原と山、それぞれで人々が暮らしている。思っていたよりもずっと規模の大きい町だった。

ここでも入るまでにかなりの時間を要した。ライアらが町に入ることが許されたのは、昼を大幅に過ぎたころだった。

高い壁と門を抜けると、整った広い道とその両脇に並ぶ店の壮観さに目を奪われた。プリムサズには、アブファムとはまた違った活気があった。それは海辺と内陸、港と鉱山の町の差だろうか。そこを訪れる人々は、アブファムよりも無骨な人間が目立った。

ライアはきょろきょろと周囲を見渡す。そして、吐息まじりにフェリクスを振り返った。

「着いたわね」

「うん……」

そう笑うフェリクスは、どこか寂しそうだった。

「ねえ、フェリクス。あなた、ここはわかる？」

ライアは仲間たちがいるという場所の名前を告げる。しかし、フェリクスは知らないようだった。

「町の人に聞けばわかるわよね」

「僕もついていこうか？」

ライアはアルノルドをちらりと見る。彼は彼で見知らぬ人間と何か話していた。

「悪いからいいわよ。ここまで散々お世話になったんだもの。もう十分。そっちだっているいろいろ

用があるでしょう？」

ライアは彼の目を見ながら改めて微笑んだ。フェリクスが一瞬静止する。

「ありがとうね」

「な、なにが？」

「こんな、出会ったばかりの私でも心配してくれて励ましてくれたでしょう？ とても……ありがたかったの」

フェリクスは照れるようにして目をそらす。その様子を見たライアは瞼を一度動かしたあとに苦笑した。

「フェリクスたちは、いつまでプリムサズにいるの？」

彼は頭の中で計算するように天を仰ぐ。そして、最低でも一ヶ月ほどはと答えた。

「私もまだ具体的には決まってないけれど、しばらくは滞在するつもり。今日はひとまず仲間たちのところに行くわ。でも……落ちついたらまた会えないかしら？」

「もちろん！」

フェリクスの明るい表情に、ライアも嬉しそうだった。二人はお互いの滞在先を教え合い、一度別れた。フェリクスは名残惜しそうに手を振っていた。

アブファムのと看と同様に、ライアは人々に道を尋ねながら歩き出した。あの港よりプリムサズの方が町の造り自体は整っていたが、ところどころ、物が詰まられて行き止まりになっている場所があった。加えて、後から道そのものを捻じ曲げたと思われるところがあって、ここでもライアは苦勞していた。

そしてやっと坑夫たちが集って暮らす地区に着き、きょろきょろとライアが周囲を見渡していると、彼女の背後からこちらを見ていた男の表情が変わった。

「おい、ライア？」

彼女がそちらを振り向き、目が合う。ライアの顔も弾けるように輝いた。

「ブラウ兄さん！」

ライアは彼に飛びついた。その様子で、彼がライアのかつての仲間だと窺えた。

その男がライアを連れて行きつつ、他の人々を呼ぶ。そのたびに喜びの声があがり、彼女は様々な年齢の男女に囲まれた。

「お前、立派になったな」

「また会えるなんて思わなかったよ」

彼らは代わる代わる、ライアの肩を叩いたり頭を撫でたりした。

話聞く限り、ライアのいた芸人の一座はそれなりの規模だったらしい。ここにいるのはその七割ほどということだ。座長がプリムサズ出身で、戦争で身動きがとれなくなったあと、主に身よりのない者を連れてきて定住したとのことだ。他はライアのように別の場所に行ったり、行方知れずだという。ライアはここにいない人間の所在を尋ねては一喜一憂していた。

「しばらくいられるんだろう？ ここの衣食住は心配なくていいぞ」

座長の言葉に、なんならずっといてもいいと誰かが言い、みんなが笑う。

「馬鹿。医療士様になる夢があるんでしょが」

女性の一人が微笑みかけると、ライアは同じような表情で頷いた。

幼いころから一緒に過ごしてきた気心が知れているのか、ライアの周囲に漂う凝り固まった空気がどんどんほどけていった。傍観している私すら幸せだと感じるほどに。この旅を「逃げた」と彼女は言っていたが、こうやって笑うための旅だったのだと私は思いたい。

その夜は、彼女のためにささやかな宴が催された。肉と野菜の料理が卓にたくさん盛られた。プリムサズの食事は、エアトンでは見られないような色彩で珍しかったよ。別に私には食欲ももうないから空腹に悩まされることもないが、あれは一口くらいつまんでみたかったな。昔食べた料理に似ていて懐かしかった。

一人が楽器を持ち出してきた。あえて言うなら、現在のヴァイオリンに似ていたかな。それで叙情的な旋律を奏で始めると、その場にいた面々が沸いた。ライアも太陽のような笑みを浮かべた。

「サルマ！ 頼むよ」

ライアの近くにいた女性が立ち上がると口笛が飛んだ。彼女は一度深呼吸をし、一瞬間をおいたのちに歌いはじめた。熟練していて、それはもう上手かったさ。そうだな、重力を感じさせる声だ。聞いているこちらを心地よい力で引っ張るような歌だった。

楽器が足りない、あいつがいない、と人々は言う。横から誰かの手が伸びてきて、ライアも琴のようなものを渡された。

「もう私、全然弾けないわ」

「いいからいいから」

これでも少ない編成だというのが、全員が一斉に演奏すると迫力があつた。味も匂いも手触りも感じない私には、音楽が慰めになったよ。ライアは時々手元を確認しながら、伴奏に徹していた。他の者の視線や彼女の様子で判断するに、一度だけ主旋律をもらったようだが、苦笑いを浮かべていた。

曲が終わると、拍手で部屋はいっぱいになった。外には、賑やかな宴を覗きにきた部外者もいて、彼らも感嘆したようだった。

「本当に腕が落ちたな。筋が良かったのに」

座長の言葉に、さすがにライアも頬を赤くして視線を逸らした。

「もう最近はまともに触ってないの。たまに、町で仲良くなった人ののを軽く弾くだけで。みんなはいつもやってるの？」

「俺たちも、いつもってほどじゃないよ。まあ、これだけ人数がいればおのずと誰かが始めて、いつの間にか全員が集まっていたりするけれども」

「私は一人だもの。その点ではさすがに負けちゃう」

座長はライアに笑いかけた。

「工房の修行は順調か？」

ライアの顔がひきつる。その様子を見た他の団員がはやし立てた。

「もしもいじめられてるんだったら、ここにずっといろよ！」

再び拍手があがり、ライアは困惑したように首を傾げた。

「おいおい。まあ、たった一年二年でどうにかなるものではないだろう。お前は元々、他の魔法使いとは違うんだ。ゆっくり焦らずやればいいじゃないか」

座長の口調は穏やかで、娘に言い聞かせるようだった。

「お前は字を覚えるのも早かったし、器用だし、度胸もある。きっと大成するさ」

ライアは彼を見上げた。しかし、座長が聞く態勢を取ったと同時に、ライアは何でもないと首を振った。

「ありがとう」

目を細めながら、ライアは手に持っていた琴を適当に鳴らした。

夜遅くまで騒ぎ、寝床を用意してもらったライアはぐっすりと眠った。起きたときにはもう昼近くになっていて、窓から差しこむ光を見た瞬間に彼女は狼狽した。

「おはよう。眠れた？」

慌てて開けた扉の向こうには、前夜に歌い手をつとめたサルマという女性がいた。丸みのある大きな目を持ち、肌は薄く色づいていて、北方の生まれと見受けられた。ライアと目が合うと、彼女はくすりと笑った。

「あんた、あんなに寝起き良かったのにね。まあ、でも長旅の直後ならしょうがないか」

サルマは机の上にスープを出して、ライアに食べるよう促した。ライアは身づくろいをしつつ、椅子に座った。サルマは向かい側に座る。

「みんなは？」

「お仕事。戦争が終わったらもっと忙しくなってね。私？ 私は今日はお休み」

「サルマ姉さんは普段何をしているの？」

「ああ、石の選り分け」

ひたすら、星の数ほどの石とにらめっこ。サルマは石を掻きわけるような動作をしてみせた。それを見たライアは苦笑する。

「指痛めそうね」

「今は芸人じゃないからいいの」

サルマは軽く溜め息をつく。

「そう、今の私たちはただの石屋さん。まあ、お祭りのときは昔みたいなこともするわよ。正直、気ままな旅生活も楽しかったけれど、今の暮らしもそんなに嫌いじゃないわ。……あんたは？」

ライアは手を止めてサルマを見る。

「魔法使いの生活はどう？」

表情を失くしたライアはうつむいてしまった。沈黙が室内に満ちていき、外の喧噪が必要以上に大きく聞こえた。

「やっぱりうまく行ってないの？」

「そう見える？」

サルマは無言で頷いた。

「手紙の内容聞くだけだったら楽しそうだったのに、今のあんた、全然楽しそうに見えないわ。手紙は嘘？」

「それは」

ライアは立ち上がる。サルマは動じず、机に肘をついてライアを見上げた。ライアは唇を噛んだ。

「……ついこの間まではね、本当に幸せだったの。修行が楽しくて、充実していて。でも、ちょっといろいろあって」

――逃げてきた。フェリクスには告げられたその一言を飲みこんだように見えた。

続きの言葉が出てこない彼女に、サルマはふと微笑んで、ライアの頭を優しく撫でた。

「ごめん、変なこと聞いて。言いたくないなら別にいいよ。私ね、ライアとまたこうして会えて嬉しいんだ」

サルマはライアを座らせた。

「追い出されたわけじゃないんだよね？」

ライアはためらいながらも頷いた。その動きは、そうとも言い切れないと暗に告げているような気がして、心配になった。彼女の様子を見て、サルマは笑顔を作った。

「それ食べた外に出ましようか。こっち側だったら案内できるから」

「うん……」

弱々しく頷いたライアだったが、涙を流しそうになりながらも笑っていた。

プリムサズの町は、平野の区域と山の区域の二つに分けられる。最初は平野の方が広がったが、坑道の規模が広がるにつれて山側に移動する人々も増えて、今は半々とのことだ。

平野側にも工房はあるが、買い付けにくる客相手の店や宿が山側にはない特徴だ。主に山で物を作り、平野で商売をするという流れか。サルマは通りを歩きながら、その一つ一つを説明していった。

「山の方で精錬したり磨いたりしたものを、こっちで装飾品の加工とかすることが多いかな。私たちの仕事場はちょうど真ん中あたりね。山側の奥には、私はあんまり行かない」

本当に高級なものは通りから見えるようなところに置かない。代わりに、安物は意外なほど自由に見られるようになっている。

「上等な客はこんなところに置いてあるようなものなんか盗まないし、住人は顔見知り。泥棒するようなやつは怪しいから、すぐに目をつけられて取り押さえられるの。夜盗だって簡単に捕まえられるわ」

プリムサズの住人は屈強な男ばかりで、女もたくましい容貌をしていた。そこに、わざわざここまで来た豪商なんかが交じっただけですぐに目立った。ライアも浮いていたのではないかと思う。

「ライア、それは置いてきた方が良かったかもね」

サルマは私を指した。ライアは目を丸くして、こちらに視線を送ってきた。

「そういえば、ずっとつけたままだったわ。手紙は渡したのに」

私もここで、ハロルドさんに渡すという名目でライアに託されたことを思い出した。二人そろって間が抜けていたな。

「そういう大きい石は狙われるよ。あつという間に持ってかれて別のものに加工されて売られちゃう。どうする、うちに戻る？」

ライアはしばらく悩んだあと、首を横に振った。

「できれば持っていたいの。なんとなく……落ちつくから」

その言葉は意外だった。私が中にいるとどこかで感じてくれていたのなら嬉しかったのだが。

「じゃあ取られないように注意してね」

ライアは袖を引っ張って、私が隠れるようにしていたものの、短いのかすぐに布は元の位置に戻ってしまった。何度繰り返してもそうになってしまうので、いつの間にか彼女は隠すのをあきらめてしまったようだ。私も視界が遮られない方が都合はいいのだが。

ライアはサルマのことを「姉さん」と呼び、他の男性たちは「兄さん」呼ばわりだった。彼女が誰かに声をかけるときは、一瞬自分が呼ばれたかと思ってびっくりしてしまうくらいだった。別に、私だけが兄弟子というわけじゃないし、むしろ彼らに比べたら私の方が付き合いが浅い。それは事実だが、正直言うと少し寂しかった。そうだよな、むしろ芸人仲間への呼びかけが本来の使い方なんだよな。

サルマは本当に姉のような存在なのか、彼女と一緒にいるライアは気楽そうな態度だった。工房にいたときと同じくらいよく笑っていた。しかし、ここでも不意にその表情が消えることがあった。そういうときのあの子は悲しそうというか、自嘲するような雰囲気だった。

「ライア！」

いきなり自分の名前を呼ばれて、ライアは驚いて飛び跳ねた。ちょうど通りかかった加工場からフェリクスが出てきた。

彼の顔を見て眉をひそめたサルマは、ライアの反応を確認して一歩引いた。ライアは戸惑いながらもこやかに挨拶した。

「なんだか久しぶりに会った気分だわ……」

きょとんとしたフェリクスも、一瞬間を置いておかしそうにした。

「たった一日じゃないか」

「だって、これまでずっと一緒だったでしょ？」

ライアの台詞に、彼も嬉しそうな反応をした。

「知り合い？」

サルマに問われ、ライアは簡単にこれまでの旅での経緯を説明した。サルマは彼のことを知らなかったようだが、一部のプリムサズの住人とフェリクスは顔なじみだった。この日は、アルノルドが数種類の鉱石を使った実験を知り合いの職人と一緒に行っているのだという。

「僕はちょっと暇でさ。街中を見て回ろうと思ってたんだ」

「あら、じゃあついでに案内しましょうか？ それとも二人で回る？」

サルマの言葉に、ライアが答えるより先にフェリクスが苦笑いした。

「いえ、お構いなく。僕はまた今度」

手を振りながら去っていくフェリクスを見ながら、サルマは肩をすくめる。

「せっかくなのに残念ね」

「姉さん、何を言ってるの」

ライアは困惑しながら、彼女の手を引いた。

「あら、ライア。追いかけてなくていいの？」

「同じ町にいるんだもの。また会えるわ」

「わからないわよ。ここだって狭くはないのよ。いろんな人は来て、いろんな人が去っていくもの」

ライアは立ち止まり、フェリクスの歩いていった方を振り返った。そこにまだ彼の姿があったかどうかは私には見えなかった。

サルマは平野側を案内すると、ライアを山側へ連れて行った。坂道をいくらか上った先が、彼女たちの職場だった。坑道はサルマでも入れないということで、ライアが通されたのは石を採ったあとの選別や加工をする場所だった。

車を押す、鍛冶を打つ、石を転がす、火を焚く。そこに人々のお喋りや怒鳴り合いが混ざり、騒々しい場所だった。平野の加工場は店舗と合わさっているところが大半を占めているが、山は店の代わりに採掘の坑道とつながっていることが多いという。

魔法工房でも似たようなことはするし、外の職人と共同で仕事にあたることも少なくはない。あちこちで作業をしている人々を見渡しているうちに、ライアは指を動かしながらうずうずとしていた。

「何もしなくていい日って、意外と居心地悪いわよね」

「そう？」

「座長がよく言ってたじゃない」

二人は声を揃えて声を出した。

「働かざる者、食うべからず」

けらけらと女性が二人笑っている姿は華があった。たとえそれが、重大な話でなくてもな。ライアの言わんとしていることを理解したサルマは肩をすくめた。

「別にゆっくりしていてもいいけれど、あんたはそれじゃ駄目なのね。まあ、上の人には話しておくから、簡単なことくらいはさせてもらいましょうか」

簡単なことですめばいいのだが。私は、ライアが本領発揮をして居候以上の仕事をし、引き留められる図を思い浮かべた。

「言っておくけれど、医療士様のお勉強の邪魔はしたくないからね」

サルマの釘差しに、ライアは苦く微笑みながら頷いた。

「まあ、ライアがこの専属魔法使いになってくれたら嬉しいんだけどね。マティアスの魔法使いってどいつもこいつもケチだから」

プリムサズは、マティアスからも遠くはない。これほどの規模であれば、魔法の盛んなマティアスからも重要視されているのは容易に想像できた。

鉦山の男も強いが、マティアスの魔法使いも交渉に長けている。石や仕事の価値でもめること

が多いのだろう。サルマはマティアス側との大喧嘩を面白おかしく語った。

「うちの工房では、あまりそういうことってなかったわ」

「エアトンはきっと上品な町なんでしょうね」

サルマは投げやりに笑った。プリムサズやマティアスの地方に比べたら、確かにエアトンはまだ穏やかなやりとりで済んでいた。お互い、相手と争ったところでたいした利もなかったし。

まあ、私が生きていたころも問題がなかったわけではないさ。そういうときは、グレンのような気も強ければ体格も立派な人間が交渉にあたった。別に、私は行かんよ……。役に立つはずがない。カネル師だって、こういうときに私を交渉役に指名することはなかったくらいだ。

サルマは、坑道から車に載せられてやってきた石を見せてくれた。プリムサズは珍しいくらいに様々な石が出るとのことで、いくつもの荷台に色とりどりの原石が積まれていた。

ライアの視線がさまよう。何か探しているようだった。そして、笑いながら細く息を吐いた。「どうしたの？」

ライアは表情を崩さないまま、何でもないと答えた。

翌日、ライアはサルマの口添えで採石場の手伝いをするようになった。最初は子どもに交じって簡単な仕事をやらせてもらっていた。しかし、彫金の腕が良いと知られると、案の定、彼女は平野の職人たちに引っ張られてそちらの下職を任されるようになった。

もちろん、プリムサズもライアよりも優れた技術を持つ職人ばかりで、さすがに彼らに敵わなかったが、概ね彼女は好意的に受け入れられた。ニールの家に行ったときと同じだな。

ただ器用なだけではなく、魔法工房で修業している身だということも重宝がられた。魔法使いではないとわからない、魔法具の取り扱いや理論を、彼女は拙いながらもきちんと説明していた。修行の成果がきちんと出ていることがひそかに嬉しかったよ。

平野側にいるということで、フェリクスと会う機会も多かった。彼はよほど心配だったのか、自分の持ち場とライアの持ち場を頻繁に往復し、どちらの人間かわからないほどだとプリムサズの男たちに笑われていた。ばつの悪そうな顔をするフェリクスを、ライアがおかしそうに眺めていることもあった。

けれどもライアは、自分が笑っていることを自覚すると、急に真面目な表情になってしまうことがよくあった。サルマに初めて町を案内していたときのような。そんな彼女はいつも隠し持っていたコリンの銀細工を握っていた。そして呼吸を繰り返し、また元の笑顔に戻る。それは、一種の儀式に見えた。

ある晩のことだった。早くに床についたライアは、一時間も経たないうちに目を覚ましてしまった。しばらくは暗闇の中でぼんやりとしていたが、ふいに荷物から私の護符やコリンの形見を取り出し、私を腕にはめて部屋の扉を開けた。その先にはサルマや座長の他に何人か集まって酒盛りをしていた。

「あら、どうしたの？ 目が冴えちゃった？」

「夜風に当たりたくて……」

サルマはあまりいい顔をしなかった。しかし、必ず戻ると言ってライアはそのまま外に出た。夜のプリムサズは、昼間とは印象が異なった。あの時代の夜は、現在よりもずっと暗かったが、その分、月が美しかった。深い闇で満ちた夜空から、光の降り注ぐ音が聞こえるようだった。この姿になると、夜の空気を吸えないのが残念なところだ。あの優しい味が好きだったのに。今ではもう、味や感触、匂いといったものはかなり朧気なものになってしまったな。

サルマたちの家を離れると、静まりかえった道が四方に伸びるだけで、人の姿はほとんど見かけなかった。兵が詰めている門、あるいはまだ職人が仕事をしている工房の灯りが、ぽつぽつとゆらめいているだけだ。

彼女は特に目的があったわけではないようで、ふらふらと適当に動きまわっていた。

「ライア、あまりこういうところは歩かない方がいいんじゃないか？」

まあ、私が忠告したところで帰ってくるのは沈黙だけなんだがな。

正直、私はこういう景色の中をふらつくのは好きだが、見知らぬ夜の町で少女が一人動き回るのは感心しなかった。今更と言えば確かに今更だよ。エアトンやアブファムくらいなら出歩いてもさほど問題にならなくても、夜のプリムサズはどうも気分をゆるめるには抵抗があった。なんとなくそう感じたんだ。

しばらくライアに連れられて歩いていると、覚えのある気配に行き当たった。

「フェリクス？」

あの奇妙な空気だ。家などに遮られて姿は見えないが、彼が近くにいるようだった。こんな時間にふらついているのはライアも同様だったが、彼も不用心だなと思った。

正体がわかれば、彼に対して少し気持ちに余裕が生まれるようになった。ただ、私はこのときライアのことばかりで、彼のことを深く考えないでいた。

私の意志に反してライアが気ままに歩くものだから、フェリクスの気配は近づいたり遠ざかったりした。せめて彼と合流してしまった方が安全ではないかと感じ、私はライアに声をかけた。

「ライア、近くに彼がいる。探してみてくれ。一人よりはいいだろう」

独り言になるのは承知だった。それでも何か欠片でも伝わってほしかった。この際、どんな言葉でもよかった。たった一語でもこの声が届けばいいと思った。

その願いは虚しく夜の空気にかき消されたが、代わりに、待ちわびていた顔が角からひょっこり姿を現してくれた。

「ライア？」

フェリクスはすぐに彼女の元に駆け寄って、自分の上着を被せた。

「こんな時間に一人で……何をしているんだ？」

「ちょっと気分を落ちつけたくて、散歩に……」

ライアはか細い声で返事をした。

私がどんなに望んでも得られないものは、彼には簡単に与えられる。死んでしまったこの身は、きっとこれからもずっとこんな思いをし続けるのだろう。そう諦めたくても、どこかであがいている自分がいた。どうしてかはわからなかった。生前の私があればただ他者を拒んだのがまるで嘘のように、ライアに伝えてほしくてたまらなかった。

「フェリクスは何をしているの？」

「ちょっとお使いに」

彼は山の方角を指した。その先には、三つほどの灯りがともっていた。

「あら、こんな時間に？」

「まあね。ここだと僕も下っ端になってしまうんだ」

ライアはくすりと笑った。

「私もずっと下っ端だったから、大変さはよくわかるわ」

二人はフェリクスの居候先の工場に移動した。そこでは、アルノルドと職人がもう遅い時間にも関わらずまだ実験を続けていた。部屋の片隅では既に休んでいる者もいたが、金属を叩く音が激しく響く中でも悠然と熟睡していたのに舌を巻いた。まあ、これも慣れだろうが。

室内をぐるりと見渡したフェリクスは、ライアを裏口へと誘導した。そこは路地裏に面していて、他の小路と同じように、木箱が積まれていた。それを椅子代わりにして、彼らは腰かけた。

月明かりに照らされたライアの顔を見つめて、表情を崩す。

「ちょっとは元気そうに見えるよ」

「そう？」

ライアは頬に手を当てた。

「みんなと久しぶりに会ったんだし、話題が尽きないだろ？」

「まあ……」

彼女の様子を見たフェリクスは、不審そうな顔つきになった。

「どうしたの？」

「別に、何でもないわ」

ライアの態度に、フェリクスは遠慮がちに尋ねた。

「やっぱり、工房のことを思い出す？」

はっとして、ライアは彼を見返した。そして俯く。

「来て……よかったと思ってるのよ。小さいころからあの人たちとはずっと一緒に、もう離れてからたくさんの時間が流れたのに、そんな空白を全然感じない。あたたかく私を迎えてくれた。この町の人も親切で、楽しく過ごしているわ」

薄く笑う彼女に、フェリクスは言いづらそうに口を開いた。

「だからこそ、罪悪感があるとか？」

ライアの眉間だけがかすかに動いた。

「うん……」

ライアはしばらく黙って、私をそっと何度か撫でた。何も話さないでいると、アルノルドたちのやりとりと風の音がよく聞こえた。フェリクスは根気強くライアの言葉を待っていた。ライアもそれをわかっていたのか、何度か彼に視線を送ったあと口を開いた。

「ずっとここで暮らしたら、きっと私は悲しみから逃れられる。ここでみんなといれば、もしかしたら過去の思い出にできるかもしれない……幸せになれるかもしれない。けれど、やっぱりそ

んな自分は許せないわ」

断言する彼女を、フェリクスは切なさを帯びた瞳で見つめた。そんな彼の様子に気づいたライアは唇を歪めた。

「ここが楽しければ楽しいほど、エアトンのことを考えるの。苦しみをなくすためにあそこを離れたはずなのに、いつの間にか思い出してしまう。そうね、罪悪感というのが一番ふさわしい表現かもしれない。きっとこのままここで暮らしても、もっと遠くに行っても、私は魔法から逃げることができない気がする」

それに、仲間も医療士になるのを応援してくれているし。ライアは空を見上げながら目を細めた。

そんな彼女に微笑み、やや姿勢を崩したフェリクスは穏やかに尋ねた。

「ライアは、どうして医療士になりたかったの？」

「え？」

「魔法の才能があるって言われて、ニールの家でもここでも認められるほど技術があるんだろ？だから、工房士でなくて医療士を目指すのが不思議だなって」

それは生前の私も気になっていたことではあったが、ついに明確な返答をもらうことはなかった。彼女はいつもはぐらかして、差しさわりのないことしか言ってくれなかった。

ライアは目を伏せた。どれくらいそうしていただろう。時の流れがとても遅く感じた。彼女の様子は、まるで思い出を懐かしんでいるように見えた。

「芸人時代ね、流れの魔法使いが加わってたの。もしかしたら、あの人も戦争が嫌で紛れこんできたのかしら。私や年少者のことを可愛がってくれていて……その人が結晶石で私に魔力があるってことを教えてくれたのよ」

「この町で会えた？」

フェリクスの問いに、ライアは憂鬱そうに首を横に振った。

「……結局、行方知れずみたい」

「どういうこと？」

ライアはしばらくの間、考えをまとめているように沈黙した。そして、ゆっくりと語りはじめた。

「私たちの団は、戦争中でもなんとか旅を続けられた。でも、途中ね、東軍の攻撃に遭った人たちに会ったの。幸い、戦地から撤退できたらしいんだけど。重傷を負った人があまりにも多くて、医療士が足りていなかった。その魔法使いはそれを見て、自分は治療魔法を使えるからと、救護にあたった。けれども、あの人は……正式な医療士ではなかった」

その後のことはすぐに想像できた。

「統一法でね、医療士でもないのに治療を行った魔法使いは厳罰に処せられるの。おかしいでしょ？ 人の命を助けることには変わらないのに、医療士の資格を持たないというだけで捕まって、連れていかれちゃったの。私たちに累が及ばないように、団とは無関係だと主張しながらね。そして、それっきり帰ってこなかった」

フェリクスは眉をひそめながら視線をそらした。

「だからね、私、ちゃんと学校に通って医療士として認められたかったの。本当はその人、最後の最後まで助けるかどうかためらっていたのよ。医療士でないとわかれば、自分の身が危ういから。けれども結局、良心に従って目の前の命を救った。それで罪になるっておかしいと思った。でも、こんな小娘の感情だけでは決まりは変えられない」

悲嘆の声混じりに息を吐き、ライアは服からコリンの銀細工を取り出した。弱い光が反射して、それはほのかに光っていた。

「だから私、絶対医療士になって堂々と人を助けてやろうと思った。意地になっていたの。エアトンの工房でも、先生や兄さんが治療の魔法をこっそり教えてやると言ったけれど、それも断ったの。でも……もしも教わっていたら、あのときすぐに治療できていたら、コリンも助けられたかもしれない」

彼女は頭を抱えた。

「駄目ね。駄目、駄目。強がったり見栄を張ったりすると、すぐに自分の首が絞まる。大事なことを全部無駄にしてしまっている。もう、自分の考えがぐるぐる回りすぎて苦しいわ。考えれば考えるほど、何をしたいのか、したかったのか、全然わからなくなってきた」

あの日いきなり降りかかった災厄は、彼女にとって大きすぎたのだろう。考えれば考えるほど、迷路の奥に進んでいくような気分だと漏らした。

「こんな調子で、私、いったい何ができるんだろう」

じわりとにじんだ涙を、ライアは手の甲で拭った。

「フェリクスには、みっともないところばかり見せているわね。情けないわ」

この町でも、ライアにとってフェリクスは、唯一、弱音を吐ける相手だった。昔の仲間はライアの心の慰めになっていても、純粹に医療士への夢を応援している彼らにはこうしたことは何も言えなかったのだろう。

彼女は、自分をどこまでも追いつめる人間だった。あの事件より前、私が生きているころはその性質に気づけないでいた。きっと、私の知らぬところでも何か悩んでいたのかもしれないな。

精いっぱい笑ってみせながら言ったライアとは対照的に、フェリクスは真剣な表情だった。

「そんなことはないよ」

ライアの笑顔が、すっと消えた。

「ライアは意志が強いじゃないか。そういうところは、僕には立派に見えるよ」

「そんなこと……」

「だって、魔法使いになろうと決めて、実際に工房に入ったんだろう？ 腕が良くて、どんなに工房士になれと言われても、医療士への道を捨てなかったんだろう？ 全然情けないって思わないよ」

ライアはまた泣きそうな様子で、フェリクスの言葉を聞いていた。

「今は弱っても仕方ないさ。でも、君のことをみっともないなんて僕は思わないよ」

「こんな話ばかりしているのに？」

フェリクスは頷いた。

わずかに震えたライアは、ありがとう、と小さく呟いた。彼のその台詞が、そのときのライアにとって最も必要なものだったかもしれない。

フェリクスがいてくれてよかった。彼の存在が、ライアには大きな助けとなったにちがいない。きっとあの子も、彼には心の底から感謝していただろう。……むしろ、情けないのは私だったな。

「医療士なんて全然縁がないけれど、なるのは難しいんだろう？ 魔法使いになる人間自体限られているんだ。険しい道のりなんだから、迷ってもなかなか進めなくても恥ずかしいことじゃないよ」

「……フェリクスは、魔法使いになるって考えたことある？」

ライアの唐突な質問に、きょとんと目を開いた彼は大笑いした。

「君も見たろ？ あんなひどい魔力なのになれるわけないよ」

ライアはその答えに、眉を寄せながら笑った。アルノルドとのやりとりを思い出していたのかもしれない。

「じゃあ、お父さんのように、石の研究？」

「……おそらく。僕も石は好きだし、父さんの仕事を引き継いでいけたらって思っている。それに、ニールとは同い年だから、父さんたちと同じようにやっていけるだろうしね」

でも、とフェリクスの表情に陰が出た。私はこのときまで、彼の暗い表情を見たことはあまりなかったせいか、やけに印象的に思えた。

「父さんの歩んだ道をなぞるだけでいいのか悩むよ。もしも引き継ぐんだったら、僕にしかやれないこともしなければ意味がない気がして。僕はまだまだだから、それを模索中だよ」

その魔力があれば、そんなものすぐ見つかるさ。私はそう口を挟みたかった。

「あなたにはあなたにしかできないことが必ずあると思うわ」

「だといいね」

ライアはコリンの銀細工を、祈るように握りしめた。

「私も、私にしかできないことを見つけられるかしら……」

フェリクスは確信的に首肯した。それを見た彼女は瞠目し、ゆっくりと瞼を開ける。そして、にっこりとしながら口を開いた。

「フェリクス、私、もう一回工房に帰って勉強し直すわ。それで、ちゃんと自分の決めた道を進む」

あの日以降で、最も良い笑顔だった。ライアの晴れ晴れとした表情に、ほっとしたのは私だけでなく、フェリクスも同じだっただろう。

「ライアはいい医療士になると思うよ。優しいから」

ライアはけして優秀な人間ではない。けれども、医療士は能力の有無だけでは測れない価値も存在する。「いい医療士」という言葉に、それが込められている気がした。

「どうかしらね。まずいい医療士になる前に、普通の医療士にならなくちゃ。先は遠いわね。勉強も停滞どころか後退しているもの」

「そんなの、君だったらすぐに取り返せるさ！」

フェリクスの方強い声に、ライアは嬉しそうな様子を見せた。

「きっと時間かかると思う……。でも、いつかそうなれたらいいわね。座長も言ってくれたわー
一焦らなくていいって」

「そうだよ、人生は思ったよりもずっと長いんだからさ」

無自覚だったろうが、それは皮肉な言葉だった。ライアにとっても、私にとっても、彼自身にとっても。

「フェリクス、もしグランリーグに来たらエアトンにも寄ってちょうだいね。そのときは案内するわ。美味しいお店、たくさんあるの」

「楽しみにしているよ。これからだったら、きっと父さんもそっちに寄ることもあるさ」

二人はエアトンで再会したときのことを語らった。どんな店があるのか、どんな人がいるのか。場の空気が穏やかになっていくのを感じた。

そのときだった。

大きな鐘の音が何度も響いた。まるで太鼓を打ち鳴らしているかのようだった。思わず二人とも耳を塞いだ。

「な、何……？」

どこからか悲鳴が聞こえた。ライアたちは顔を見合わせた。

襲撃だ、と誰かの叫び声が聞こえ、二人は同時に青ざめた。とっさにライアが腰を浮かせたのを、フェリクスが軽く制した。

「待って」

フェリクスは積まれた荷の陰に自分とライアの身を隠した。すぐ近くで馬の蹄と金属のぶつかる音がいくつも響き、ライアは身を固くした。薄暗い中でも、彼女が震えるのがわかった。

「まさか……賊？」

鋭くフェリクスが呟いた。

怒声が生じては消えていった。そして、二人が隠れている路地から見える場所に、一人の男が弾けるようにして倒れた。ライアが悲鳴をあげそうになったのを、フェリクスが彼女の口を押さえてこらえさせた。数分待ったフェリクスは、左右の様子を窺ったあと、木箱を踏み台にして屋根に上った。そこにいろと言われたライアもそれに倣った。フェリクスは周囲の状況を見るのを優先し、ライアが上がってくるのを止めなかった。

見下ろすと、半狂乱になった住人たちが逃げ惑っていた。住人同士言い争う人々もいれば、呆然と財産を抱えて一人立ちすくむ者もいた。何軒かの家からは既に火が上がっていた。その光景にエアトンを思い出し、私は不快な気分になった。血なまぐさい臭いがよみがえるようだった。

平野側の門はまさに交戦の真っ最中だった。しかし、プリムサズ側が押され、次々に警護にあたっていた男たちが倒れていった。フェリクスが青い顔で何か呟いていたが、聞きとれなかった。

そうこうしているうちに次々と襲撃者は侵入してくる。その数はあまりにも多かった。

「山へ逃げよう」

言いながら、フェリクスは身を反転させた。ライアはがたがたと震えて動けなかったが、フェ

リクスが引きずるようにして降ろした。

「父さん！」

扉を乱暴に開けると、作業を中断していたアルノルドたちは渋い表情を浮かべていた。

「賊だ！ 様子がおかしい。予想以上に数が多いよ。早く行こう」

「俺たちはやらなきゃならないことがある。まずはお前が逃げろ！ 今のうちだ、今なら間に合う」

そう口を挟んだのは、アルノルドの隣にいた職人だった。

「ちょっと、何を言っているんですか」

フェリクスは狼狽しながら、父親を見つめた。

「……フェリクス、お前はお嬢さんを連れて先に行け」

アルノルドは、いつになく低く不穏な声で言った。フェリクスは慌てた。

「ちょっと、何言っているんだよ。こういうときはとにかく、何にも構わずに逃げるものなんだろう？」

「ああ、そうだ。まずはお前たちが行け。お嬢さんを守れ、早く！」

父親の怒鳴り声に、一瞬たじろいだフェリクスだったが、何とか頷いてみせた。あとで合流するという約束を取りつけ、彼はライアの手を引いて外へと飛び出した。

「フェリクス、おじさまは……」

「今はその話をしている場合じゃない。あとで」

フェリクスはライアの手を強く握り、狂乱の町の中を駆けた。

「戦えないやつは逃げろ！ むやみに抵抗するな！」

伝令役と思われる青年が声を張り上げる。ライアは無心で走りつづけたが、途中で目を開いて立ち止まった。手をつないだまま走っていたフェリクスは、勢いを殺されて転びそうになった。

「どうした？」

「姉さん……みんなが！」

何を、とフェリクスは彼女を見つめる。

「みんなが心配だわ」

ライアが向きを変えて走りだそうとするのを、フェリクスが止めた。

「今行ったら命取りになるぞ！」

「でも、姉さんが、座長が……。フェリクスだって、おじさまが――」

「まずは僕らが生き残ることが先決だ！」

それまで、フェリクスがこんなにも声を荒げるのを見たことはなかった。ライアはびくりと肩を跳ねさせたが、無言で俯いた。頷いたようにも見えたし、そうではなかったかもしれない。

「きっとあいつらの狙いは平野の高級品を取り扱っている店だ。こういうときは一度山の坑道に逃げる――それが決まりだ。君の仲間もきっとそうしている。父さんだってすぐに追いつくさ」

フェリクスは乱暴に彼女の手を引いた。ライアは人形のような動きで、再び走りはじめた。フェリクスは振り返らなかった。その背中の方でどんな表情をしていたのか、私は知らない。

「大丈夫だと、今は思うしかないよ」

ライアは泣きながら、今度は確実に頷いた。

悲鳴や怒号を聞きながら、二人は山を目指した。

「あ！」

ライアは後ろを振り返った。高い音がかすかに響き、道の中央に落ちた。それは私の作った護符だった。

「待って、兄さんの……」

ライアはフェリクスの手を振りほどこうとしたが、彼は強く握って離さない。

「早く行かないと」

「お願い」

フェリクスは苛立ちながらもライアの手を離して、自分が戻った。護符を乱暴に拾うと、それを持ったまま、再びライアを連れて走り出した。

「あと少しだ。あと少しで――」

フェリクスはライアを励ましながらひたすら前方の山を目指した。ライアの腕にはまった私は流れる景色を見つめていた。しかし、周囲の音に違和感をおぼえた。できるだけ広範囲に意識を向けると、視界の端に不吉な影が見えた。

それが馬に乗って剣を振りかざしている男だと気づいたときには、すでに刃が炎の光にきらめいて、二人に迫っていた。

「避けろ！」

私はとっさに叫んだ。空を切る音とともにフェリクスが振り返る。しかし、遅かった。

刃は二度襲いかかった。一つはライアの悲鳴、もう一つは鉄の弾ける音とともに。フェリクスの身体を光が包んでいた。それが彼の手にあった私の護符の効果だとわかった瞬間には、もうライアが地に伏せていた。

「ライア！」

私たちは同時に叫んだ。フェリクスは青い顔で短剣を取り出して、ライアを庇うように移動しながら構えた。勢いで彼らの前方へと通り過ぎていった賊は、手綱を握って馬ごとこちらに向き直り、下卑た笑みを浮かべた。挑発するように、剣を左右に揺らす。

「待て！」

武装した青年が脇道から姿を現した。彼はライアを見下ろすと、フェリクスに怒鳴った。

「ここは食い止める。早く行け！」

青年はフェリクスを押しやると、代わりに賊と対峙した。

「邪魔だ、さっさと逃げろ！」

馬がこちらに向かってきた。フェリクスはライアを抱えるようにして、入り組んだ路地へ入った。不吉な音がし、彼は一度だけ戻ろうとするが、ライアの顔を見てそれをやめた。毒を飲んだような、苦しい面持ちだった。

ライアは胴を斬られていた。じわりと服を伝って赤い血が下がってきた。夜でもわかるくらい、生気を失った顔をしていた。

そんな彼女を連れていては、フェリクスも走れない。フェリクスは一度ライアをそばにあった

樽に座らせ、改めて彼女を背負った。

「フェリクス……私を置いていっていいから。あなただけで、逃げて」

「いやだよ」

彼の声は涙でにじんできた。

「言ったじゃないか。僕は、君を置いていかない」

それは船での会話だった。ライアはわずかに目を動かす。

「あれは、そういう意味じゃ、ないでしょう？」

「そういう意味であってもなくても、君を捨てていけるわけないだろう？」

フェリクスは怪我人連れで襲撃者たちを避けなければならなかった。やっとの思いで二人が山にたどり着いたときには、平野側の半分以上が火に包まれていた。

人気のない道を上って平野の景色を見下ろすと、なぜ町が入り組んでいたのかがよくわかる。こうした襲撃に備えていたからだ。しかし、ただの賊とは思えない規模の襲撃には持ちこたえられなかった。

短い悲鳴とともに、二人は倒れこんだ。フェリクスが何かに足を取られたようだ。

「ライア。ねえ、しっかりして……」

フェリクスはライアを抱き起こした。もう彼女の目は虚ろで、私は自分の無力さを改めて思い知った。ただ彼女に呼びかけることしかできなかった。

「ライア、死なないでくれ……」

フェリクスは周囲を見渡す。

「だ、誰か！ 誰かいるか？ この子を知っている人は……」

同じように逃げている住人が遠くに見えるだけで、そばには誰もいなかった。フェリクスは自分の服を裂いて、ライアの傷口に当てた。それは布を赤く染めるくらいの効果しかもたらさなかった。

「誰か……」

「フェリクス……」

ライアがフェリクスを呼んだ。フェリクスはその瞳と涙に彼女の姿を映した。

「もう、もう……いいの……」

「何が！ もう少し行った先にみんながいるだろうから、それまでこらえて」

ライアは、フェリクスに触れる。べたついた血が彼の服を汚した。

「ありがとうね、フェリクス。あなたがいてくれてよかった。じゃないと私……」

「ちょっと、何言ってるんだよ。それじゃまるで死に際の言葉みたいじゃないか」

フェリクスの声は嗚咽交じりで、裏返っていた。

「フェリクス、お願い、聞いてくれる？」

ライアは震える手で自分の腕から私を外した。

「これを、ハロルドさんに……。もし……アブファムで会えなかったら、そのときは、エアトンのローハイン先生に、代わりに渡してほしいの……」

「し、知るかよ。そんなの自分で渡せよ」

ライアの顔は真っ青だった。私は絶望的な思いで言葉もなくそれを眺めていた。
「必ず、戻るって約束したのに、守れなくてごめんなさいって……伝えてほしいの」
「いやだ、いやだ、いやだ」

フェリクスは子どものようにかぶりを振る。

「いやだよ、ライア。自分で行けよ。付き合うから。僕もエアトンまで一緒に行くから、だから、君自身が――」

「だめ……だって、コリンの声が聞こえるもの」

ライアという言葉はところどころが掠れて、聞き取りづらくなっていった。彼は泣きじゃくって、何度も首を横に振って否定した。

「違う、違うよ、ライア、それは違う」

「呼んでる気がするの」

「ライア、違う。君を今呼んでいるのは僕だ、僕なんだよ！ コリンじゃない！」

フェリクスは自分の首にかけていた護符を彼女の手握らせた。護符は護符でも、彼の内側にある力を封じるものだ。そんなことをしても何の意味がないのに、そうせずにはいられなかったようだった。

「生きてくれよ。もう、僕のためでなくていい。コリンのために、君を生かした彼のために……
お願いだよ、頼むから」

置いていくな。絞るように声を出して、彼はライアを抱きしめた。私を握ったライアの手が落ちた。

ライアは力なく言った。

「これを受け取ってくれたら……フェリクスのお願ひも、きくから……」

そしてそのうち、呻いていた彼女の声も聞こえなくなってしまった。フェリクスは乱暴に私を彼女の手から外して、それをライアに見せる。

「受け取るよ。だから、君も……」

フェリクスが何度呼びかけても、もう返事はなかった。

彼は獣のように叫んだ。何度も拳で地を叩き、彼女の身体を揺さぶった。それで起きてくれるなら、どんなに良かったろう。

私は呆然とライアの亡骸を見つめていた。何が起きているのか認識するのを放棄したかった。

フェリクスのように彼女に手を伸ばしたかった。見ていることだけしかできない。それはわかっていたはずなのに。

「ライア……」

どうして何もできないのだろう。私は本当にこの場所にいるのだろうか。動く体もないというのに、精神だけで存在していると言えるのだろうか。心に空虚が広がり、意識が朦朧としていく。

。

そんな中、護符を外してしまったことで、フェリクスの魔力は明確に感じられた。生身でいたときよりもこの姿の方が、そうした魔法の気配を捉えやすい。フェリクスの持つ力は……甘い、と感じた。そうだな、そのときはやけに酔いそうな甘味があった。

――の力。

意識が虚ろになりつつあったそのとき、突然、どこかから声がした。

「え？」

私は辺りの様子を伺った。そこには私たち以外誰もいなかった。

――に委ねればいい。

再び誰かが囁いた。それは、明らかにフェリクスではない。

「じゃあ、誰なんだ？」

私が呟いたその瞬間、フェリクスが顔を上げた。目を見開き、きょろきょろと左右に視線を送った。

「だ、誰かいるのか？」

「……フェリクス？」

私は思わず話しかけてしまった。すると彼は飛び上がって、荒い呼吸をしながら私を見つめた。その瞳には、ほのかに光る私が映っていた。

「え？ 今のは……」

私は息をのんだ。

「俺の声が聞こえるのか？」

そう話しかけると彼は狼狽して私を放り、腰を地に下ろしたまま後ずさった。

「何だよ、これ。何なんだよ！」

がたがたと震える彼に近づきたくとも、それはできなかった。

「待ってくれ、俺の話を一―」

――彼女の仇を取りたくないか？

また響く呼びかけに私は戸惑い、フェリクスは怯えた。

「誰だ？」

押し殺した笑い。それは、私の内側から出たものだった。声だけでは正体はわからなかったが、その口調には覚えがあった。

「ヴィーエ？」

私の視界が黒く染まっていった。意識が薄れる。どこかで、エヴァムの呻きも聞こえた気がした。

「力が欲しいだろう？ それならあげるよ。これ以上の犠牲を出したくないならね」

声が明瞭になってきたヴィーエは楽しそうに言う。ふわりと私……いや、私たちの身体が浮いた。フェリクスは口を開けて、何も反応できずにこちらを見ていた。

「逃げるんだ！」

私はとっさに呼びかけたが遅かった。次の瞬間にはもう、彼の腕に収まってしまった。

「な、何だ？」

フェリクスは外そうとするが、取ることができなかった。まるで肌と溶け合っているように、この腕輪が貼りついてしまったのだ。

「さあ、行ってごらん。彼女みたいな犠牲者を増やしてはいけないからね」

ヴィーエの高笑いとともに、世界が消えていく。フェリクスに何か伝えようにも既に遅く、私の意識は遠ざかった。